
HEART & SOUL ~ 争坑 × 慈愛

伊野村雅之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HEART & SOUL 争坑 × 慈愛

【Nコード】

N4698I

【作者名】

伊野村雅之

【あらすじ】

心の奥深くに響くもの……

心に宿る金の思い――

魂に語りかける想いは……

魂に宿る銀の願い―

く二つが重なる時、奇跡が起きるく

（この作品は執筆が終わりました。H E A R T & a m p ; S O U L
第一部作品です）

プロローグ（前書き）

雅之：はい、ノープラン話が始まりますよーあべしっ！！

涼華：何アンタ勝手にポケモン話始めてんの！？

静美：まあ、まあ、まあ……

雅之：いーじゃねーか、別に！っーかいきなり殴んなよ……しかもグーパンって……

涼華：アンタ、責任持ってこの話書ききなさいよ？

雅之：え、え？！

静美：……まさか、他の人に任せようとも思ってたんじゃ……

雅之：（や、やべ……！）

涼華：出て来て、Bean……

B e a n : カアンビー！

涼華：指を振る！！

『B e a n の 指を振る 攻撃！』

『B e a n の エアロブラスト 空気爆発！』

雅之：ウワアアアア……

『そして雅之は 星になった』

-

ブローグ

風が優しく吹く町……

ワカバタウン。

この町に住む彼女の名前はチユキ。

ポケモンにトラウマのある女の子――

ウツギ博士は悩んでいた。

そこで、博士は知り合いの新米トレーナーであるコトネを呼んだ。

20**/9/12

「チユキー、コトネちゃんが来てるわよー」

青みがかったポニーテールがピコンと動く。

「はい！」

ポニーテールをしているのは家の中だけ。普段は流した状態で、帽子をかぶっている。

階段を降りると、ショルダーバックと最新のポケモンアシスタント――P - p h o n e を渡される。

一見単なるケータイなので、チユキは何のためらいも無く

P - p h o n e を受け取った。

「チユキちゃん、早く〜！」

「待ってよ、コトネ〜!!！」

「…大丈夫かしら、こんな事して」

チユキを見送るカスミは不安そうだ。

「俺たちの娘なんだから、絶対大丈夫だよ。気にすんな、カスミ」

「……そうよね」

サトシはポケモンウォッチャーという新聞を持ちながら、カスミに向かつてほほ笑んだ。

「これで、ポケモンを外に出せるわね。出て来て、マイ・ステディ
ー！」

へアッ！

「俺も出すかな。待たせたな！ながい間閉じ込めてゴメンな、ピカ
チュウ」

ピカピーカ、ピカチュピ♪

ピカチュウは首を振って笑う。

「……ここが、ウツギ研究所……」

赤目に、銀色の髪をした少年が、その研究所を見ていた。

「……………」

今、何かが……

始まろうとしていた。

この、

ジョウト地方で――

-

プロローグ（後書き）

雅之：勝手に星にすんじゃねえ！！

涼華：あ、戻って来た。

静美：しかし、涼華のカビゴン… B e a n だっけ？

涼華：うん？？

B e a n：カビ？？

雅之：懷いてんな、相当。

涼華：ゴンベの頃から一緒だもん。

静美：そうなんですかー。

〔2009/10/30〕（2010/6/15改）

Chapter・1 謎の少年（前書き）

コトネ：チユキちゃん！

チユキ：……何？

コトネ：プロローグや幕間以外は私達がやるんだって……聞いてる？

チユキ：……謎の少年って、誰？

コトネ：聞いてないし……

Chapter・1 謎の少年

「サトシ。手紙来てるわよ、ポケモン協会から」

カスミはサトシに装丁の入った封筒を渡す。

「んお？」

ポケモンウォッチャーを机に置いて

蝋で止めた所から封を開けて

手紙を見る。

「何々…ふうん。リョーカイ」

サトシは立ち上がって

電話機に向かう。

「……もしもし、ポケモン協会ですか。サトシです、手紙読みました。……はい、はい……分かりました。…はい、明日六時にチャンピオンゲートですね。はい。では……」

電話を置いて、今度はカスミに告げる。

「白銀山の調査を任された。暫く家に帰って来れないかもしれないけど……」

「そう……出るのは明日から?」

「そうなるな。ポケモンの準備にちょっとマサラの実家に帰るよ。夜には帰るから」

「分かった。私も午後のジム業しなきゃだし……」

「忙しいな。まあ、家事手伝ってくれるバリヤードのリヤンがいるから問題ないだろ?」

サトシは扉を開けて、ムクホークを出す。

「そうね。じゃ、いつてらっしゃい！」

「ああ。ムクホーク、マサラまで大急ぎで頼むよ」

クホーッ！

サトシはムクホークの身体に飛び乗り、マサラに飛び立った。

* * * *

「待つてよ、コトネ！」

「あ、ごめん……チユキちゃんが足痛めてるの忘れてた……」

チユキは幼い時にポケモンに襲われ、その時に足を痛めた事から、ポケモンが怖くなってしまったのだ。

それはポケモン恐慌と呼ばれた時の出来事だった。

「ねえ、コトネ……用って何？」

「ま、まあ、良いから来てよ！絶対楽しいから！」

コトネの強引な所は今も昔も変わらないな。

…そこがいい所とダメな所なんだよね。

「……こっち、ウツギ研究所だね……？」

コトネはあからさまにギクツとした。

（分かりやすっ）

チユキは少しだけ顔を引きつらせた。

「ま、……良いから」

…もう、無駄な事は聞かない事にした。

チユキはP・phoneを見ながら歩く。

すると、トレーナー情報に行き着く。

「…んっ？」

ID No: 17592

名前: チユキ

お小遣い: 7000円

SCORE: 0

「あ、チユキちゃんお小遣い7000円なんだ。私は3000円だよー。良いなあ…」

「そりゃそうでしょ。私は十二歳、コトネは十歳なんだから」

「チユキちゃんの、アイシスホワイトカー！私は、ホラッ！オニキスブラック！」

そういつてコトネは自分のP・phoneをチユキに見せた。

「黒かあ、いいなー」

「そう？あ、そうだ！番号交換しようよ！」

「……………どうやって？」

「これ、簡単なんだよ！お互いの横を接触させるだけで出来るの」

コトネは更にスピードを落としてチユキの横に付く。

コトネがチユキの P - p h o n e の右側を自分の P - p h o n e の左側と接触すると……

相手の名前と写真が自分の画面に移った。

「へー、便利な物なのねえ……………」

「B U M P 交換って言うの。他にも色々出来るんだよ！例えば図鑑を搭載した物同士なら、チャットが出来るし、図鑑がなくても B B S にカキコ出来るし！」

「まるで小さなパソコンねえ……」

「そうだねー。はい、着いたよ」

目の前には予想通りウツギ研究所。しかし陰になっている場所に銀髪がちらりと見える。

「……ちょっと待って」

「うん?？」

チユキとコトネは研究所の横で中を伺っている銀髪の少年に気付いた。

チユキは少年に近付いて話しかける。

「あなた、ここら辺じゃ見ない顔ね。あなたは誰？」

少年は少しギクリとして振り返り、チユキを睨んだ。

冷酷な赤い目に、チユキは悪寒を感じた。

「……見てんなよ……」

少年はチユキを突き飛ばそうとしたが、頭を抑えられてしまった。

「言葉の使い方を知らないようね………?」

チユキは少年のポケットにP・phoneを当てていた。…記憶のどこかに引つかかるのはどうしてだろうか?

「ナツマサ………って言うの」

「!………めっ………」

ナツマサはP・phoneを取り出した。鮮血のような、紅い色をしているP・phoneだ…

「私の名前、覚えておきなさい」

チユキはナツマサを押さえていた手を離して、コトネの傍に戻った。

「どうだった?」

「大した事じゃないよ。とにかく、研究所入ろうよ」

「……そうなの?」

「いいから、ほら!」

今度は逆にチユキがコトネを引っ張って入った。

ナツマサは小さくチツ、と舌打ちをした。

「何者なんだ…あのチユキって女は……何処かで逢ったような…なんだ?」

思い出そうとすると、頭が痛くなった。

-

Chapter・1 謎の少年（後書き）

チユキ：ナツマサ……ね。

コトネ：なんか怖そう…

ナツマサ：…誰が怖そうだって？

コトネ：ギャアツ？！

チユキ：落ち着きなさいよ、コトネ。…でも、何処で会ったっけ…

ナツマサ：…俺も思い出せないんだよな…

？？：次回、最初のポケモンを選ぶぞ！誰が何のポケモンをもらうかな？

三人：……誰？！

（2010/7/13）

Chapter・2 最初のポケモン（前書き）

ヒビキ「ちーっす！俺、ヒビキ！」

チユキ「こんなんでも、一応私の幼馴染みです」

ヒビキ「チユキは相変わらずクールだなあ……」

コトネ「お調子者なんですよ、ヒビキさん……」

ヒビキ「言っな、コトネ……」

Chapter・2 最初のポケモン

「うわあぁっ！」

ドカシャーン！

研究所に入るなり、持っていた書類が埃のように舞い上がる……

「……大丈夫ですか？」

助手のヒトナリはコトネのお父さん。

チユキが書類を拾いながら声を掛ける。

「チユキちゃん！いやー、申し訳ない！」

ヒトナリは慌てて書類を受け取る。

「相変わらず、忙しそうだねーおとうさん」

コトネも残りの書類を拾っていた。

「……コトネ…そうか、もうすぐ旅立ちの日か」

ヒトナリの表情が陰る。

「厳密に言えばちょっと違うけどね。今日は博士にチユキちゃんを呼ぶように言われたただだから」

「あー、そうか……」

「チユキ、コトネ！」

後ろからチユキの幼馴染みの声。

「ヒビキ…あんたも呼ばれたの？」

キャップ帽を逆に被り、前髪が少し跳ねた少年―ヒビキは帽子をセツトし直す。

「ま、なー。リリイもいるけど」

リルリルッ！

ヒビキは十歳の誕生日にマリルをもらっていた。

この、ヒビキのリリィのお陰でチユキのポケモンへの恐怖はかなり軽減された。

おそらく、ヒビキはその成果を見に来たのだろう。

「ウツギ博士が三人を待ってるよ」

さあさあ！と奥に促される。

「ウツギ博士、チユキちゃんを連れてきました」

「ああ、ありがとう。コトネちゃん」

丸眼鏡にでこっぱげな若い博士が振り返る。

ちょうどパソコンを見ていたようだ。

「今さっき、ポケモンじいさんからメールが来てね。“今度こそ、本物ですぞ！”……なんてメールなんだよ。今時ポケモンの卵なんか珍しくもないだろ？……そうだ！チユキちゃん、君にお使いを頼んでも良いかな？」

「へ……？わ、私が？」

チユキはビックリした。

「勿論、パートナーになるポケモンを渡すよ。ヒビキ君のリリィの協力で、ポケモンを怖がる機会は減っただろうしね」

「ポケモンじいさんの家は片道三時間はかかる道程だ。わざわざそんな事のために行くのは面倒だ……」

チユキは眉を顰めた。

「博士、私もついてって良いですか？」

意外にも、コトネは乗り気だった。

「構わないよ！じゃあ、コトネちゃんが先にポケモン決めたらどうだい？」

「良いんですか？！チユキちゃん、良い？？」

話がどんどん先に進んでいく……

「……良いけど……」

チユキは窓の方をちらりと見た。銀髪がちらりと覗く。

赤目の視線を背中に感じている……

「そこにボールが三つ載っているだろう？今手前にあるのが草タイプのチコリータ、右奥にあるのが炎タイプのヒノアラシ、左奥にあるのが水タイプのワニノコだよ。どれも貴重なポケモンなんだ！」

「へええ……！どの子にしようかな……」

コトネが悩んでいる間も、チユキは窓の視線を感じていた。

(……もしかして……)

チユキは一つの可能性に気付いた。

「じゃあ、私は草タイプのチコリータにするわ！」

チコリータは勢いよくボールから出てきた。

チコリー♪

「かーわいーい！」

チユキはぶつぶつと考え始める。

(と、言う事は……炎か水……相性的には水だけれど……)

ヒノアラシは割りと大人しめな性格の可能性が高く、ワニノコは逆に暴れん坊な性格の可能性が高い。

(……ナツマサの心をこじあけるのは……)

「それじゃ、私はヒノアラシにしようかしら」

チユキがヒノアラシのボールに触れると、ヒノアラシはボールから飛び出してチユキの頭に落ち着く。

「重いぞー、Beat……」

ヒノヒノ……

ふとP・phoneを見ると、新たにポケモンの項目が出ていた。

タッチすると、ヒノアラシのデータが詳しく出る。

トレーナーメモ

おっとりな性格。

20**/9/12

ワカバタウンで L V . 5の時に 出会った。

粘り強い。

すると、コトネは憤慨した。

「えーっ、チユキちゃんずるーい！」

「ズルイも何も……私はただ単にヒノアラシが良くなって思ったんだもの。コトネもチコリータ選んだ時にそう思ったでしょ？」

チユキの言った正論にコトネはぐうの音も出なかった。

「私は、良いけど、って言ったのよ？」

「……うう、参りました……」

ウツギ博士は苦笑いした。

「じいさんの本物はいつもたいした事じゃないからさ、まーよろしく頼むよ！」

「分かりましたー！」

「それじゃ、いつてきます」

ヒビキは博士達の手伝いをする。

「…大丈夫そうですね」

「杞憂だったね」

「そうですね…」

ヒビキが手に持っているのは、ウツギ博士の新しい論文である

‘連れ歩きによるポケモンと人との絆’

だった。

-

Chapter・2 最初のポケモン（後書き）

ヒビキ：いきなり頭に乗られたよ、チユキ…

ウツギ：それだけ穏やかになったって証拠じゃないか。

ヒトナリ：……コトネ、大丈夫かなあ…

ヒビキ：ヒトナリさんは相変わらず娘ラヴだね…

ウツギ：ハハ。いつもの事だから、慣れちゃったよ（笑）

ヒビキ：（笑い事じゃねえし）

（2010/7/13）

く幕間く ポケモンの卵（前書き）

雅之：あべしっ！

『涼華の メガトンパンチ！』

涼華：遅いつ！で、出来たと思ったら幕間かいつ！！

B e a n：カビカンビ！！

静美：まあまあ、二人とも落ち着いて…

涼華・B e a n：あゝ？（カビ？）

静美：（この二人怒るとマジで怖いなあ…）

雅之：今回の幕間は後に影響するから入れないと分かんなくなるんですって！

涼華：ホホーウ、見てみようじゃない…

く幕間く ポケモンの卵

ちょうど一時間前まで遡る……

「ポケモンじいはん、お邪魔しますえ」

30番道路にある、ポケモンじいさんの家に一人の舞子さんがやってきた。

「スズナリタマオか。久し振りだのお」

「ほんまどすなあ…実はお願いがありんして……」

タマオは袂から巾着を取り出す。

「なんじゃ？」

「ホウオウ・ルギアの神話、ご存じでおすな？」

「透明な鈴と、海鳴の鈴が定めた者でないと辿れないと言い伝えられておる神のポケモンじゃな…金色の心と、銀色の魂がその鈴に反応すると言い伝えられている…」

「その心と魂を見定めるポケモンの卵が、ここに二つ…ポケモンじいはんにお預けしてもよろしおすか？」

巾着から比較的大きめな卵が出てきた。―どうやって入っていたのだろうか？

「ふむう、良い考えじゃの……わしからウツギ君に連絡してみるよ！」

「よろしゅうおたのもうします」

それを窓の外から眺めていた影一人。銀髪赤目の少年ナツマサだった。

（あの卵、使えるな……）

ナツマサは舞妓さんのタマコが出たのを見計らい、ニユーラを中に入れた。

「ニユーラ、卵ひとつを『泥棒』しろ」

ニユラッ！

ニユーラは素早い動きで卵を奪い、反対の窓から戻って来た。

ニユラ、ニユライ！

ニユーラは卵をナツマサに渡し、その後ヨシノシティに向かったのだった……。

-

く幕間く ポケモンの卵（後書き）

涼華：一週間使ってこんだけかい！

『涼華の メガトンキック！（急所）』

雅之：ほおお………

静美：涼華、あんたちよつとやり過ぎ…

涼華：ナツマサ、ニューラ持ってた？

静美：（ナチュラルに無視したよ、この人）

（2010/7/13改）

Chapter・3 共鳴（前書き）

チユキ：随分時間が掛かったけど……

コトネ：それだけ頑張ったって事ね！

チユキ：29番道路は割愛だつてさ。

コトネ：良いんじゃない？だってかなり頑張ってたよ！

チユキ：……

コトネ：……もう、さっさと行くなって事で！

Chapter・3 共鳴

二時間ほどで花薰り、潮香るヨシノシティに着いた。

チコリータとヒノアラシのBeatは29番道路のバトルでへたっていた。

チコオー…

ヒノオー…

元気が有り余っているコトネはヨシノシティを一気に抜けようとした。

「早くポケモンおじさんのところに行こう!」

そんなコトネをチユキは残った体力で突っ込んだ。

「あ、のねえ……ポケモン達も私も、疲れてるのよ……ポケモンセンターで、…休憩しない……?」

「えーっ？」

「一緒にお使い行くんだから他の人にペース合わせなさい!!」

体力が少ないのに、大声を出した為…

バッターーン！

チユキは貧血で倒れてしまった。

「キヤーー！？チユキちゃん！」

コトネはチユキを背負い、とにかくにもポケモンセンターに急いだ。

* * * *

その頃…

「ワニノコ……か……」

ナツマサはニューラに指示をした。

「あの窓をブレイククローで叩き割れ」

ニューラッ！

ニューラは素早い動きで二階の窓に到達した。

ナツマサは裏手の窓に周り……

ガッシャアアン！

「キヤーーツ！」

その声に、博士達は階段を駆け上がる。…誰もいなくなった研究室。

ナツマサは音無く入って残りのボールを取り上げた。

*
*
*
*
*

パチツと目が覚めると

B e a tの心配そうな顔……

ヒノヒノ…

すっかり回復しているみたいだ。

「あ、チユキちゃん！大丈夫？？」

コトネとチコリータもそばにいた。

「……うん、なんとか」

まだ頭はくらくらするけれど問題は無かった。

* * * *

「サヤカ!？」

ウツギ博士の奥様、サヤカは先程の悲鳴をあげた女性の事。

ヒビキもヒトナリも階段を駆け上がり、博士の居住スペースに移動すると…そこは酷い光景だった……

窓のガラスが砕け散り、サヤカとその息子、サトナリは大怪我していた。

「えーん!痛いよー!!」

「サトナリ!サヤカ!!」

“凍える風で全員の足を止める!”

ニユラウ!

割れた、窓の向こうからマイクロイヤホンを付けたニューラが飛び出して、部屋に凍える風を送り込む。

博士、ヒトナリ、ヒビキの足は凍り付き、身動きが取れなくなった。

「くっ!？」

「う、動けない!！」

「あのニューラは……」

ウツギ博士は、耳が半分切られたそのニューラに見覚えがあった。

ニューラは窓から外に出て行く。

* * * *

コトネとチユキ達が外に出ると海岸の方に人だかりが見える。

「何かやってるね…」

「チユキちゃん、見てこーよ！」

「あ、ちょ…ちょっと待って……」

コトネはチユキの手を引っ張って、海の方まで駆ける。

チコリータとBeatも後を追う。

♪

何やら軽快な音楽が鳴り出した。

どうやら、マーチングバンドの生演奏のようだ。

♪ サファリ サファリ 楽しいぞ

サファリ サファリ 面白いぞ

たくさんの ポケモンが

僕らを 待っている

♪ 広い 青空の 下で
軽やかに 投げる サファリボール
爽やかに 光る 汗が
忘れられない 出会いを 飾るよ
素敵な サファリゾーン

♪ 広い 星空の 下で
鮮やかに 決まる サファリボール
零れる うれし涙が
一人一人の 思い出 作るよ
素敵な サファリゾーン

周りからワーツ、と歓声が上がる。

「サファリゾーンって…タンバシティ先に建設中の？」

「みたいだね。でも、何でヨシノシティで宣伝してるのかなあ？」

それに答えるかのように、茶色い帽子を被った髭のおじさんが即席の足場に乗る。

『園長のサイカチ バオバから、報告があります！』

司会らしき人が、バオバ園長にマイクを渡した。

『えー、この度このヨシノシティからサファリゾーンへの直通の船を出す事を決定したのじゃ！』

周りが拍手喝采する。

ワアアア！！

『その名も高速船サファリ号！だが、まだこの名前は仮名じゃ。サファリ開催までのお楽しみと言う事で楽しみにして貰いたいのう！』

イエーイー！！

『このヨシノシティの市長と話し合いの末、港を立てる事になってしまったのじゃが……皆の意見を聞かないと気がすまない質でのお……』

皆は冗談と思っているのか、笑っていた。

「良いに決まってるだろー！」

「俺たちも賛成してるんだよー!!」

皆の暖かい声に、園長は泣きそうになっていた。

「あらら、本当みたいね……」

「優しい人なんだね、園長さんって」

チユキとコトネはお使いをすませる為、話半分にして30番道路に向かう。

…が。

ナツマサが立ち塞がった。

「あら、早かったわね」

「チユキ、俺と勝負しろ！」

ワニワニワ〜！

ボールから飛び出したのは、二人が選ばなかったワニノコだった。

「受けてたとうじゃない。行くよっ、Beat！」

ヒノヒノッ！

相性は、圧倒的不利だけれど…それは覚悟の上。

Beatはチユキの頭の上から飛び降りて戦闘態勢になる。

背中から炎が勢いよく燃える。

ヒッノー！

ワニノコもそれを見て、力を周りにアピールし出す。

ワッニヤー！

「やる気十分のようね。行くよー！」

すると、また園歌が響いて来た。

♪

Beatはその音が楽しくて仕方なかった。

名前のとおり、リズムを刻むのが好きみたいだ。

「！そうね、Beat。踊りましょ！！」

ヒノヒツノ！！

Beatは頷いた。

「ちょ、ちょっとチユキちゃん！？」

「ふざけやがって…ナメてんのか！」

ナツマサは怒り心頭に達していた。

「裏拍だよっ！」

二人はリズムに乗り出した。

「バカにしゃがって…ワニノコ、水鉄砲！」

ナツマサはリズムを無視して技を繰り出した。

ワ…ニャーッ！

♪ヒノヒッ ヒノヒッ ヒノヒッヒノ♪

狙いすました筈の水鉄砲は、リズムに乗ったBeatにアッサリと避けられた。

「何っ?!」

ワニャッ!?

♪ヒノヒッ ヒノヒッ ヒノヒッヒノ♪

「良いわよ!その調子!…」

♪ヒノヒツヒノー ヒノヒツヒノー♪

「♪周ってスピードスター♪」

ヒノーーツ！

ワニヤツ？！ワニヤアー！！

ワニノコは必中技をしたたかに受けて後ろにかなり吹っ飛んだ。

「な、何だと！？」

ナツマサは驚いて、後ずさる。

ワ、ワニヤツ！！

しかし、ワニノコはまだまだ元気なようでジャンプをして飛び起きた。

「ちっ、それなら接近戦だ！近付け！」

ワニヤッツ！

ワニノコはBeatに走って近寄る。なかなか俊敏なようだ。

♪ヒューノヒューノヒューノヒューノヒュー♪

Beatは香気に唄っている。しかし、コトネは気付いた。

「……あ……」

（鳴き声に歌を乗せてるんだわ。ワニノコの攻撃力はもうないに等しい！）

「噛み付く！」

「はたく！」

♪軽やかに 投げる サファリボール

Beatはリズムに乗ったまま、ワニノコの噛み付くをはたくで受け流した。

「そのまま体当たり！」

ヒノッヒ！！

ワニヤアッ！

ワニノコも限界に近い。

「負けるな、ワニノコ！！水の波動！」

ワ……ッニヤー！！

その為、特性の激流が発動して水の波動はいつもより巨大だったが
……

♪爽やかに 光る 汗が

♪ヒノヒノ、ヒ、ノ、ノ

「ジャンプして避けたなら、もう一回体当たり！」

ヒノーツ！

鮮やかに避けてからのこの攻撃が綺麗に決まり、ワニノコは目を回した。

「やったね！Beat！」

ヒノヒノツ！

チユキとBeatは抱き合って喜んだ。

ナツマサは歯噛みしながら

「次は……っ!？」

途中で言葉が止まる。

チユキが見上げると、

「え……？……！！？」

頭に何かが響くような、そんな感じがした。

痛みはない。ただ何かが共鳴しあっているような……

それが煩わしいものではなく。……何か懐かしいような気がした。

ナツマサは逃げるようにその場を離れた。

それを遠巻きに見ていたコトネが、チユキに駆け寄る。

「すごいね！相性不利なのに勝っちゃうんだもん！……どうしたの？」

Beatがチユキを不安そうに見上げているのに気づいたコトネは、チユキを心配する。

「……なんでもないわ……。本当に大丈夫だから……気にしないで」

チユキはさっと立ち上がって、コトネを伴い30番道路に向かうのだった。

Chapter・3 共鳴（後書き）

ナツマサ：……………

雅之：お？どしたんだよ？

ナツマサ：テメエ、なにしたんだよ…？

雅之：さあーて、何の事か？？

ナツマサ：とぼけんな！！何をした！？

雅之：あ、俺は何もしてないぞ？？

ナツマサ：嘘をつくな！

雅之：俺、嘘は言っていないけどな。

ナツマサ：じゃあ、なんだっただよあれ！？

雅之：思い出せないか？

(2010 / 7 / 13)

Chapter・4 事件！（前書き）

ウツギ…うっっ…さ、寒い……

ヒビキ…ゆ、指が悴んできました…

ヒトナリ…ばーっくしよい！

サトナリ…お母さん、寒いよー…

サヤカ…出てきて、ブーちゃん！

サヤカのポケットからブースターが飛び出す。

ブー…ブスタッ！

Chapter・4 事件！

30番道路に入ると、チコリータが何かに躓いた。

チコリッ！？

「大丈夫？チコリータ…」

チコリータは軽く頷いた。

よく見ると、何かの道具だった。

「何かしら、コレ…？」

コトネはその道具を拾いあげる。

しかし、チユキはその道具に見覚えがあった。

「これ、…ボールの中に入れる道具よ。お父さんが旅日記を書いた中であつた…確か…アスタッシュって言ったかな」

アスタッシユはボールを開閉させる為の内側につける物。パーツのみなら50円と非常に安価だが卸問屋に行かないと手に入れないのが難点。

「くわしーね、チユキちゃん」

「一回モンスターボールを分解した事があつてね。これとボールグレードによって決まった宝昌に、キャプチャ・ネットが在って初めて機能するんだよ。あ……」

「ん？何？？」

前から来るのは顔を強張らせた老人。

チユキとコトネは思わず固まる。

（（ひえ……））

「まったく、ウチの孫娘と来たら……」

チユキの持っていたアスタツシユを取り上げる。

「商売道具を落として行きよった」

そのおじいさんは溜め息を吐いて、袂にそのパーツをいれた。

チユキは父親から度々見せてもらっていたアルバムの中に……こんな風なおじさんと五才ぐらいのお孫さんがいた気が……

「あ、あの。もしかして……あなたはガンテツイツサイさんですか？」

「うむ……？なぜワシの名を知つとる？」

ガンテツは訝しげにチユキを見る。

「えと……」

チユキは解答に困った。

まさか本当にその人だっと思わなかったから……

「待てよ……その目…誰かに似ておる」

意外に、ガンテツさんは記憶力は良いらしい。

じつくりとチユキの顔を覗きこむ。

「うむう、思い出したぞ！サトシはおぬしの父親じゃな！？」

チユキはホッとした。強張っていた顔が一気に好好爺に変わったからだ。

「そうです。私のお母さんもガンテツさんにお会いしてるのですが……覚えてらっしゃいますか？ミズチカスミです」

「覚えておるとも！トゲピーを抱えた娘じゃな？」

「はい！」

コトネは話についていけなかった。

「チユキちゃん……この人、どなた？」

「あ、ゴメン。知らないよね……こちらはヒワダタウンでほんぐり職人をしていたガンテツイツサイさん。今はお孫さんが跡を継いだとお聞きしていますが……」

灰色の着物に下駄を履いた、一見して仏頂面に見えるその人は表情を曇らせた。

「オーキドの孫と比べると恥ずかしい程ダメダメでなー」

「ナナミ博士をご存じなんですか？」

やっと、コトネの知っている博士が出て来た。

「うむ。ナナカマドやオーキドなどの有名博士が亡くなってからはかなり努力したようじゃ」

そうじゃ、とガンテツは手を打ち、袂から二つの小さなケースを出してチユキとコトネに渡した。

「これも何かの縁じゃな。最近、このジョウトやカントー辺りの性

質が大きく変わってのお。不思議な事に、今じゃ木の実のなつていた木からぼんぐりが採れるんじゃ！昔はバックに直接いれてたんじやが……これはぼんぐりを入れる為の“ぼんぐりケース”じゃ」

ここで会ったのも何かの縁だから、とP・phoneで番号を交換した。

そして、ガンテツはヨシノシティへと歩いて行った。

チユキとコトネは叢をかき分けながら急いでポケモンじいさんの家に向かうと

家の方から素頓狂な叫び声が聞こえた。

「なっ、なーーーーーい?!?!」

チユキとコトネは顔を見合わせて、走り出す。

「急ごう!」

「嫌な予感バリバリするわね……」

二人は家に駆け込んで、開口一番

「どうしたんですか、ポケモンじいさん!？」

とコトネが言うと、

「あ、預かった卵のうち一個を何者かに盗まれてしもった!！」

ポケモンじいさんは確かにここに置いていた筈なのに、空白の窪みが一つあった…

「ええっ?!」

チユキはすぐ誰の仕業か判ったが、敢えて口を閉ざした。

と言うのも、気になるフレーズを耳にしたからだ。

(預かった卵が……ナツマサは何でそれを手にしたのかしら……)

「ともかく、取り急ぎウツギ君にこの卵を渡してくれ!」

「判りました。急いで戻ろっ、コトネ！」

「うんっ！！」

しかし。

向こうから突然ドアが開いて、チユキとコトネは派手にずっこけた。

「あららら、大丈夫？怪我しなかった？」

その声はどこかで聞いた事のある優しい声……

「ナナミ君？！イヤー暫く振りだねー！」

先ほど焦っていたじいさんは、一転態度が変わった。

「お久し振りですね。コガネラジオで収録があるので、こちらにも足をのばしたのですが…何かあったのですか？」

「なんて事はない。ただ、ある物が無くなつての……あ、イヤ。た
いした事じゃないからの」

ナナミが不安そうな顔をしたので、それをかき消すように否定する。

コトネとチユキは立ち上がると、目の前にはテレビで何度も見た顔
……

「ナ、ナナミ博士?!」

「あら、あなた達は?」

「私、サカキ チユキと言います!」

「私はクロツチ コトネです!」

ナナミはテレビで見るよりずっと端正な顔立ちをしていた。

ナナミはチユキとBeat、コトネとチコリータを見て目を細めた。

「うちの弟と、サトシ君みたいね、あなた達。」

チユキは別段驚かなかった。

それに、チユキは幼い頃ナナミと会った事があるが、
ナナミの方は覚えてないようだ。

「そっか、ウツギ博士のお使いね？」

「はい。それじゃ私たちは急いでるので……」

「あつ、ちょっと待ってくれるかしら？」

ナナミはコトネ達を呼び止めて、手に持ったバックから、メモリーカードを二つ出した。

「これは、“P - phone 対応ポケモン図鑑”の“ジョウトモード”の入ったカードなの。もちろん、全国モードにも対応しているわ。P - phone の電源を一度切ってから差し込んで、メインメニューからメモリーカードを呼び出せば……」

コトネが素早く言われた通りにすると……

“ソフト解凍。ポケモン図鑑ヲインストールシマス”

と、機械的な声。

“インストール完了シマシタ。再起動デ使用デキマス！”

チユキも慌ててインストールした。

「これで、使えるようになるわ。一度電源を切って、カードを返してくれるかしら」

コトネとチユキはメモリーカードを返して、

「「ありがとうございます！」」

と言って、急いで外に出ると、ワカバタウンのジュンサーがパトカーで待っていた。

「あれ、ジュンサーさん?!」

「詳しい説明は後でするわ。二人とも乗って!」

二人はパトカーに乗ると、車は道路を一気に駆け抜ける。

「ウツギ研究所から、ポケモンが盗まれたのよ」

「それって!んがんぐ……」

チユキは咄嗟にコトネの口を塞いだ。

（なんで止めるの? ナツマサ君なんでしょ、やったの!）

（良いからあなたはナツマサの事を誰にも言わない事。私が何とかするから）

（何とか……って……?）

「目撃者はいるのですか?」

「それが、いないのよ……」

「そう……ですか」

チユキは溜め息を吐いて、考え込む。

（って事は……ワニノコ以外にもう一匹いるのね）

「コトネちゃん、チユキちゃん。心当たりないかしら？」

コトネはチユキを見ると、チユキは小さく頷いた。

「ないです」

「私達はウツギ博士にお使いを頼まれただけですから」

「……そう、そうなの……」

ジュンサーさんは複雑な表情を振り払って、ハンドルを切ってヨシノシテイを横切った。

「……」

「……」

パトカーの中は静かだった。

チユキはP・phoneに今日の事を纏めていた。

“お使い、ナツマサ……手持ち予想ワニノコ・タマゴ……”

ナナミ博士……ポケモン図鑑

研究所事件―卵強奪事件……ナツマサ？”

これだけだが、何があったのかはすぐに分かる。

（ナツマサは……何をしようとしているのかしら……）

全ての謎は、チユキの抱えているタマゴにありそうな気がした。

P・phoneを口に当てて思案にふける。

（……預かった……タマゴ……確かにポケモンじいさんはそう言った……）

チユキは更に書き込んだ。

“タマゴ……何らかの重要なモノ???”

じつとそのデータを見つめて、

「ジュンサーさん。どうして発見が遅れたんですか？」

と、不意に尋ねる。

「え？あ……二階の窓ガラスが割られて…皆が二階にいった際に盗られたんだけど……足止めにニューラの凍える風を使われてね」

「ニューラが……」

チユキは“???”になっていた箇所を“ニューラ”に書き替えた。

もうすぐ、ワカバタウンに着く。

不穏な風が辺りを取り巻いている、あの始まりの場所に。

-

Chapter・4 事件！（後書き）

チユキ：見事ね、雅之にしては頑張ったじゃない。

雅之：も……指が悴んで……（震）

コトネ：カントーもジョウトもすっかり冬模様って事ね。

雅之：さぶい……

チユキ：情けないわね、いつもの雅之らしくないわよ……？どしたの、コトネ

コトネ：熱あるー！！

チユキ：なんですって！？

（2010/7/21改）

Chapter・5 それぞれの旅立ち（前書き）

チユキ：またエライ時間掛かったわね…

コトネ：良いじゃないの！

ヒビキ：うー、さぶかった……

ウツギ博士：サトナリとサヤカはヨシノ救急病院に搬送されたけど、大した怪我じゃないよ。

ヒトナリ：ちょっとホッとしましたですね。

雅之：では、本編をどうぞー！

Chapter・5 それぞれの旅立ち

二人が急いでウツギ研究所に入ると、

博士達は研究所の一角にブースターを囲って、暖をとっていた。

「皆、大丈夫!？」

コトネは皆……と言うか、ヒビキに向かって走り寄る。

「ちょっと凍傷になっただけで済んだよ」

ヒビキの手は霜焼けのように紅くなっていた。

「!暖めてあげる!!」

コトネはヒビキの手をギュッと握って、息を吹き掛ける。

ヒビキの顔は紅く、逆にヒトナリの顔は蒼白になった。

「ああ、コトネ！私はそんな娘に育てた覚えはないぞ！！」

「別に良いでしょ、幼馴染みなんだから」

……相変わらず、和ませてくれるね……

チユキは、遠目にその様子を見て目を細めた。

ウツギはチユキの腕にあるタマゴに気付いて寄って来た。

「ポケモンじいさんの、大発見！、は、タマゴか……今じゃ珍しい物ではないけれどね」

「そうですね。このタマゴの模様は見覚えあります。トゲピーですね」

「うん。そうだ！どうせならそのタマゴ、君が孵したら良いんじゃない？」

「私が……ですか？」

「チユキちゃんのお母様だって、トゲピーを孵した事あるし、それにこの子にとってそれが一番いいと思うんだ」

チユキは腕に収まったタマゴを見つめて、暫く考える。

「実は、ナナミ博士からポケモン図鑑を頂いたんですが……」

「そうか。それなら丁度良いね！この数十年で野生のポケモンの生息環境が変わっているみたいなんだ。良かったら調べてくれないかな？」

「……」

チユキは気付いていた。

いつも綺麗な白衣の袖口……

少し、紅く染まっていた。

ウツギは顔に出してなかったが、何も語らなくとも、チユキには全て判ってしまった。

だから、チユキは断れなかった。

「分かりました」

「ありがとう、チユキちゃん！」

B e a tは頭に乗ったまま、降りようとはしなかった。

「そろそろ降りてくれないかな、B e a t。疲れちゃったよ」

ヒノヒノー、ヒノヒノ

B e a tは首を振って拒否した。

「あんたねー、私を鍛えてどうすんのよ。B e a tも鍛えなきゃダメだよ？」

ヒノヒノー……

B e a tは顔をしかめて、拒否した。よっぽど居心地がいいのだろ

う。

「すごい懐かれ方だね、どう？怖くなかっただろ？」

「そうですね。おかげさまで……」

チユキの頭にBeat、腕にはタマゴ。

暫く博士と話した後、チユキは旅に出る事を両親に話す為に、一度家に帰る。もう夕方だった。

すると、カントーの方向からリザードンに乗ったサトシが飛んで帰って来た。

「お父さん、どうしたの？」

「オレか？明日から白銀山の管理を任されてな。準備するのに実家に帰ってたんだ」

「そうなんだあ……」

サトシはチユキの頭に陣取っているヒノアラシとタマゴに気付いた。

「チユキも旅に出るのか？」

「えっ……あ、う。うん……」

チユキは不安そうな顔をしているが、サトシはそんなチユキの頭を撫でる。

「心配するな。それに旅の中で成長する事も大事なんだから」

「う……うん……」

それでも不安な顔のままだった。

「ありがとう、リザードン」

リザードンはボールに戻った。

サトシの肩には、ピカチュウが顔を出していた。

ピーカピカ、ピカチュピ♪

手振りからして早く入ろう、と言ってるみたい。

「そうだな。ほら、チュキも」

サトシは家の扉を開けてチュキの肩をポンツ、と優しくたたく。

「お帰りなさい。サトシ、チュキ」

「「ただいま」」

夕食の席で、チュキは顔を上げた。

「お母さん、あのね」

「ん？なあに？」

「私、旅に出てみたい。昔お父さんとお母さんが旅したみたい」

Beatは足下で静かにポケモンフードを食べていた。それにしてもよく食べるなあ…

「懐かしいわね、旅なんて」

「ああ。俺とピカチュウなんて最初は喧嘩ばかりだったよな」

ピカピーカ、ピカチュピー

ピカチュウは深く頷いた。ピカチュウは机上でポケモンフーズにかじりついている。

「サトシの旅立ちの日、私マサラの湖でポケモン釣りしててねー」

「そう言えば、その時初めて会ったんだよなあ」

「初めて聞いたよ？」

チユキはちょっとビックリした。

旅立ちの日に出会ったんだ？！

「そんで何か流れで一緒に旅する事になったんだよな」

「あの時はお姉ちゃん達がいたからジムは任せっ放しだったわね（
^ー^；）」

まあ、今は二人とも良縁で結婚したから今のハナダは私がリーダー
やってるんだけどね。とカスミは続ける。

* * * *

その頃、コトネの家では……

「ダメって言うたらダメ！！」

「何だよ、良いじゃない！行っただって」

ヒトナリとコトネの攻防が始まっていた。

そんな様子を見て苦笑いしているのはコトネのお母さん、キョーコ。

「お互い意地が張り過ぎだわね……」

遺伝かしら、と何もしないでいるのに溜め息を吐く。

* * * *

ヒビキはと言つと。

「俺も旅に出ようかな……」

ヒビキは父子家庭だ。

ヒビキの親父さん……カナメは軽く噎せた。

「どうしたんだ、藪から棒に」

「いや、チユキが旅に出るかもって聞いてな」

「……あー、そういう事か」

カナメは肘鉄砲を付いてきた。

「ば、バーロー！そんなじゃねーよ！ただ心配で……」

「やっぱりそうか。でもあのサトシ君の娘だから大丈夫だよ」

カナメは箸を空中ですかして、また食事を続ける。

「チユキの親父、そんな有名なの？」

「知らんのか？サトシ君はお父上の仕事をサポートして子供の時から10年間、この日本を全て回った伝説のポケモンマスターなんだ！まあ、今は会社勤めしてるから余りポケモンを外に出さなくなっただがな…昔はそりゃあ大変な人気だったよ！」

カナメはサトシが十二歳の時に初めて会ったトレーナーで、それがきっかけで旅を始めたのだ。

「こう見えて、あの頃はサトシのライバルなんて言われててな。なっ、大河」

カナメの相棒、オーダイルは頷いた。

オダツ！

「へえ……」

「だから、結婚してこの町に来るなんて思いもしなかったんだ！」

「そーなんだ……でも、チユキって不器用だしなあ……」

「そんなに心配なら行けば良いさ。ついでと言っちゃなんだが、このタマゴを持って行くと良い。大河とリアン（ガブリアス）の間に出来たものだ。決して損はしないよ！」

「ふーん、…じゃあ貰っとくよ」

そして翌日。

サトシは朝早く、ポケモンリーグゲートに飛び立った。

それを見送ったカスミとチユキ。

「じゃあ、行つて来ます。お母さん！」

「お金は貯金性にしてるから無駄遣いもしないものね。引き出す時は電話してね」

「うんっ！」

チユキと、頭にのつたBeatはワカバタウンの出口に向かう。

すると、出口に見知った二人が待っていた。

ヒビキとコトネだ。

「どーせだから」

「私たちも付いてく事にしました！」

チユキは呆れ顔をしたが、

「仕方ないわね……」

と、口端に笑みを浮かべた。

今、三人の長い旅が始まる――

Chapter・5 それぞれの旅立ち（後書き）

雅之：結局、三人で旅立ちと言う。

チユキ：色々考えて、これで妥協したでしょ？

雅之：違うい！

コトネ：逆ギレ！？

ヒビキ：何でもいーじゃん！僕はコトネと旅出来るなんて思ってなかったけどね

コトネ：ヒビキのバカっ！（紅）

チユキ：……やっぱり一人で旅したい……

雅之：任せとけ、チユキ！

チユキ：マジでっ！？

雅之：ヨシノから一応分岐するからさ。

チユキ：お願いねっ！

雅之：了解です。おヒメサマ

(2010/7/21)

Chapter・6 46番道路の猛獣（前書き）

チユキ：早い！

ヒノヒノ！

コトネ：調子に乗って来たって事ね

チコリ！

ヒビキ：朝早くだから、風が清々しいなっ。

リルリルッ！

雅之：それでは、本編スタート あ、因みにシークレットゲストが最後に出ます♪

三人：……シークレットゲスト？？

Chapter・6 46番道路の猛獣

29番道路を歩きながら、

チユキとコトネは近辺の生態系を調査する。

「朝のポケモンはオタチとポツポとレディバと…コラッタだね」

「木に止まって寝てるのはホーホーとイトマル…かな」

なるほど。図鑑の時間切替えで活動時間が判るわけだ。

ちなみに、レディバは朝しか活動しないらしい。

コラッタは一日中比較的出るが、夜になると活動的になる感じた。

「あ、木の上にはクヌギダマとかタマタマもいるんだ…」

「タマタマかあ…いいポケモンね」

ヒビキは図鑑の搭載していないP・phoneを見つめて溜め息を吐く。

「ナナミ博士から貰ったんだろ。いいなあ」

リル、リルルッ！

リリイがヒビキの足下をチヨロチヨロ歩く。

コトネの足下ではチコリータがしっかりと歩いてる…が。

一匹は明らかに歩くのが嫌らしく、主人であるチユキの頭にひっついたままである。

チユキは諦めたらしい。

ヒノヒノッ

チコッ！チコチコリ！

チコリータは降りるようBeatを促すが、

ヒノヒノ！

Beatはツン、とそっぽをむいた。

チーコッ！

チコリータはそれが気に入らないらしく、ちょっと怒っていた。

「……どうもこの二匹は仲が悪いみたいだね……」

「本当ね……きっと最後の子が二匹の仲裁をしてたのかもね」

リリイは険悪な二匹の間に入る。

リルリルッ！リルル、リルリッ！

Beatとチコリータはリリイをギロツ、と睨み付け、また視線が

ぶつかるとツンとよそを向いた。

リリイはショックを受けて泣き出してしまつた。

…リルツ、リルルウ…

「あー、リリイ……あいつらの事には口出ししない方がいいよ」

ヒビキはフローしたつもりだったのだろう。しかし、

ヒノッ！「へっ？」

チコツ！「ちょ！」

Beatは火の粉を、チコリータは葉っぱカッターをヒビキに向けた。

「あぢっ！いててでえ！？」

「もうっ、Beat！いい加減にしないとボールに戻すよ？」

「チコリータもだよ！ケンカはだめっ！」

B e a tとチコリータはシュンとした。

ヒノ……

チコ……

チユキはこのままでは埒が明かないと判断した。

「コトネとヒビキは先に行ってくれる？私、ゲート向こうの生態調査に行くから」

「判ったわ。…ヒビキ、あなた大丈夫？」

「ギリ、大丈夫……手加減はしてくれてたみたいだから……」

よく見ると、大した傷にはなっていない。

）
）
）

ゲートを抜けると、そこは46番道路だった。

45・46番道路は別名“マウンテンロード”と呼ばれ、幾重にもある段差のせいで一方通行の道だ。

叢にはオニスズメやイシツブテがいる。

木の上にはエイパムやヘラクロスもいた。

チユキはタマゴをバックにしまい、Beatを抱えて座る。

「ね、Beat…チコリータちゃんの事、好きでしょ？」

ヒノ?! ヒノノノン!

Beatは背中から小さく炎を出して、首を振った。

「一緒に歩くの、恥ずかしいから乗ってるでしょ？」

B e a tは大慌てで否定する。

ヒノノノン！

……実に判りやすい。

「あのね、チコリータちゃんはヤキモチ妬いてるの。私の頭の上に乗ってるから。もしかしたら、だけどね」

…ヒノヒ？

ホント？みたいな顔でチユキを見上げる。

「男はガッツ！告っちゃいなよ！！」

ヒノツ……ヒノヒノツ！

B e a tはチユキの腕から飛び下りて

背中から火を勢いよく出した。

「その意気よ！」

グマアア！

後ろから、何だか怒った声……。

途端、チユキの体が浮かび上がった。

「きゃあ！？」

ヒノツ！？

チユキが横を見ると……

目付き鋭いリングマがチユキに牙を向いている。

グルルルル…

チユキは顔を青くした。

「Beat、逃げて!!」

Beatは一瞬怖じ気付いたが、リンググマに向かい、戦闘態勢になる。

ヒノオオ!

グマア!?

チユキを掴んだ左手は、爪が首に食い込みそうだ。

「くうっ……」

ヒ、ヒノッ!!

Beatは気合を入れると、炎を纏って回転し出した。

― 火焰車だ。

それが、左腕に命中してチユキを離すリンググマ。

グマッ!!

リングマも攻撃を仕掛けて来た。

左手を振り下ろして来たので、チユキもさっと避ける。

「切り裂く……!!」

しかし、リングマの左腕には火傷の跡。

「って、ヤバいつ!!」

リングマは信じられない早さで

乱れ引つ掻きを放って来た。

「きゃあっ!!」

ヒノオ!!

まともに引つ掻きを食らったチユキとB e a tは吹っ飛んだ。

リングマの姿が一瞬消え、

チユキに鋭い攻撃が入る。

「ぐうっ!!」

ヒノ、ヒノヒノッ!!!

B e a tは怯む事なく、リングマに突っ込んだ。

しかし、リングマの速さに敵う筈もなく、騙し討ちに倒れる。

ヒノオ!

リングマがチユキの首に手を掛け、今にも切り裂こうと右手を振りかぶる――

すると……

ヒ……ノォー！

視界が紅く染まり、リングマがその紅い攻撃に吹っ飛んだ。

グマアアア！！

チユキは鞆からボールを取り出し、リングマの胸に当てると……

ユラユラ

ユラユラ

ユラユラ

…カチン

チユキは首を庇いながら、ボールを取りに向かう。

「はぁ……はぁ……リングマ、GETおゝ……」

チユキはボタンとその場に倒れこむ。

すると、Beatの体が光り…マグマラシに進化した。

マグッ、マグマグ！

Beatは背中にチユキを背負い、急いでヨシノに向かう。

しかし、Beatも満身創痍で歩くので一杯一杯だった。

マ……マグウ……

ゝ
ゝ
ゝ

一方、ヨシノのポケセンでチユキを待つヒビキとコトネ。

ジョーイさんから気になる事を聞いていたのだ。

46番道路に、人を襲うリングマが現れるという嫌な話だ。

昨年から被害が出て来て、今まで十五人が重傷、三人が死んでいる。

「チユキ……大丈夫かな……」

「やっぱ……気になるよな」

ヒビキとコトネは顔を見合わせて、外に急いで出る。

と……

ボロボロのマグマラシに気絶して乗っているのは、チユキだった。

「「……！」」

マ……グ……

マグマラシも力尽きてその場にへたりこんだ。

「俺はチユキを救急病院に連れてく！コトネはマグマラシを頼む！」

「判ったわ！」

「待つて……ヒビキ……」

チユキは薄目を開けて

コトネにボールを二つ預けた。

「Beatと……Wildを、よろしく……ね」

コトネはしっかり頷いた。

Wildはボールの中で火傷を痛がっていた。

コトネはもしかして、と思った。

(まさか、このリングマ……)

* * * *

次の日…

検査の結果、チュキの怪我は奇跡の軽傷ですんだ。

Beatがリングマにダメージを与えたのが良かったようで、腹部のダメージも比較的軽かったのだ。

明後日には退院できる、との事だ。

コトネとヒビキはホッとした。

しかし、チュキが掴まえたリングマは果たしてまともに戦う事が出

来るのか。

ポケモン協会に審議を掛けられる事になった。

「とにかく、大事にならなくて良かったな。チュキ」

「Beatが戦ってくれたお陰だよ！ねっ？」

マグマグッ！

二人と一匹はこの病室に来ていた。（衛生上、患者のポケモン以外は出してはいけない決まりがあります）

「Wild……どうなっちゃうのかな……」

「どうなるかはまだ判らないけど……やっぱり育てたいんだ？」

ヒビキがチュキに訪ねた。

「うん。……初めて掴まえたポケモンだし……それに、Wildがあなつたのは人間のせいかも知れないから……私がちゃんと教えてあげたいなって思ったんだ！人間、捨てたもんじゃないってね」

「チユキは…強いね。スゴいや」

コトネは感嘆の言葉を挙げる。

「そんなんじゃないよ。どんなポケモンともちゃんと向き合う事が必要だって、お父さんから教わったんだ」

病室の外、その話を聞いていた一人の女性が居た。

「……さすが、サトシさんの娘ね」

黒い髪を結わえた女性は花束とモンスターボール、手紙を病室の扉横に置いて彼は、その場を後にした。

「それに比べてウチの旦那は……」

彼女は顔に影を落とした。

…あの人は、これからどんな未来を描くのだろうか……想像出来ない。

「チユキちゃん、あの人を救えるのはあなたとあの子しかいないの……」

彼女はその言葉を呟いて病院を去っていった……

-

Chapter・6 46番道路の猛獣（後書き）

Wild♂（リングマ） Lv・32

やんちゃな性格。

20**/9/13に46番道路で

Lv・32の時に会った。

物音に敏感。

……

ヒビキ：あれ…？誰か来たみたいだ。

ヒビキは扉の側にあつた花束に気付いた。

コトネ：へえ？

チユキ：誰が来たんだろうね…

ヒビキ：あれ、ボールが入ってる。

…

雅之：シークレットゲストはオーキドユカリさんでした！

この人は、シンオウチャンピオンエースの称号を2008年に獲得し、あの人物と大恋愛の末結婚したのですが……

オット、ここまでだね。この話をネタばれするところでした。

ではでは今回はここまで……

-

Chapter・7 蠢く鬨（前書き）

コトネ：何だか…嫌なタイトルね…

ヒビキ：今回、俺ら出ないから。

コトネ：ていうか、シリアス部は私ら考えてないんだって。

ヒビキ：は？！

雅之：お前らはコメディに向いてるってこった。それに元々はチユキ一人の旅の予定だったからなあ……

それに、こうなった以上お前らも奴等と対峙してもらっからな。まだ詳しくは話せねーけど……奴等かなり手強いぞ。

コトネ・ヒビキ：……マジで……？

-

Chapter 7 蠢く鬍

モンスターボールにWildが居るのに気付いたヒビキ。

花束から落ちた手紙をベットの上で開くチユキ。

サカキ チユキ殿

ポケモン協会の査定に於いて、貴方のポケモンリングマをお返しする事にしました。

時に人を傷つけて来たリングマですが、捕獲した貴方を認めているようです。

大事に育ててください。

ポケモン協会会長

ヤマト ハルキ

「よ……よかった」

ホッとしたチユキは、ヒビキからボールを受け取る。

ボールの中で、W i l dは顔を赤くした。

「よろしくねっ、W i l d！」

W i l dは小さく頷いてチユキを見た。

その夜……

W i l dには気掛りがあった。

ポケモン達と戦う際、自分の爪は強すぎる。下手をすると殺してしまいかねない。

それに自分には大きな秘密があつて……

そんな時、

「出て来て、W i l d」

開閉ボタンを押してチユキはW i l dを外に出した。

ガ、ガウ？

何だろう、と訝しがるW i l d。

「その爪、手入れしてあげる。おいで」

W i l dはおずおずとチユキに近付く。

爪切りをコンパクトポーチから取り出して

パッチン、パッチン

と切っていく。

チユキの手は自分より小さく、この娘を殺しそうになったというのに……

こんなに優しくしてくれている。

それだけでW i l dは嬉しかった。

「最近ヒメグマを乱獲するハンターがいたそうね。掴まったそうだけど」

チユキのその言葉にハッと息を呑むW i l d。

ガウ、ガガウ！

W i l dは違う、そうじゃないと首を振った。

「……様子が違うみたいね……何があったのか知りたいけれど、……ポケモンと話せたら良いのにな」

チユキは爪切りの手は止めずに話を続ける。

W i l dは言いたい事がたくさんあった。

しかし、伝えられないもどかしさで溜め息を吐く。

クウー……

「でも、安心して。これからは私があなたを守るからね。…だから色々手を貸してね」

W i l dは静かに頷いた。

爪の手入れが終わり、サツパリした手を見てチユキはニコッと笑った。

W i l dもつられて笑っていた。

）
）
）

「ここか…あのリングマを捕獲したというトレーナーがいる病院は…」

人気のなくなった病院の廊下に、その人物は白衣を来て現れた。

その人物が千幸の部屋を訪ねると、チユキはモンスターボールを手に持って寝ていた。

そのボールを彼は取ろうとしたが、チユキの手は離れなかった。

「く……っ」

むしろ……

「ん……」

と唸って寝返りをうった。手に持ったボールはベットの中へ消えていった。

彼は取るのを諦め、病室を後にした。

「……ちっ、まあ時間はたっぷりある。あのリングマを何としても手に入れなくては……」

その者は白い制服を脱ぎ捨て、五階の窓からドンカラスを出してその足に捕まる。

カアアーーー！

不吉な鳴き声が夜空に響いた。

Chapter・7 蠢く翳（後書き）

コトネ：……誰？！ちょー怖いんですけど！！

ヒビキ：しかもドンカラスって……

雅之：あれで下っ端だ。まーお前なら大丈夫だろ。

ナツマサ：おい、聞いてないぞ。あんな奴等……

雅之：何言ってるんだよ。少なからずお前は知ってっ筈だ。蒸発した親父さんがやってる事だからな…

ナツマサ：親父の事は言うんじゃないっ！！

雅之：良いか。お前も運命から逃げらんないんだ。いい加減気付け。

ナツマサ：……ちいっ……

(2007/21改)

Chapter・8 秘湯との出会い(前書き)

ヒビキ「一転して和やかムード」

コトネ「やっぱり平和が一番ね」

チユキ「やつとはっちゃんける」

雅之「チユキ、二日も病院いたからなあ……そろそろ素を出しても良いだろう」

チユキ「雅之様」大好きっ!!」

雅之「バツ／＼／＼おまつ、はっちゃんけ過ぎだ／＼／＼抱き付くなっ、離れろっ!」

コトネ「後、チユキちゃんのちょっとしたトリビアだよ。」

ヒビキ「チユキの家族の事も解るらしいぞ」

雅之「抱き付かれたままですが……こほんっ／＼／＼、本編をどうぞ！」

-

Chapter・8 秘湯との出逢い

翌日、三人は漸くヨシノシティを後にした。

キキョウシティまではランニングシューズを使えば二日で行ける行程だ。

なので、今日の夜までには31番道路キャンプベースに着かなくてはならない。

ちなみに今日は9月15日だ。

時間は朝の七時だ。

息を大きく吸い込んで、チユキは背伸びする。

「潮風が気持ちいい…！」

「段々冷え込んで来てるけどね…」

三人は秋冬仕様のあったかい帽子に変えていた。

内側にファーが付いていて、これがなかなかいい按配なのだ。

指先の冷えやすいチユキは更に、薄手の手袋をした。

リングマのWildを外に馴らす為、マグマラシのBeatにはボールに入ってもらった。

ヨシノシティは潮風にのって花の香りもする。その香りに、Wildの顔がほぐれる。

「いい香りだねっ、Wild!」

ガウ!

「こーして見ると、結構遅いなあ!」

ヒビキが感嘆の声を上げる。

マリマリ〜。リルッ?!

マリのリリイはW i l dがあんまり大きいので、後ろにコロ
ンと転がってしまった。

チコリー……

チコリータは冷ややかな目でW i l dを見ている。

何よりも自分より先に進化したB e a tも、嫉妬していた。

だから、チコリータがW i l dに対して冷たくしたのも無理は無か
った。

がう
♪

と挨拶したW i l dに、チコリータはつんと外方を向いた。

…チコッ

意外に繊細のようでW i l dはシュンとしている。

ガウ……

「あ、…チコリちゃんそれはダメだよ……？」

‘私、知らないけど’と言った風につーんとして先頭に立った。

チユキはよしよし、と優しくW i l dを慰める。

30番道路は29番とさして変わらなかったが、ここでは叢に多くの虫ポケがいた。

ビードルにキャタピー、朝方だからレディバの群れが飛び交い、川面にはニョロモやコイキングが跳ねている。

実に平和な道路だ。

川面からパシャツ、と水音がして…ふと池を見ると、水草のような

ポケモンがこちらをちらちら見ていた。

チユキがカメラスキャンすると、図鑑が自動的に起動してポケモンの説明が読み上げられる。

『全国ナンバー270。ハスボー。浮き草ポケモン。高さ0・5m。重さ2・6kg』

…説明と言うより、紹介に近いが、序で画面に説明が出た。

「へー。温暖な気候を好み、暖かい水溜まりに生息。頭の葉っぱは泳げない小さなポケモンを運ぶもの」だって！」

リリイはそのハスボーが気になって話しかけてみた。

リルリルッ、リルリー？

ハスハスッ。ハスハスボッ

リリイはその池に入ってみる。

リル…リルルル…

どうやら程よい暖かさだ。

チユキがその池に触れると

「んっ?!」

さらにその水を舐めた。

「しよっぱ!!これ、高濃度ナトリウム塩化物泉だよ!」

「へ?」

「なんだ、それ?」

チユキの父方は温泉を効き湯出来る温泉ソムリエを持っている関係で、チユキも多少なりとも温泉の知識があった。

「簡単に言えば、海水の温泉よ。すごい、これ……リリイ、お願い出来るかな？下から温泉が湧き出してると思うの。見て来てくれる？」

リルリッ！

リリイは息を吐いて池に潜った。

マリルの尻尾は浮き袋になっていて、通常はその浮き袋のせいで深くは潜れない。

しかし、緊急の時は息を吐く事により、浮き袋の空気を無くす事が出来て、深く潜る事が可能なのだ。

リリイは池の底に着いて、さらにお湯が湧き出す箇所を見つけた。

不用意に近付くと、あまりの熱さに堪らず急浮上した。

マアリイイイ！！

「あそこが吹き出し口ね……やと思った……」

「リリィー！戻って来ーい！！」

リルルルー！

リリィは信じられない速さで岸に戻って来た。

どうせ急ぐ旅でもないのだから、と三人は天然温泉にはいる事にした。

勿論、水着着用して、だ。

「ふへえー…気持ち良い」

コトネは髪をお団子状にして、顔を緩ませていた。

「まさに天然露天温泉だなあ。上の温度は適温って事は源泉はもっと熱いのか？」

ヒビキがチユキに尋ねるが……

「チユキちゃんならシュノーケル着けて温度計持って潜ってたよ？」

「……さすが、温泉ソムリエール……」

チユキは確かにシュノーケルを持っていた。しかも髪が絶対濡れないよう、特殊なフルフェイスシュノーケルだった。

右手には温度計、左手には栓を付けた試験官を持っていた。首にはデジタルカメラを引っ提げていた。

深さは約10メートルで、見上げると、岸に腕を乗せて足をたゆませるヒビキと立ち泳ぎをしているコトネ……

この温泉のせいか、あまり見た事のない水ポケモンさえいた。

桜色をした美しいポケモンや、クラブのようだけれどザリガニっぽいポケモン、マントインを小さくしたようなポケモンに、ムツゴロウのようなポケモンまでいた。

水ポケモンにとってここは秘湯なのだ、とチュキは気がついた。

ウォーターブルーフのデジカメでポケモンを撮影する。

ポケモン達はたゆたう様に優雅に泳いでチュキを喜ばせてくれた。

源泉の温度は47度で、温泉の水質を詳しく分析してもらった為、試験管に直接源泉を入れた。多少熱いものの、その熱さをもろともしていなかったチュキにポケモン達は関心していた。

コロコロ！

ムツゴロウのようなポケモンは泥から飛び出して、チュキの体にすり寄って来た。

「……？」

コロコロ♪

（か、かわいいい！！）

チュキはそのポケモンがあんまり自分に懐くので、ホウエンの友達

からもらったダイブボールを見せてみると……

コロコロッ！

そのポケモンは頷いて自分からボールにぶつかって来た。

チユキは急いで浮上して、

「ドーン！」と叫んだ。

「うお?!」

「チユキちゃん!? どうしたの??」

「ムツゴロウみたいなポケモン、獲ったどー!!」

試験管と一緒に握られたダイブボールを水面から出す。

「なんで黄金伝説の濱口さんの真似してるの?」

「言ってみたかったのー！」

チユキのP・phoneが新しいポケモンを獲得したのを読み取り、そのポケモンの詳細が写し出される。

『全国No.258。ミズゴロウ。沼魚ポケモン。高さ0.4m。重さ7.6kg』

「『ホウエンの水ポケモン。普段は池や川の底に堪った泥に体を埋めている。頭のヒレは敏感なレーダー』だって！」

思い出した！確か、お父さんと旅をしていたタケシさんとか言う人の手持ちにこの子がいたっけ！！

「写真で見てたから、あなたの事知ってたんだ！私！！」

チユキは早速ボールからミズゴロウを出して名前を考える。

暫くして……

「これから宜しくねっ、Bore!」

「コロ?」

ヒビキはその意味を解りかねていた。

「ぼあつて……コトネ、解るか??」

「温泉や井戸を掘る事を^{ボーリング}boriingって言うのよ。boriingじゃカッコつかないから原形のbore（意味：、穴などを、掘る）にしたんじゃない?」

コトネとチユキはトレーナースクールで特殊課目の英語を習っていた。

いつか外国のトレーナーと戦う事を夢見て学んでいたのだ。

「……やっぱお前らすげーな。」

「今やコガネシティにもGlobal Trade Station（↑メチャクチャ流暢）があるんだから、会話出来たら楽しいでしょう?」

「…そんなもんかね…俺はポケモン出来ればなんだって良いけど」

ヒビキが少し愚痴るとそれがコトネに聞こえていたらしく、

「チコリ、体当たり」

「いつてえ!!」

そんな二人をチユキは目を細めて見ていた。

-

Chapter・8 秘湯との出逢い（後書き）

雅之「はい。ここで恒例トレーナーメモ！」

B o r e ♀

頑張り屋な性格。

20**年9月15日

30番道路で

Lv・5の時に

出会った。

少しお調子者。

ヒビキ「あー。確かにお調子者っぽかったからなあ…納得」

（2010/7/21改）

Chapter・9 キャンプベースへ（前書き）

ヒビキ：っふはー。気持ち良かったなー、露天風呂！

コトネ：そっだね、ヒビキ！

マリマリッ
♪

チコリー……

チユキ：さてと、行きますか。

ヒビキ・コトネ：うん！

チユキ：……ほんと、仲良いね。あなた達……

二人顔を見合わせて、

ヒビキ：そりゃ、幼馴染だしな……

コトネ：普通だよねぇ？

チユキ：（無自覚かい…）

-

Chapter・9 キャンプベースへ

「良いなあ、ナナミ博士からポケモン図鑑貰うなんて…羨ましいな…」

ヒビキは未だに二人の持っている図鑑を搭載したP - phoneに憧れを抱いていた。

良いな、良いなと連呼し続けるヒビキに、チユキとコトネは辟易していた。

「もう、女々しいわね！ヒビキ、あなた男の子でしょ？」

「だって羨ましいもんは羨ましいよ。ね、コトネ少しだけ見せて」

「い、や」

「ケチ」

「ヒビキには絶対見せてやんない」

「…相変わらず可愛くねー。なあ、コトネ」

「い・や・よ」

「まだ何にも言ってねーじゃんか…」

そんな二人の言い合いを聞きながら先頭を歩くチユキとリングマのWild。

—！

不意に、別の気配を感じたチユキは二人に向かって「静かに」と呟いた。

「…どうしたの、チユキちゃん？」

「何だか、様子がおかしい気がする……」

今は丁度ポケモンじいさんの家が真横に見える位置。

お昼前だ。三人が温泉から上がって、もうかれこれ5kmは歩いていた。

だと言うのに、トレーナーが誰も……いや、何処にもいないのだ。
様子がおかしいのを感じ取ったチユキは二人の会話を止めた。

「Wild、戻って… Bore！様子を探ってくれるかしら？」

コロッ！

Boreは頭のヒレをピンと立たせ、状況を探る。

空気中が緊張感を誇張させる…プレッシャーの特性を持つポケモン
が自分たちのそばにいるらしい。

Boreはそのポケモンがいる方に目を向けた。

チユキもそっちのほうを注視しながらまた、ポケモンを入れ替えた。

その瞬間、何者かの攻撃を受けたが、Wildは無傷だった。

「騙し討ち！！」

必中技を受けて、倒れたポケモンは――ヨノワールだった。

次いで、マグマラシのBeatがボールから勝手に飛び出して来た。

「……？」

――来る！

複数のポケモンの気配を感じると、P-phoneが反応しているのを感じた。（バイブ）

チユキのP-phoneのポケモン画面に、新たな技が現出した。

それは、Beatの潜在タイプと合わさった究極とも言える技で……

「Beat！バーンブrouガ（炎を纏いし風）！！！」

それは、チユキを守るために出したあの時の技で、また目の前が紅い技で包まれた。

マ、グー――ッ！

「わっ!？」

「す、凄い技……!」

幾つかあるポケモンの影が倒れ、撤退する二人の男の影……

「んだよ……無茶苦茶つえーじゃねえか……」

「くっ……ひとまず退散だ……」

ポケモン達は赤い光線を受けて、ボールに戻っていった。

妙な気配が消え、Beatは疲れた様子を見せていた。

『バーンブロウガ タイプ・炎 潜在タイプ・飛行 威力180
命中率――(必中) PP4/5 “体内にある炎をはじき飛ばして
敵に攻撃。防御と特殊防御が三段階下がる。”』

新たな項目である“潜在タイプ”。

「無理させちゃったね……ゆっくり休んでね、Beat」

Beatは小さく頷いてボールにおとなしく戻った。

チユキも初めて聞く“潜在タイプ”。

考察しようとするその時、コトネとヒビキが横から入って来た。

「な、なんなの??」

「俺ら、全く状況判んないんだけど……」

チユキは困った様に頭を掻く。しかもそれはかなり豪快だった……

「明鏡止水。……わかるかなあ、曇りのない鏡と静かな水って似てる様で違うでしょ?つまりは心を無にするって事。お父さんはそれでフローゼルに冷凍パンチを習得したんだって」

「……つまり、どういう事なんだ?」

「トレーナーも、訓練さえすればそれを使う事が出来るのよ」

あの、静かにしてと言った時……

あれでヨノワールを探知したのか…

流石ジムリーダーを母親に、全国リーグマスターの称号を持つ父親の娘である。

単なる強さと優しさだけではない。

的確かつ、効率的な技の出し方は母親に、大雑把で明るい点は明らかに父親の血を引いている。

それも、自分で探知して尚ポケモンの能力を使って確認するとは……

まさしく、“石橋を叩いて渡”っている。

しかし、チユキがここまで特訓していたなんて二人は知らなかった。

ポケモンは時に凶悪な怪物の一面を我々人間に見せる。だから、ポケモントレーナーは彼らをよく理解する必要がある。

その為には己自信が彼らに怯えていてはならない。常に思いやる事でポケモンとトレーナーは信頼し、未だ見た事のない成長を遂げるのだ……

と、チュキは父親から教わった。

気持ちを穏やかにする事で、ポケモンのその日の体調を把握する事は重要だ。心頭滅却は、母親から教わった。

* * * *

31番道路のキャンプベースに着いたのは、日も随分落ちて来ていた五時だった。

キャンプベースはその名の通り、旅行くトレーナーの為の宿泊施設。トレーナーカードさえあれば、そのキャンプベースに泊まる事が出来るのだ。

そのキャンプベースはログハウスに近い外観を持っていた。

この31番道路キャンプベースは暗闇洞窟と繋がっている事もあり、割りと忙しいキャンプベースの一つだ。

カードをベースリーダー（管理人と思って頂くと分かりやすい）に見せる三人。

「はい、君達の部屋の鍵だよ。無くさないでね」

代表してヒビキが受け取った。

「俺達は“松風”か」

「洪っ……」

「分かりやすくっていいじゃない！それに昔は野宿が一般的だったのよ？こーいうキャンプベースが出来てトレーナーは旅がしやすくなっただけだからね！」

そうなのだ。昔は大きいリュックにキャンプ用具を担ぎ、トレーナ

ーは旅をしていた。

その為、昔のトレーナーは無駄に体力が強い。しかし、問題もあった。

そう、人間に恐怖を抱いたポケモン達が寝ているトレーナーを殺すという、あの暗黒の三年が、全世界に多大なる翳を落とし、子供たちはみなトレーナーになりたくないと言ったのがきっかけで、道路ごとにキャンプベースを建設する事になったのだ。

ベースリーダーは名のあるトレーナーが主だった。

チユキの父親も一時シンオウの難所に位置したキャンプベースリーダーだった。

トレーナー以外はバスや、ポケセンにいるテレポートじいさんに頼んで遠路をいくのだ。

便利な世の中になったものだ。

松風の部屋は他にも数人が使用していた。

キャンプベースは元々部屋数が少ないので、（その代わり、一つ一

つがだだっ広い）こういう事がよくある。

そして、こんな事も稀にある。

「シンヤおじいさま!？」

「うん...? おお、チユキか!」

サカキ シンヤはロケットグループの元CEO、現在はジムリーダー業に専念している、筈だ。

何故こんなキャンプベースにいるのだろうか？

「おじいさま、トキワジムを空けてこんな所で何をしていらっしゃるのです?」

「若いのに任せた。なあに、心配はいらんさ」

昔はCEOとトキワジムのリーダーを兼任していたが、浦山夫婦に任せてからはジムリーダーに専念していた。

時に、トレーナーズスクールの臨時教諭として働くので、忙しい事

この上ない。

だから、誰にも干渉されない一人旅に出た……と、そういう訳だ。
もちろん、自慢のポケモンもいる訳で。

んニヤアゝ

「あ、ススだ！」

随分年老いたニヤースが、シンヤの足下にいた。

チユキが首を撫でると、ゴロゴロと嬉しそうに鳴く。

「……いつぐらいだっけ、ススが喋れなくなったの……」

「二年も前だ。皆の前で突然声が出せなくなってな……」

そんな二人を見て、会話に入れないでいるコトネとヒビキ。

(ね、いづらくない?)

(……ああ、つか。会話ちょー暗いんですけど!!!)

「そうだ。おじいさま、私も旅を始めたの」

「おお、そうか！それは良い事だな…後ろの方々は旅の連れかい？」

シンヤはチユキの後ろの人達に漸く気付いた。

「うん！紹介するね。こちらはシンドウ コトネ、こっちはガンテ
ツ ヒビキ。私より二つ年下だけど幼馴染みの」

161

ヒビキはというと、図鑑機能の搭載されていない P - p h o n e を
不満そうにじっと見ていた。

「彼はどうしたのかね？」

「あー……ナナミ博士から図鑑貰ってないんでふて腐れてるんです
……」

コトネが困ったように説明する。

そんなヒビキを見て、シンヤはバックから何やら取り出した。

「それなら、このmicrOSDソフトに入ってるのをインストールすれば良い。まだニュートラルの物だし、君なら正しく使いこなせるだろう」

「マ、マジですか?!」

ふて腐れた表情から一転、パアツと笑顔になる。

流石、前身のポケモンアシスタントを製作しただけの事はある。

フットワークが驚く程軽い。

“インストールが 完了シマシタ!”

チユキ達のP - phoneが昨日発した言葉がヒビキのP - phoneから発せられた。

「やったあ！図鑑だ〜！！」

「ちょ、ヒビキ！しいっ（・・・）」

コトネは周知から顔を紅くした。

こうして、旅の夜は更けていった――

-

Chapter・9 キャンプベースへ（後書き）

シンヤ：孫とこんな所で会つとは、思ってたぞ？もつと先へ行つてるかと思つてたからな…

チユキ：ああ、まあ事情がありまして（汗）

シンヤ：まあ、頑張りなさい。

雅之：色々盛り込んだ結果長くなりました（汗）

そして後書き途中^{ここ}で寝落ちしてた…

やべえやべえ！それじゃあ、また次回をお楽しみに！！

（2010/7/21）

Chapter・10 ポロポロのポケモン（前書き）

チユキ：まだ…… 9月15日なのね……

雅之：っせーなあ……仕方ねーだろ？

コトネ：今回は私がフィーチャーされるのよね！

シンヤ：私も出てるよ！

ヒビキ：俺、今回セリフ少なえ…（泣）

雅之：次は出番作るから、なっ？

ヒビキ：……。わぁーったよ。

-

Chapter・10 ポロポロのポケモン

そのポケモンは実験に依って体がポロポロになってしまった。

あてどもなく走り続けるそのポケモンの名は…タツベイ。

それも、体の色は鋼のような灰色で目は夏の空のような水色だった。

ガ、ガウウ……

満身創痍のタツベイは次第にその足が動かなくなっていくのを感じていた。

ヨタヨタと山を越えると、キャンプベースが視界に飛び込んで来た。

ガウ…！

*
*
*
*
*

その頃、コトネはチコリータのチコリと一緒にテラスに出て星空を眺めていた。

「綺麗だね、チコリ」

チコリー…

今にも零れ落ちそうな星明かりに、チコリは目を奪われる。

ガオォーン！

何かの嘶きが辺りに響いた。

コトネはその嘶きが普通じゃない事を感じて、チコリをボールに戻した。

「…戻って、チコリ」

キャンプベースから離れ、嘶きの聞こえた方に急いで向かうと…

ボロボロのポケモンが辺りのポケモン達を威嚇していた。

いきなり現れたポケモンに、ホーホーやイトマル、コラッタ達も戦闘体制をとる。

そこに、コトネが割って入った。

「怪我してるのね……大丈夫？」

ガウガウ！

タツベイは突然現れた人間を見てジタバタと暴れ始める。

「怖くないよ、ホラ」

コトネの差し出した手を弾いて、その腕に齧り付いたタツベイ。

コトネは痛みをぐっ、と堪え…

暫くすると、タツベイは腕から口を外し、コトネを心配そうに見上

げた。

「怯えてただけなんだよね？」

…ガウ…

タツベイは自分の齧り付いた腕を優しく舌で舐めた。

「私は平気よ。心配しないで」

ガウ？

コトネはタツベイの頭を優しく撫でた。

安心したように、タツベイは表情を和らげた。

「おいで、傷の手当てしてあげる」

コトネの P - p h o n e がバイブし、図鑑が立ち上がる。

『全国ナンバー371。タツベイ。石頭ポケモン。高さ0・6m。
重さ42・1kg』

「『ホウエンのドラゴンポケモン。大空に飛び立つのを夢見て、日夜崖から翔ぶ練習をしている。その為、頭が鋼のように固い』……へえー。あなたって凄いんだ」

ガウ？

タツベイはコトネの持っているP・p h o n eに興味津津だった。

「あはっ、見た事無いのね？」

ガウ、ガウッ！

＼
＼
＼

「あー、お風呂気持ち良かった……あれ、コトネは？」

チユキはベースのお風呂に入って汗を流していた。

部屋は薄灯がついていた。もう何人かは寝ている。

小さい声でヒビキに訊く。

「星を見たいって言って、テラスに行っただけど…ちょっと遅いな…」

「ただいまー…」

コトネがこっそり帰って来ていた。

「ちょうどあなたの話……どうしたの、その腕?!」

チユキは素頓狂な声を上げた。

その声に、シンヤがすつと起き上がった。

「どうした、チユキ？」

ヒビキもその傷にビックリする。しかも、結構な出血で……

「おい、何があっただんだよ!コトネ」

「心配しないで…痛っ!」

「すぐ止血をする。チユキはベースリダーを呼んでおいで」

シンヤはコトネの出血している患部に布を宛がい、その上で血を止めている。

チユキはシンヤの言葉に従う。

「はい！」

「よし。ヒビキ君、コトネちゃんの腕をこのまま強く結んでくれ」

「はいっ！」

ヒビキは患部に宛がっている布の上に巻きつけた包帯をきつく結ぶ。

「そんな大袈裟な……痛っ！」

堪えていた痛みが身体に走った。

タツベイは暗がりになり、申し訳なさそうな表情をしていた。

「これは…タツベイの歯形だね」

傷口を抑えながら、シンヤが言った。

「でも、それは……痛っ！」

「タツベイはおとなしいのが一般的だ。きっとそのタツベイは人間が怖かったんだろう……」

シンヤはズバツと確信をついた。

タツベイはコトネの怪我をしていない腕に張り付いた。

「しかし……このタツベイはコトネちゃんによく懐いている。きっと、良いボーマンダになるよ」

シンヤは優しくタツベイの頭を撫でる。

「君は慈愛に満ち溢れた良いトレーナーの様だね。……そうだ。君に取っておきの化石をあげよう」

止血を行ったあと、シンヤは大きな鞆から貝の様な化石を取り出した。

「復元すると、カブトと言うポケモンになる。この先にあるアルフ遺跡で復元できる様にしたんだ。行って復元すると良い」

「良いんですか？あ、ありがとうございます！」

コトネはその化石を受け取る。

やっと、部屋の灯が消えたのはそれから二時間も後になったのだった。

Chapter・10 ポロボロのポケモン（後書き）

雅之：ほう……っ、何とかキャラ付け成功……（真っ白）

チユキ：ちょ、ちょー？！何矢吹みたいに真っ白になってんの！？

雅之：燃え尽きたぜ……真っ白にな……

零士：目覚ましビンタ食らいたいんか、兄貴…

雅之：うお？！零士、冗談は止めるよ！？

ヒビキ：なんだったら、リリイに往復ビンタさせよつか？僕のリリイ、特性力持ちだから攻撃強いよ？

リルリルッ！

雅之：止める、お前らあ！

トレーナーメモ

ウバ Lv.8

せっかちな性格。

20XX年9月15日31番道路で

Lv.8の時に会った。

身体が丈夫。

コトネ：ウバって紅茶の種類なの。有名なのはセイロンのかな。

杉下右京：コトネさんも紅茶が好きなのですね。

コトネ：あれ…？あなたは……

杉下：申し遅れました。私、警視庁特命係の杉下と申します。

コトネ：は、はぁ……（↑若干引き気味）

(2010/7/21改)

Chapter・11 V・S ジョバンニ先生（前書き）

雅之「今日は立春。ですが小説内は…9月16日です。

基本的な事ですが、注釈 行き方は通常プレイですが、若干キャラクターが変更されている人物が多少います。

あと、ポケモンバトルについてチユキが悟ったか所は素直なオレの意見っす」

チユキ「…今、GBAのRUBYやってる人に言われたくないわね…」

雅之「うぐ……（汗）」

コトネ「今回も」

ヒビキ「俺たち出番あんなーじゃん」

雅之「マダツボミの塔修行はゴースがうようよいる中で攻略する事

にしたぞ」

チユキ「それ、良いわね」

-

Chapter・11 V・S ジョバンニ先生

寝たのが夜中近かった事もあり、チユキ達はお昼近くまで熟睡していた。

―9月16日…正午―

マグマグッ…

「んっ、Beat…後五分っ」

チユキもなかなか目を覚まさなかった…

マグー…

Beatは溜め息を吐いて、鼻先でつついてWildをボールから出す。

ガウ？

マグ、マググツ！

B e a tから事情を聞いたW i l dはうなずいて、

ガオーーン！

と吠えた。

「きゃ！？」

「何っ？？」

「うお！！」

三人は飛び起きた。

チユキは部屋の時計を見てビックリした。

「えっ！？もうお昼っ？！何でもっと早く起こしてくれなかったの
！？」

三人は急いで発つ準備をする。

B e a tとW i l dは呆れて溜め息を吐いた。

ベースリーダーから御握りを貰って、

三人は31番道路を駆け抜けた。

――キキョウシティ――

昔の風情残る町並み。

修行僧に依る、マダツボミの塔やジョバンニのポケモンスクール、
ポケモンを鍛えるためのジムがあり、

最初この街を訪ねると皆だいたい

「ここ、なんなん??」

と言われる。

三人はここにあるジヨバンニのポケモンスクールの卒業生であり、
スクール内では余り仲が良い所を見せてなかった。

むしろ、三人共がスクール内で無口だったこともあり…その関係を知る者はほとんどいなかった。

「どうする？」

チユキがヒビキに意見を求める。

「マダツボミの塔で修行しようぜ」

「良いわね！チユキちゃんは？」

「私は久し振りにジヨバンニ先生を訪ねようと思ってるの。先生とバトルしたいんだ…それに、マダツボミの塔は夜じゃないと修行出来ないわよ？」

ジヨウトガイドマップを見ながらチユキは冷静に突っ込んだ。

「へ、そうなの?？」

「この時間は僧や尼の人達、手持ちのマダツボミ達は禅の修行をしているから、一般のトレーナーは一階にしか入れないって書いてあるよ。…だから、先生の所行こうよ」

…聞いたってそれかい。

「じゃ、私買い物しに行くよ。モンスターボールまだ買ってないしさ」

タツベイのウバはチユキにボールを貰ってゲットしたので、ボールを買っておく必要があった。

「……しゃーねーな、付き合っよ」

「一人で行けるよ!」

コトネとヒビキが言い合いしてるのを横目に、

チユキはポケモンスクールに向かった。

手に抱えているタマゴがピクンと動く。

「あれま。あんさんがそのタマゴを？」

不意に、声を掛けられビックリするチユキ。

声を掛けてきたのは艶かな着物を身に纏った舞子さんだった。

「うち、エンジュのタマオ。あんさんは…？」

「あ、はい！ワカバのチユキです」

「チユキはん…そのタマゴ、大事に育てるんよ」

タマオは持っていた番傘を広げ、その場を後にする。

晴れてるのに…？と空を見上げると、いつの間にか厚い雲に覆われていた。

Boreがボールの中でじたばたしているのに気付いた。

「どうしたの？」

コロコロ

…何だか楽しそう？

チユキは大慌てでバックから雨合羽を出して着る。

途端—

空が突然光って、物凄い勢いで雨が降り出した。

「ひゃあっ?!」

コロコロコロ

……Boreはむちゃくちゃ楽しそうだ…

「もうちょっとでスクールだから…おぶぶっ!」

雨が突風に押され、顔面に強く打ち付けられる。

コロコロッ！

B o r e が道を先導してくれる。

霞んで先も見えないが、B o r e が鳴き声で教えてくれる。

スクールの扉をバン、と開くと

ジヨバンニ先生がちょうど廊下の向こう側に現れた。

「オヤ、チユキさんじゃないですか」

「ジヨバンニ先生！」

ジヨバンニはタオルを持って来ていた。

チユキは手話のありがとうをした。

（左の腕を水平にし、右の手を立ててその腕に下ろす）

「今日は、どうしたんです?」

「先生とポケモンバトルがしたいんです。良いでしょうか?」

チユキは手話を交えて話をする。

…ジョバンニは耳が聞こえないのだ。生徒のほとんどはその事を知らない。

授業時には補聴器を使っているが、当人は余り使いたくないらしい。チユキはジムリーダーに必須である手話の資格を早い段階でとっていたので、職員室での会話ではチユキは手話を使っていた。

「良いですよ!室内バトル場、空いてますし」

「じゃ、早速!2対2のダブルバトルをお願いします」

室内バトル場はフリーバトルをしている生徒が数人いた。しかしバトルフィールドが六つもあるので支障はなかった。

「それじゃあ、行きますよっ！行くのです、ズバットにワンリキー！」

みいん！
キキッ！！

ボールからポケモンが飛び出す。

「行くよっ！BeatにBore！！」

マゲグッ！
コロロッ！

「ズバット、ミスゴロウに超音波！ワンリキー、続いて空手チョップ！」

「W鳴き声で超音波をかき消して！Bore、躲すよっ！！」

音波同士がぶつかり、超音波は鳴き声に押し負け、二体は攻撃力が下がる。

Boreはヒレで技を探知し、ワンリキーの攻撃を右に避ける。

「なかなかやりますねっ、ですが…翼で撃つに続いて空手チョップです!」

彼らはBoreを集中攻撃する。

「焦らないもんっ! Beat、代わりに受けとめて!」

BeatはBoreを守るように立ちはだかり、技を受ける。

が…Beatはただ受けたのでは無い。

口に翼を捕まえ、右腕にチョップを捕まえていた。

「Bore、ズバットに…!アイスボール!」

Boreは体を回転させると、体に氷が纏わりつき、ズバットに攻撃する。

「…!振りほどけ、二人とも!」

ズバットは逃げられず、アイスボールを正面に食らう。

ワンリキーは振り切って間合いを取った

接近戦が得意の二匹は、余りに戦いづらい状況だ。

「ワンリキー！リベンジでズバットを救い出せ！」

「行けるね！？スピードスターで近付かせないで！」

Beatは口の隙間から、幾つもの避け切れない星を吹き出す。

ワンリキーはその星が直で目に当たり、動きが止まる。

ズバットはその攻撃の隙に逃げるが、Boreの勢いの付いたアイスボールに目を回す。

「火の粉！」

更に勢い付いたアイスボールを食らい、更に急激に冷えた体に火の粉が当たったワンリキーは

耐え切れずに目を回してしまう。

「お疲れ様、ゆっくり休みなさい」

ジヨバンニはズバットとワンリキーをボールに戻して、チユキに近付く。

「よく懐いているみたいだね、このマグマラシ」

「先生の指導のお陰です！ありがとうございます！」

実のところ、こういう風にきちんとしたバトルスタイルは初めてだった。

負ける恐れも十二分にあっただが、

それでも良いと考えていた。

だってバトルは本来楽しむものだから。

改めてそれを痛感したチユキは、

「バトルは勝っても負けても、どちらでも良い。ポケモンは友達で……生涯のパートナーだから」

と言った。

手話は少しだけ言葉が違った。

「勝ち負けなんかに拘らない。全力を出してくれたポケモンは、トレーナーを信じているから。精神的に強くなるとはそういう事なんです」

「そうだね。チユキちゃんならジムリーダーにきつとなれるよ！旅を続けるんだね？」

「はい、先生！ありがとうございました」

チユキはこのバトルで、信じる事の大切さを改めて学んだのだった。

-

Chapter・11 V・S ジョバンニ先生（後書き）

チユキ「……良い事言っじゃない」

雅之「勝ち負けに拘ってたら、やっぱり良いバトルにはならないと思うんだよ」

チユキ「……涼華さんの受け売りね」

雅之「まあな」

チユキ「買い物チームは何してるのかしら？」

雅之「それは次回の話になるな」

「2010/2/4」 -

Chapter・12 急襲 in FriendlyShop(前書き)

雅之：まず前置き無しに本文どうぞ…

(→ちよつと疲れてる？)

-

Chapter・12 急襲 in Friendly Shop

チユキがジョバンニと対戦している頃、

ヒビキとコトネはフレンドリーショップでボールの他、食料を買っていた。

シテイのフレンドリーショップにはポケモンフーズも売っているが、結構な値段がする。

自作の物が、些か手間は掛かるが安価に抑えられるのだ。なので

「チイラの実と……ラブタの実……あと、ハバンにシュカ……」

「どうしたの？」

「チユキに買い物リスト渡されたんだ。これでポケモンフーズと料理の隠し味がつくれるんだって……」

「多芸だねえ、チユキちゃん……」

「あと小麦粉3疋と、……忘れてた、ラムの実……」

木の実は五個セットと十個セットがあり、使用頻度の高いNo.1
～15の木の実は十個単位で50円、基礎ポイントを下げる効果の
ある21～26の木の実は五個単位で50円、効果抜群の技を弱め
る36～52の木の実は五個単位で100円、ピンチの時に能力を
上げる53～62（60：謎の実を除く）の木の実は五個セットで
250円、60・63・64は滅多に店頭に並ぶことがない商品で、
一個で100円、一ダースで1000円と木の実では大変高価。

ジョウトやカントウの風土ではこれらの木の実が自生しなくなって
しまったので、シンオウやハウエンの木の実農家から入荷して販売
しているのだ。

ポケモンフーズだけではなく、最近は料理の味付けとしても万能に
使えることが分かった。

レジで買い物清算し、鞆に入れていくと……

ドガンッ！

爆音が響いた。

玄関辺りで何者かが自爆したようだ。

ついで、顔を隠した数名が、ショップに乗り込んで来た。

くぐもった声が店員に言っていた。

「有り金全部奪ってくんで」

リリイを出したままのヒビキは

ある指示をリリイにした。

リリイは煙幕の及ばない場所に立ち、手を振り始めた。

身体の回りに風が巻き起こる――

「やべっ、鎌鼬発動かよ……」

ヒビキはコトネを自分の方に引き寄せて、カウンターの下に潜る。

マア……リイイ！

「うわ!？」

「ボス、話が違……!」

「鎌鼬か!……!」

鎌鼬の風で、煙幕が晴れ

奴等のマスクを切り刻んでいた。

「ボス、マスクが!」

「髪までやられました!」

「ちいつ、ずらかるぞ!」

彼らはドガースをポケットに戻し、ショップから逃げた。

店員はもちろん、居合わせた客は？を浮かべていた。彼らが何故撤退したのか、皆目見当が付かなかったからだ。

「ま、結果オーライだな……ん？」

抱き寄せたコトネが、顔を真っ赤にしていたので、

ヒビキもつられて顔を赤くした。

「あ……」

「お……」

唇までの距離はかなり近く……

「そ、そんな……コトネ、ヒビキ!？」

チユキの焦った声がいつの間にか晴れた空が見える入口から聞こえ、二人はパツと離れた……が、

場所が悪かった。

ガッツーン!

「いつてー!」

「いたーい!」

カウンターに頭を強打し、痛みに悶絶する。

チユキは間の抜けた二人の声に思わずずっとこけた。

「。。。心配して損した。。。リリイ、あの技使ったんだ？」

いつの間にか、リリイがチユキの傍にいた。

マリ。

「この傷は。。。鎌鼬ね」

店内にある傷を見て、どんな技か判る辺り、流石チユキである。

マリマリリ...

リリイは眉をハの字にして頭を掻いた。

「まさか出るとは思わなかった...って事ね.....」

リルル…

頭を下げる仕草が、何とも可愛らしい。

「そのマリル、キミの?!」

店員がやっと声を取り戻した。

「は??」

チユキは目を点にした。

「そのマリルのお陰で泥棒が逃げたんだ! いやあ、ありがとう! お金取られなくて良かった! ! !」

店員はチユキの手を取って思い切り上下に振った。

「あの……ちが……」

チユキは舌を噛みそうになった。

「そうだ、キミに元気の塊をあげちゃう。これ、非売品だし、拾い物だし！いやあ、ホント助かったよ！」

店員は、自分のポケットから水晶みたいなのが何個も付いているのを取り出してチユキに渡した。

ジョーイさんが来たのはそれから二分後だった。

唯一、顔を見ているチユキ（入れ違いになったので）は警察に半日以上もいた為、

漸く解放された時には、19日になっていたのであった……。

Chapter・12 急襲 in Friendly Shop(後書き)

涼華：……きゃは

雅之：きゃは、じゃねーわ…

チユキ：二人とも死んだかと思ったじゃない！涼華さん、あなたね！？あーんなふざけたラブシーン入れたの！

涼華：良いじゃない。元々好き合ってるんだし、あの二人には突破口がないと、キスすらできないのよ！

205

雅之：……んまあ、チユキとナツマサもいずれはそうなるしなあ……

チユキ：はっ???!

「2010/2/7」 -

Chapter・13 修業の塔（序章）（前書き）

雅之：初の長期連続話だ！

チユキ：どうしたのよ？

雅之：頭の中で話組み立ててたらな、思いの他僧侶の一人が動いてな…

コトネ：わーいつ、ちゃんと出る♪

ヒビキ：一時はどうなるかと思ったよ…

雅之：後書きには恒例トレーナーメモもあるからな。あ、コトネとヒビキ。

コトネ・ヒビキ：（はい？）（うん？）

雅之：修行の塔は厳しいぞ。特に、……シュウネンには気をつけるんだな。

チユキ：ちょっと、どういう事よ？

雅之：……では、序章をどうぞ。

三人：ちよいちよいちよい！！

-

Chapter・13 修業の塔（序章）

9月19日…夕方。

チユキとコトネ、ヒビキはやっとマダツボミの塔の足下にやって来た。

「…もう、二日も擦れてるね…」

チユキの額に、怒りの四マークがくつきりと浮かんでいる。

……と、いつもの…犯人に疑われ、最初の一日はそれの押し問答だったのだ。

母親のカスミがやって来て、やっと自分の言葉を信頼してくれて、犯人の似顔絵まで協力したと言うのに、御礼どころか謝礼金すら出なかったのだ！

「こっちは賠償金請求したいぐらいなのに何で!？」

と今更ながら吠える。

「まあ、まあ……」

「元々急ぐ旅じゃねーしさ、良いじゃねーか」

「そりゃそうだけど……」

チユキは納得いつてないのか、渋い顔をしている。

「喝!!」

――突然、上から厳しい声が降り懸かって来た。

チユキは一気に心を静かにして

何かを避けた。

地面にビシッと何かが叩き込まれる…

警覚策励だ。

「お主、なかなかやりおるな。……よし、主は五階から、後ろの二人は二階から修業なされよ。十階にいる長老に辿り着ければ修業は終わりだ。主は五階からだから、私に付いてきなさい」

僧の名はシュウネンと言う。

五階まではなかなか急な梯子だった。

「お主はやはり、度胸があるな」

チユキは片腕にB o r eをくつつけていた。

「そうかなあ…?」

「この急な梯子に憶する者も少くない。大体三階まで上がれば、どんな者でも怖がるのだよ。今丁度四階だ…」

「ふーん、そーなんだ」

「そなたは七階から修業しても問題は無い。私は五階までしか上がる事を許されていないのだ」

「判った、この梯子を後二階上がれば良いのね？」

シュウネンは五階とかかれた扉を開け、ヒラリとその扉に移る。

「御意。健闘を祈ります」

シュウネンは手を合わせて扉を閉めた。

「後二階上がるのねっ、よいしょ」

体が暖まって、心地良い。

警察ではずっと座らされていたから、チユキにはまさに拷問だったのだ。

七階の文字が見えた。

扉を開けて、チラッと中の様子を伺うと

「トゲピー、神通力！」

チヨゲー…ピッ！

ツボーン！

「お見事、次の階へ進むが良い」

ナツマサの紅い髪が丁度階段を上っていた。

モクネンは隅の方にある回復コーナーで

先ほど戦ったマダツボミを回復させる。

（ナツマサ…やっぱりタマゴ盗んでたのね）

チユキは軽く溜め息を吐いた。

ピキッ　ピキキッ…

手元にあったタマゴが不意に割れる。

チヨゲピッ♪

「……！」

チユキは静かに驚いた。

そして、

「そこに居るのは修練の者だな」

と、モクネンに気付かれた。

「ああん、もあっ！仕方ない、行くよF a i n！」

チヨゲピピ！

…どうやらやる気だけは十分のようだ。

「それではこちらはホーホーで」

ホ、ホーウ！

（っ、ちよつと分が悪い…）

チユキは生まれたばかりのF i n eを戦わせるのに抵抗があつたが…

チヨゲツ！

男前な性格のF i n eは大丈夫、と頷いた。

「判った、甘える！！」

チヨゲ~~~~♪

「くっ、攻撃を！催眠術！」

ホー、ホー！

ホーホーの目から技が繰り出された。

「左にジャンプよ！そのまま指を振る！」

チヨゲツ！チヨゲ、チヨゲ…

次第にF i n eの両手が電気を帯びてきた。

「雷パンチ！」

チヨゲツツ！

ホーホーは正面からまともに電気技をくらい、ふらふらになっているが…

「体当たりです！」

「近付かせないで、神通力！」

Fineは体当たりをくらう前に神通力を出す事に成功した。

ホーホーは目を回し両足を出して倒れた。

「ウム、生まれたばかりなのに信頼しておるな。そなたは良いトレーナーのようだ。次の階へ進むが良い」

……気付いてたの？さすが僧侶……

チユキは感心しながら緩やかな階段を上がった。

その頃、コトネとヒビキは

順調に三階を突破していた。

二人はたつての希望でタッグバトルにしていたのだ。

チコリッ！

マリマリ！

普段はあまり仲の良くない二匹だけれど、息はピッタリだ。

四階の階段を上がると、今度はヒビキのタマゴがピキッとひび割れた。

ピキキッ…パリンッ

ワニヤン！

「おっ！」

「タマゴが孵ったのね！…ワニノコ？！」

「ああ、親父のオーダーの子だからな、ワニノコだ…よしっ、二
ニイだ！」

「じゃ、私もウバ出すよ！」

四階のチネンは坐禅の格好でボールを構えていた。

「行くのです、マダツボミにホーホー！」

「Go！ニニイ！」

「ウバ、S e t s !」

ワニア！

ガウツ！

二人は互いに顔を見合わせ、指示を出す。

「マダツボミに…ドラゴンクロー！」

「ホーホーに頭突きよ！」

互いの声が交じり合うが、ポケモン達はしっかり主人の声を聞いていた。

「笑止、催眠術に蔓の鞭！」

ところがホーホーはニニィに技を放ち、マダツボミは蔓でウバの動きを止めた。

「竜の舞！」

「引っ搔くで蔓を切るのよ！」

予想していたのか、ニニィは竜の舞で鮮やかに催眠術を避けて

ウバは蔓を引つ掻くで切り、そのままマダツボミに頭突きをかまそうとする。

「ぬ…鳴き声に成長！」

ホーホーの鳴き声は二匹に及び、攻撃力が一段下がり、マダツボミの成長により、細い体がゲンと伸び、ツボミの位置を高くした。

その為、ウバの頭突きを避ける事が出来た。

「なるほど、ね」

「大体読めたな」

コトネとヒビキは手を取り、目を瞑る――

「隙なんて与えませんよ。つつくに蔓の鞭！」

「竜の舞！」

「自己暗示！」

二二イの能力変化を暗示に掛けたウバは素早く技を避ける。

「ぬっ!?!」

「ドラゴンクロー!」

攻撃力の上がつた二匹のドラゴンクローは、見事ホーホーとマダツボミの急所を捕らえた。

ホーウ!

ツボウ!

「うぬう…お主達の絆はポケモン以上に強いようだ。良きパートナーだ…次の階へ進むがいい」

「やった!」

「やったね!」

四階を通過し、次はシュウネンとのバトルが待っていた。

-

Chapter・13 修業の塔（序章）（後書き）

トレーナーメモ

Fine ♂ Lv・4（トゲピー）

勇敢な性格。

20**年9月12日、ポケモンじいさんから

貰ったタマゴが、20**年9月19日に

マダツボミの塔で孵って出会った。

逃げるのが速い。

ニニイ ♀ Lv・4（ワニノコ）

無邪気な性格。

20**年9月12日、お父さんから

貰ったタマゴが、20**年9月19日

マダツボミの塔で孵って出会った。

力が自慢。

次回は引き続きバトルラッシュ！

-

Chapter・14 修業の塔（激闘）（前書き）

雅之：……激動、まさに。

ポケモンじゃない展開にあなたは震え

おののくかも知れぬ。

先行ポケモンのゾロアも出るゆえ、

楽しみにみて欲しいが……

印の付いた作品はまさに15歳未満にはきついグロテスク表現、
過激表現が出現致す。

充分に御理解の上、本文に進んで頂きたい。

読んだ後気持ち悪いと言った苦情は受け付けない。ご了承ください。

-

Chapter・14 修業の塔（激闘）

シュウネンの階は、特別の階だ。

と言うのも、この階層は特にゴースが発生しやすく、シュウネンですら取り憑かれる事があるのだ。

「南無大慈大悲救苦救難……」

ケケケケ……カーッ！

「ぐお……おおお！」

カカカ！カーッカッカ！

…何と、ゴーストに進化し、

シュウネンに襲いかかって来た。

シュウネンが五階を担当している所以は、これにあった。

「行くのです、ゾロア！」

コーン！

そう、シュウネンはその名を貰った事からも判るよう、相棒のゾロアと共にこの階を守っている。

カカーッ！

…コン？

ゴーストはゾロアを驚かせようとしたらしいが、

ゾロアに効いている様子は無かった。

「騙し討ちです！」

カカ！？

コンッ！

ゴーストの背後に回ったゾロアは相性の良い技を決めたが、

ゴーストは踏ん張った。

「そう易々とは倒れない、とそう言う事ですね。ですが…甘いですよ？」

シュウネンはゾロアの目を見た。

ゾロアは素早くゴーストの懷に技を打ち込んだ。

ゴーストは倒れた。

「……修行僧というのは面倒だな」

不意に、シュウネンの声が変わる。

「まあ、仕事がありやすぐに動けるのはありがてえがな…」

丁度階段を上がって来たコトネの横にいるタツベイのウバを、ゾロアが捕まえた。

「ウバ?!」

「オイあんた、一体何の真似だ?」

「フツ、ただの修行僧だよ…」

シュウネンは袂から、真つ黒のモンスターボールを出した。

「ブラッキー、アブソル。滅しなさい」

キョーッ!

シャーッ!

ブラッキーがコトネに、

アブソルがヒビキに向かって来た。

その頃、九階を制覇したチユキは

ナツマサと丁度かち合っていた。

「…来てたのか、オマエ」

「あら。一応ずっと前に面識あるのよ。忘れたの、ナツマサ?」

「軽々しく俺の名を呼ぶな」

「ちゃんと敬語使いなさい。でなきゃお母さんが呼んでたなっちゃんって呼ぶわよ」

……どんな性格してんだ(汗)

「チツ、… スイマセンデシタ、チユキせんぱい」

「んもう。昔は私の事、好きだって言っただの忘れてないよ、ナツマサ？」

チユキはナツマサのおでこをピンツ　と指で弾いた。

「はっ?!…もしかして、ユキ姉…?」

ナツマサは思いだし掛けようとしていた。

それをぶち飛ばしたのは、中央階からの爆音だった。

KABOON!!

チユキとナツマサは互いに倒れないように思わず支えあっていた。

「きゃ?!」

「うわ!（や、やわらかい）（恥）」

「ほう、守ったのですか。自分の身を挺してまで……」

シュウネンは感心して、ヒビキを見下ろした。

アブソルの辻斬りにより、五階の壁が全て吹き飛び、

ブラッキーの噛み砕くを腹に思い切り食らったヒビキは、コトネを危機から遠ざけようとした…。

結果辻斬りの直撃を食らっても尚、コトネに向けられた噛み砕くまですの身に受けた……

「ぐう……っ」

「ヒビキ……!」

「逃……げろ……」

「ヒビキを置いてけないよ!」

コトネはヒビキから離れようとしなかった。

「逃げないとは感心ですね。その度胸は買いましょう。ですが……破壊光線」

ブラッキーは細い破壊光線を、コトネの頭目掛けて放った……

ヒビキは満足に動けない体を動かして……

その光線を身体の内臓すれすれに受けた。

「うがぁー!!」

「ヒビキ!! いやぁーっ!!……!!」

Chapter・14 修業の塔（激闘） （後書き）

チユキ：やっぱり、ナツマサと私って会ってるんだね。覚えてるもん、私なっちゃんの事。

ナツマサ：なっちゃんは止めてくれよ、ユキ姉…（恥）

チユキ：だって、お父さん同士はライバルだもん。昔はもっとかわいげ在ったのになあ……

雅之：意外なバックグラウンドが出たなあ。

コトネ：そんな事より！！ヒビキはどうなっちゃんのおよ！！？

雅之：わわわわわわわ、揺らすにゃ！

（→舌嚙んだww）

チユキ：落ち着いてよ、コトネ！雅之さんの事よ？助かるに決まってるじゃない！

[2
0
1
0
/
2
/
1
4
]
-

Chapter・15 修業の塔（共闘）（前書き）

雅之：ここまでは超ハイスピードで進んだ訳でして。

涼華：戦闘系好きだもんね。

雅之：では、早速本文をどうぞ！

-

Chapter・15 修業の塔（共闘）

「そこまで彼女の事を好いている……くっくっく。では、これはどうかな？」

シュウネンは僧の顔をはぎ取り、袈裟を脱いだ。

―目付きの鋭い、おおそ僧の外見とは程遠い青年の姿。

ワックスで長い髪をたてた、ヤンキー風。

「オレはT I I D Aの特攻隊准幹部、ヤミシマだ。このタツベイは研究所から抜け出したわるーいお子ちゃまなんだよ」

ガウウッ！

コンコンッ！

ウバはゾロアに首を噛まれ、身動きが取れない。

ヤミシマは二人に近付き

コトネの顎を自分に向けた。

「なにすん……っ……んー……！」

ヤミシマはヒビキの目の前で

コトネの唇を塞いだのだ…

「…っ、くそがあ！！竜の舞からドラゴンクロー！」

ニニイはヒビキの言葉を聞き、ヤミシマに向かって硬い爪を振り落とした。

「おっとお、へへっ、ジャリに直接対戦は無理ってーもんだ」

ヤミシマは爪をバク宙で避けた。

コトネはショックで立ち上がれない。

「リリイ、ニニイ、水鉄砲！」

「ブラッキー、光の壁。アブソルスタンバイ！」

ワニア〜！

マリイ〜！

ブラウ！

シャウ！

水鉄砲は光の壁に威力を半減され、アブソルの周りで空気が渦を巻き出す――

「本当の死をみせてやんよ……デススラッシュュ！！」

「「守る！！」」

―― 遡る事三十分前。

二人は長老が様子がおかしいのに気付いた。

もう一つ、おかしいのはW i l d。

長老に対して、チユキを守るように立っている。

「ふむう。ヤミシマは流石じゃのう。T I I D A 特攻隊准幹部なだけあるわいな」

長老の顔がはぎ取られ、一見好好爺の研究者風の男性が現れる。

「計算違いは、赤髪の少年くらいか。上々じゃ」

ガウオー！

W i l dの嘶きが普通じゃないのを、チユキは感じ取っていた。

「…だれだ貴様は」

ナツマサもニューラを出して戦闘態勢を取っていた。

「ワシ？クローン精製隊准幹部、サネトモ。バンギラス、殺しなさい」

バギラア！

バンギラスの目は狂気の目…

攻撃を受ける前に、チユキは叫んでいた。

「いやああ…！」

ナツマサはドクン、と鼓動が耳元で聞こえた気がした。

―思い出した。それも色鮮やかに…

ナツマサもあの日の事件の被害者。

「ニューラ、凍える風！ワイルド、今だけでいい！オレの指令を聞

いてくれ、ユキ姉を守りたいんだ!」

ガウッ!

Wildは指を上げて、ナツマサを見た。

「アーム、ハンマー!」

右腕に力を込め、砂嵐を目に受けながらも、怯まずにバンギラスに立ち向かった。

「デスクロー」

バンギラスは、左の爪に闇の力を纏わせ、Wildに向かってその爪を下ろす。

「甘いな。つつこめ、ワイルド!」

ナツマサは、Wildの持ち物と特性を見て、構わず突っ込ませる。すると火炎珠が効果を発動させ、一瞬Wildは炎に包まれた。

勝負は、一瞬でケリが着いた。

特性の早足が発動し、アームハンマーをバンギラスの急所である顎をかけたのだ。

「チツ、油断したね…ひとまずここは退散するよ」

バンギラスをボールに戻し、

今度はバリヤードを出してテレポートした。

「ユキ姉…もう、怖くないよ?」

「や……いや………」

—同じだ、あの時と。

でも、今回はユキ姉を守りきる事が出来た。

ナツマサがそっと肩に触れる。

「ユキ姉、オレ……今の今まで忘れてたよ……でも、もう迷わない。
ユキ姉……愛してる」

ナツマサはぎこちなく、チユキの額にキスを落とす。

「…なつくん……」

その時だった。

下の階からコトネの悲鳴が聞こえたのは…

二人は、ハタと顔を見合わせ、

「おい、あの二つ分けの悲鳴じゃねーか…？」

チユキは顔を青くする。

「なつくん！コトネ達を助けたいの。力を貸して！！」

「わかった。戻れ、ララ」

ニユーラは一瞬自分に名前を付けてくれたナツマサに笑顔を向けた。

「Wild、ありがとう。助かったよ」

チユキも労いの言葉をかけて、Wildをボールに戻した。

二人は外の急な梯子から縄を下ろし、レンジャーのような軽快な足取りで六階の扉にたどり着く。

「僧侶さん！階下で何があったんです？壁が吹っ飛んでるじゃないですか！」

「そ、それが…長老様は気にするな、と……」

—！

長老が、何処かに閉じ込められている…？

そんな確証は何処にもない。けれど

長老に化けたサネトモが“気にするな”と言った……

つまり、シュウネンはヤミシマという人物と言つ可能性が非常に高い。

階段から階下を覗くと、髪をおったた人物が、コトネの唇を奪っていた。

「…っ、くそがあ！！竜の舞からドラゴンクロー！」

ワニノコのニニイは指示を受けてその人物に攻撃を仕掛けるが、鮮やかなバク宙でその人物は攻撃を躲した。

「おつとお、へへッ、ジャリに直接対戦は無理ってーもんだ」

きつとあれがヤミシマ…

チユキはナツマサと顔を見合わせて

そーっと階段を下りて様子を伺う。

「リリイ、ニニイ、水鉄砲！」

「ブラッキー、光の壁。アブソルスタンバイ！」

ワニア〜！

マリイ〜！

ブラウ！

シャウ！

アブソルの周りの風はどす黒い闇を伴っていた。鎌鼬とは違つ、まるで竜巻のような技だ。

「本当の死をみせてやんよ…デススラッシュュ！！」

「「守る！」「」

その技は、チユキとナツマサが投げたボールの中にいた

トト（トゲピー）とF a i nの二人の‘守る’に防がれた。

チヨゲツ！（F a i n）

ピーッッ！（トト）

「チッ、戻ってきやがったか……」

ヤミシマは嫌な顔をした。

そう、准幹部とは言っても実力は並のトレーナーと差はない。

それ故、ヤミシマ相手の力量と自分の力量の差が歴然であると戦う意欲が無くなってしまうのだ。

「…命拾いしたな。ゾロア、タツベイを離してやれ」

……コン。

ゾロアは口惜しそうに口からウバを離した。

「次はもっと強くなって、タツベイとリングマを取り返してやるよ」

ポケモンを三体とも戻し、

ドンカラスを出してヤミシマは夜空に消えた。

-

Chapter・15 修業の塔（共闘）（後書き）

コトネ：ちょっと、ヒビキ放ったらかしじゃない！

雅之：ギャーギャーうるせーなあ…

ヒビキ：生きてるから…！キ、傷に触る…

チユキ：ちょ、まず落ち着こう！

ナツマサ：（これも一つの愛の形か）

雅之：？何メモってんだ、ナツマサ…

ナツマサ：気にしたら負けだ

雅之：かわいくねえガキだな…

[2 0 1 0 / 2 / 1 5]

Chapter・16 修業の塔（終熄）（前書き）

雅之：遂に修業の塔完結かあ…

涼華：いつに無いハイペースで進んだわね。

チユキ：ついさっき、ヒビキ達は救急車に乘せられてったわ。

ナツマサ：助かるかどうかは五分五分らしいけど…

チユキ：大丈夫よ、きっと

雅之：ところで、長老はどうなった？

チユキ：…忘れてた！

ナツマサ：急いで本文に行こう！

-

Chapter・16 修業の塔（終熄）

ヒビキをキキヨウ総合病院に搬送した後、チユキは梯子から伸びた縄で再び十階へ上った。

「ちょ、ちよつとあなた！降りてきなさい！」

ジュンサーさんに言われても、チユキの推察では長老は十階、あるいはその上に監禁されている可能性が高い。

「あつ、あなたもよ！」

「すみません！でも、もしかしたら長老が監禁されているかもしれないんです！」

ナツマサも赤い髪を揺らしながら、チユキの後を追う。

チユキはもう八階まで到達していた。

「ユキ姉！やっぱり十階以上に監禁されているって思ってるの？」

「多分ね！それも、長い時間そのままだったら……かなり危ないかも！！」

「……ジュンサーさん、救急車をもう一台手配してください！」

ナツマサは下で啞然としたジュンサーに伝えた。

「なんて子達なの……」

「Bore、ヒレで気配を探して！」

Boreは目を閉じて、気配を感知する。

……「ゴロッ……」

「上……あ……」

部屋の中に、先ほど気付かなかった梯子を見つける。

丁度、ナツマサが縄を上がりきって、十階に辿り着いたところだった。

「Bore、梯子先の天井を水鉄砲で破壊して！」

ゴロツッ！

バシャーー！

バキィッ！

跳ね扉が音を立てて壊れた。

チユキは急いで梯子に向かうが、ナツマサが止めた。

「ユキ姉、オレ行くよ。ここで待ってて」

チユキは行きたい気持ちを堪えて、頷いた。

「……うん」

チユキは不安そうに天井に消えるナツマサを見ていた。

ナツマサはペンライトを付け、辺りを見まわす。

見つけたのは……

餓死体の長老だった。

恐らく、息絶えたのは…二日前ぐらいだろう。

腐敗臭が鼻につき、ナツマサは更に顔を歪ませた。

壊れた出入り口に足取り重く戻る。

「…どうだったの……？」

ナツマサの表情は暗かった。

「……………ユキ姉、ジュンサーを呼んで……」

「…そ、それじゃ……長老は……?」

ナツマサは首を横に振った。

チユキは言葉を失って、頷れた……

「私が、…っ、もっと早く挑戦してたら……」

「ユキ姉……」

ナツマサは天井から降りて、

チユキに歩み寄る。

「私が…足止め食らってなかったら……助かってたかもしれないのにつ……!」

涙が溢れて、止まらない。

「ユキ姉のせいじゃない!あいつらのせいで……」

「それでも！……私は私を許せない……」

チユキは十階の扉の縁に立った。

「ユキ姉！？」

チユキの足が宙を舞う寸前、ナツマサが体を抱えてそれを止めた。

「何勝手な事してんだ！」

「離してっ、死なせて！！」

その声は塔の下まで響いた。

ナツマサは縁からチユキを引き離し、

頬を強く叩いた。

それも、塔の下まで響く乾いた音だ――

「!？」

「ユキ姉！そんな事したら、悲しむ人間が増えるだけだろ!？」

「……ううっ……わああーん！」

チユキは慟哭してナツマサにすがりついた。

ナツマサはそんなチユキを優しく包みこんでいた。

涙は止まらなかった。

辛く、苦しい気持ちが胸を支配していた。

ただ、ナツマサのぬくもりだけがチユキをホッとさせてくれた。

優しい心が、少しずつ壊れそうになりそうなのを、ナツマサが救い出してくれた。

――よかった、思い出せて。

この、好きだって気持ちには、嘘はない。

どうか、消えずに。

それだけを祈っていたかもしれない。

いつしか、チユキは泣き疲れて

眠っていた。

ナツマサは、自分の記憶を思い出して

これ程良かった事は無い。

これ以上、誰かの為に苦しい思いはしたくない。

守りたい、と初めて思った。

ユキ姉……もう、一人にさせない。

ナツマサは今度は、頬に唇を落とした。

決意の証しだった。

そして、もっと強くなりたい。

愛する者を守る為の強さを得たい。

ユキ姉……いや、チユキの事が大事だから。

大好き、だから。

-

Chapter・16 修業の塔（終熄）（後書き）

涼華：正しくタイトルの話になっているわね…いい感じじゃない、二人。

雅之：涼華先輩のお陰ですってば（照）

ナツマサ：…決めたよ。オレ、親父と向き合う。

雅之：よく言ってくれた。チユキを絶対守り通せよ？

ナツマサ：…はい！

雅之：次回は幕間。ナツマサの親父が何をしているのか、少し紹介。

-

く幕間く

囚われた者・記憶から消される者（前書き）

涼華：どうしたの！？

雅之：執筆熱が止まらなかった……

涼華：……珍しい事もあるのね……

雅之：後半に、これから大事になっていく所を書くからよろしくな。

涼華：おお！乗ってるね！

雅之：手直し期間ですし。

涼華：第二部に向けて全体の手直しの最中なんですって。

雅之：特にヒビキとコトネはね～。色々厄介だから。

く幕間く 囚われた者・記憶から消される者

―とある研究所。

オーキドユキナリに風貌の似た男性がいた。

ある映像から、久し振りに息子を見た…

一人の人間として、男として成長したナツマサ。

（おおきく、なったなあ……ナツマサ）

「S幹部、この少年何者なんでしょうか？」

シゲルはハッとして映像から眼を離す。

（…いけない！）

「なかなか、優秀のようだが、気にするほどでは無いだろう」

何としても、ナツマサは私が守る。

ナツマサが、チユキを守ると決意したように、父親としてやるべき事はしたい。

“……この命と引き換えに、家族を守ると決めたあの日、

私は悪魔に魂を売った。

幻滅されても構わない。

守る為なら……私は悪になる。

サトシ、聞いてくれ。

私は間違っているとは思わない。

君は今どこで、何をしている…？

私は君になら、殺されて構わない。

いつか、対峙する時……

君の娘であるサカキ チユキ

私の愛する息子、オーキド ナツマサ

私は彼らに未来を託す。

だから、全力で私を殺してくれ。
”

―白銀山のビバークでサトシはその手紙を見ていた。

そばには便りを運んで来た。ビジョット。

「シゲル……」

サトシは齒噛みした。

サトシは優しくピジョットを撫でた。

ジョットー……

知らなかった。そんな事があつたなんて…

この間帰郷した際、久々にユカリに会った。

シゲルと結婚して、子供がまだ小さい頃はよく会っていた。

ところがあの事件のあと、子供の事を考えて、ポケモンの自生の少ないジョウトのワカバタウンに引っ越した為、シゲル達と会わなくなってしまったのだ。

それからは殆ど連絡を取ることはなく、六年がたった今……手持ちを整える為に研究所に向かうと、ケンジと新鋭のオーキドナナミ博

士に助手のユカリが迎えてくれた。

ただ、重苦しい空気が流れていた三人。

何か遭ったのは目に見えて分かったが、言わないで離れようとした。

帰りしなに、ユカリの旦那でカントートレーナーエースの称号を得たシゲルの事を話したが、ナナミ博士は表情を暗くし

妻でありシンオウトレーナーエースの称号を得たユカリは悲しげな笑顔を浮かべ

ケンジは眉間に皺を寄せた嫌な顔をした。

サトシは余計な事を言ったと察して、それ以上は言わずに実家に帰った…

そこで、シゲルが三年前に蒸発した事を聞いた。

…シゲルは幼少の頃十四年も行方が分からない時があった。

見つかった時、再会した時……

サトシは驚いた。もちろん、ナナミも、当時は生きていたナナカマド博士、オーキド博士も……

だから、蒸発したと聞かされ、サトシは動揺した。

……しかも話はそれだけに止どまらなかった。

シゲルの目撃証言が出て来たのはなんとも意外な場所だったからだ……

サトシは信じたくなかった。いや、信じられなかった……

それは午後休を取ってたまたまサカキ家にお邪魔していたウラヤマサラヤから聞いた事だった。

廃屋にある怪しげな研究所。ROCKETS警察が張り込みをかけていたその場所にシゲルが何度も出入りしているのを見つけたのだ。関与しているかどうかは不明だ。と、いうのも……突入しようとしたその時廃屋は爆発に依り跡形もなく消されたのだ……

サトシは手紙を鞆にしまい、ノートを破り手紙を書く。

「ピジョット、この手紙を間違いなくシゲルに渡してくれ…調査が
終わり次第、俺も捜査本部に行く」

ジョット！

手紙を、筒に入れて右足に括る。

ピジョットは力強く頷いた。

「いい子……ただ今日はもう暗い。休んで明日の朝翔べば良い。明
日は一日晴天だからね」

ピジョ。

サトシはオイルランプを消して、シュラフに入る。

ピジョットはサトシを暖めるように側に寄り添って眠りについた。

* * * *

少し時間は過ぎて、9月23日の夕方。

「…あ、あれ？」

「どうしたんですか、ウツギ博士…」

ウツギ博士とコトネの父親で博士の助手でもあるクロツチヒトナリは、ある事に気が付いた。

「チコリータのボールがないですね…」

「えっ！？だって博士チユキちゃんにはヒノアラシをあげたし…ワニノコは誰かに盗まれてしまったし……」

博士は呟いた。

「何か…ありえない事が起こっているような気がする…アララギ博

士に連絡を取る。クロツチ君は警察に連絡を。すぐにだ!」

「は、はいっ!」

ヒトナリも携帯で、連絡を取ろうとする。

その携帯に付いていた筈の一人娘の写真はなく、奥様のものに変わっていた。

）
）
）

更に進んで、9月27日の昼前。

「…あれ、^{オーダー}大河。ここに保管しておいたお前とリアン（ガブリアス
↑実はシロナのガブリアスの兄）の卵は?」

大河は頭をかしげた。

オーダー?

「うーん、チユキちゃんにあげ損っちゃったからなあ…どうしよう
か悩んでただけど…ま、いっか」

オーダイ…

家の中には、昨日まではあった筈の一人息子のいた形跡は跡形もなく消えうせていた…

-

く幕間く

囚われた者・記憶から消される者（後書き）

涼華：そうだったの……

雅之：そうな。

涼華：へ？

雅之：ん？

涼華：ホント、どうしたのよ。普段と全然違うじゃない！

雅之：だんだん人物が勝手に動き出してんだよ、勝手にな。

サトシ：ホント、だんだん自然になってきましたよね

雅之：ありがとう、大人サトシ君！

サトシ：大人サトシて（笑）

雅之：アニメはわりと不変じゃん、サトシってさ。

サトシ：まあ、そうだな。若いよな、オレ。

雅之：だって今三十四だろ？

サトシ：結婚して十三だから……あ、そうだな。

涼華：結婚年齢若っ！……って、何でコトネちゃんとヒビキの記憶がなくなってるの？

雅之：それはこれからのお楽しみと言う事で（笑）

涼華：え、気になるんだけど。

「2010/2/16」（2010/7/31改）

Chapter・17 V・S・ハヤテ（初陣）（前書き）

雅之：読者数が日に日に増えるとやっぱり嬉しいっすね。

えーと、今日は9月20日の話です。

チユキの日常が、ここで垣間見えると思います。

ナツマサ：引き摺らないんだよね、チユキは

雅之：よく知ってんねー。

ナツマサ：もう否定すんの面倒いわ…

えーと、あの後俺らはジュンサーに長老の事を報告した後、ポケセンに行ってチェックインしたんだ。

コトネとヒビキは病院で寝泊まりだったさ。あ、ヒビキの怪我は思った以上に悪くて一週間は掛かるらしいんだ。

雅之：生きてるだけでも良いと思わなくちゃな。

ナツマサ：そうですね。では、本文をどうぞ！

雅之：ナツマサ、爽やかになったなあ……

-

Chapter・17 V・S・ハヤテ（初陣）

チユキはす、と目を開けた。

…ここは、ポケモンセンター。

ベットの中で寝返りを打つ、と

「…ナツマサ」

赤い髪の毛に優しい寝顔。

チユキは起こさないように、ベットから出た。

ベランダの扉を三回目にして漸く開け（最初に引いたが開かず、押しても開かず、スライドさせるモノだとやっと理解出来た）背伸びをする。

「んーっ！今日は良い天気だ。そだつ、……あや？」

脇に付けたモンスターボールを見て、一つ無いのに気付いた。

「えつと……あ、そっかぁ」

ベットに戻ると何の事はない。Fineとトトが身を寄せあつて寝ていたのだ。

一見すると、どっちがどっちか分からない。しかし、寝言が微妙に違った。

チヨゲー……(Fine)
ピー…ピー…(トト)

トトは女の子、Fineは男の子。

鳴き声もやはり性別によって変わるモノなのね…とチユキは納得した。

仕切り直して、ベランダに出てWildとBeat、Boreを出す。

ガウッ！
マグッ！
ゴロッ！

「朝のストレッチ、開始！」

……ストレッチと言うか、ウォームアップと言うか。

チユキの朝は大体これで始まる。

まず体を柔らかくする運動の後、

空手の形を皆に教える。

一番飲み込みが早かったのは四肢がしっかり動くWild。

逆に四本足のBoreは覚えようという意欲は見えるが思うように動けなくて少しイライラしていた。

コロ〜…

「大丈夫よ、Bore!ちゃんと出来てるから」

…ゴロ？

本当に？って顔でチユキを見る。

チユキは優しい顔で、頷く。

「さあ、次は相手の技を利用しての突っ込みに依るカウンターよ」
お手本に、とW i l dに自分に正拳をするように言う。

チユキはW i l dの正拳を左手で受け流し、右手に拳を作ると
ガオ？！

W i l dはその突っ込んできたパワーをその体に直に当たる羽目になる。

しかし……

「……ったあゝ！」

ある程度振り抜く力が無いと自分もダメージを食らってしまつ。チ

ユキみたいに（笑）

「まずは実践ね！いてて…（笑）じゃ、今度は私がBeatに正拳するから……受け流して丹田……えと、おへその下にパンチしてみてね」

マグッ！

小さく頷いて、チユキはBeatに正拳を向ける。

マーグッ！

「おうっ、ナイス！（…力入れてなかったらヤバかった……）」

マグッ
♪

チユキは態勢を戻して、今度はBoreを見る。

「じゃ、BeatはBoreにやってみて。あのね、Boreはビレがあるでしょ？」

コロッ！

Boreはヒレをピクンと動かした。

「そのヒレでパワーを受け流して、回し蹴りの要領でやってごらん。Beat、お腹の下当たりにしっかり力をためて、準備が出来たら正拳をやってごらん」

空気が一瞬張り詰め、

Beatは正拳をBoreに当てようとするが…

マグ！

…ゴロ！

Boreはヒレを器用に使い、そのパワーを受け流し、後ろ足で丹田にパワーをカウンターさせる。

マグ？！

Boreはその勢いで後ろに弾かれた。

「お、やっぱり攻撃力は高いみたいね」

さて、と。困った事に、Wildの相手がいないのだ。

もちろんチュキが受けても良いのだけれどまた病院沙汰になったら
ずれ混むしね。

出来れば屈強なポケモンにお願いしたい。

そんな時、鳥笛らしき音が聞こえて来た。

ふと空を見上げると、……ポツポだ。

と考える暇なく、そのポツポから何かが飛んで来て……

ペチャン!!

最悪な事にチュキの顔面にそれは落ちて来た……

「ギ、ギャアアアア!!」

チュキは生暖かいそれがポツポのソコであるとすぐに分かり、女の
子らしからぬ声で絶叫した。

「わぁ!？」

チヨゲ?! (Fine)

ピピッ!?(トト)

その絶叫に、部屋の中で眠っていた一人と二匹は飛び起きた。

Wildは、ティッシュで手早く汚物を回収してくれた。

「Boreっ、私の顔に水鉄砲!早くっ!！」

コロッ、コローーッ!

BoreはBeatに後ろに来るよう言った後、すぐに水鉄砲をかけた。

気の利くWildはミニポーチから洗顔フォームを出してチユキにすぐ渡した。

チユキはそれを受けとり、フタを開けて適量を取り出した後、キチンとフタを閉めてWildの手に返した。

Wildの手には更にタオルまであった。

ナツマサとトゲピー達は何か何だか訳ワカメ。

タオルで顔を拭いた後、チユキは憤怒の表情で空で固まっているポッポを見る。

ポッポ……

ポッポは目に見えて蒼白だ。

「……たまたまたー！Wild、行つてー！」

Wildはポーチャタオルをチユキに預け、驚く程の俊敏さで向いの屋根に登った。

ガウガウッ！

ポッ、ポッポッ！

必死に弁明しようとするが、悲しいかな、チユキには届かない。

「Wild、逃がさないで引っ掻く!!」

Wildは咄嗟に先程のカウンターを使った。

逃げようとするポツポのスピードを利用して、攻撃がヒットした。

「続いて騙し討ち!!」

成すすべなくポツポは騙し討ちに倒れ、墜落したが、Wildはそのポツポを優しく抱える。

「どうしたの、チユキ」

ナツマサとトゲピー達がベランダのざわめきに気付いて出てきた。

「あー……ちょっとやり過ぎたかなあ……」

ブチ切れが終わった(?) チユキはやっと冷静になった。仕方ないので、元氣のかけらと傷薬、包帯で怪我したか所を丁寧に手当てした。

「ごめんね。もう怒ってないよ……私もちよつとやり過ぎちゃった……」

…ポー。

ポツポも、申し訳ない顔をして小さい声で謝る。

しかし、この戦いはあるジム戦の序章になっている事など、誰も気付かなかった。

「どー、ポツポー?!」

一人の少年が姿の見えなくなったポツポを探している所だった。

-

Chapter・17 V・S・ハヤテ（初陣）（後書き）

雅之：……と言う訳で、あのポップはキキョウジムリーダー最年少のヒョウドウハヤテ、前のジムリーダー・ハヤトの息子だな。

ハヤテ：わぁ、初めまして！ぼく、小さいけど……そんじょそこらのトレーナーとはちがうよ！！だって、ぼくとぼくのポケモンは強いんだもん！

雅之：……まあ、まだセリフは最後の一言だけだな。

ハヤテ：むう、おじさんのせいじゃない！

雅之：おっ、おじ……！テメー、そこになおれ！その性根、叩き直す！！

ハヤテ：わぁーっ、じ、ごめんなさい……！！

2010/2/18

Chapter・18 V・S・ハヤテ（武陣）

ボールに入らない事を考えても、誰かの手持ちである事はまず間違いなかった。

チユキは蒼白を通り越して真っ白になっていた。

「あー……チユキ？」

「……………」

タオルを頭につけ、まるで明日のジョーのようだ。

セコンド（？）には、心配そうに見ているチユキの手持ち。

一番近くにいるのはFineとWild。

一歩引いて見ているのはBeatとBore。

ナツマサは何だか怖くて近付けなかった。

しかし、開けっ放しのベランダから幼い子供の声が聞こえ

ポップが首を上げた。

ポップー！

「ポップー、何処？」

ポップは羽根をぐつと広げ、飛び出そうとしたが、復活したチユキが止めた。

「ダメよ、羽根を折っちゃったから！」

ポップー……ポップー！

先ほどの騙し討ちで左羽根が折れて、ポップは痛そうに顔をしかめる。

ナツマサはトレーナーを捕まえる為に、ベランダに急ぐ。

「君！君のポツポは足に伝書用の青い筒を付けているのかい？」

―青い羽根のように輝くセミロングの髪、まだ幼さの残る服。

「うん、そーだよ！お兄ちゃん、知ってるの？！」

「そのポツポは今保護してるんだ。確認の為、来てくれないか」

少年は顔を青くして、急いでポケセンに入る。

「チユキ、持ち主が来た。一旦ジョーイさんに見せた方がいいかも」

「うん……」

チユキはBeat以外を戻し、回復センターに急ぐ。

幸い、親羽根が折れただけで大事には至らなかった。

「暫くは安静にさせてバトルをしない方がいいわよ、ハヤテ君」

「そ、そんなあ…今日がこのポツポのバトルデビューだったのにい……」

「しょうがないわ。こうなったらお父様にポケモンを借りなさい」

ジョーイさんはハヤテの頭を優しく撫でる。

ハヤテはショックを受けていた。

「朝のトレーニングしてただけなのに…今日はポツポのデビュー戦だったのになあ…」

「無理させたら、余計悪くするわよ…」

「はあい…」

ハヤテは溜め息を付いてポツポを抱き抱えた。

「しょうがないや、パパに言ってヨルノズク貸してもらおう」と

チユキは何となくハヤテに会い辛かった。

元はと言えばチユキの顔にンコが掛かったのが原因でポツポの親羽根を折ってしまったのだ。

しかし、昨日マダツボミの塔に行く前に今日のジム予約をしていた為、いやがうえにも会わなくてはならないとなると……チユキの心はさらに落ち込んだ。

「今日のジム戦、ドタキャンしようかな……」

「ん？」

「ここのジムリーダー、代替わりして息子さんがやってるのよ。しかも最年少」

ジョウトガイドマップをナツマサにみせると、確かにさっきの少年の顔が張られていて下にハヤテと書かれている。

「あー……なるほど……」

「しかも、どのポケモン使うか知っちゃったから特にね……」

ヨルノズク…エスパー技を使うので、なかなか戦いづらい鳥ポケモンである。それに、鳥に対応できるのが進化前のBoreただ一匹なのだ。

と、言うのもこのBore、アイスボールの他威力の高い冷凍ビームまで覚えていたのだ。

しかし、残念な事に思ったようにレベルが上がらず此所まで来てしまった為若干不安が残っているのだ。

その反面、Boreは技の出し方を短時間で覚える事が出来たのに驚いた。

命中率の精度、繊細とも言える直径0.5糎もの細さの光線を出す事が出来る。

ただ、物凄く集中をしなければいけない。相手だけを視界に入れ、更に主人の声も耳に入れなくてはならないと言う非常にポケモンに負担の掛かる戦い方なのだ。

明鏡止水をチユキから学び、呼吸を合わせる事をWildとBea

tがフリーバトルで互いを高め合っている間続けて来た。

風の音、ポケモンの鳴き声、羽ばたき…

集中すると、それらは聞こえなくなる。

手を繋いでいる相手の心音が聞こえるだけ……

相手の考えが伝わる訳ではない。しかし、この行動をしなければ、ジムリーダーには勝てない。

予約時間一時間前、ポケセンにあるバトル練習場に

チユキはBoreだけを出して頭に乗せた。

呼吸を合わせ、精神統一する二人――

練習場の二階にいるナツマサはチユキに言われ、ティッシュを抱え

ていた。

チユキがそつと手を上げると

それを見たナツマサはティッシュを一枚上から落とす…

ティッシュはゆっくり落ちていく。

「破！」

バシュッ！

ティッシュは水を受け、落ちる速度を早め―

「冷！」

ピキシッ…

パキイン！

ティッシュは一瞬にして凍り、

地面にぶつかり、砕け散った。

攻撃の瞬間はその圧倒的な早さに目視する事は敵わない。

だが、あくまで無機物に対してやって来たただけなので、対ポケモンで威力を発揮するかどうかは未だ判らない。

相手は常に動いてその位置を変える為だ。

その為、最初の破……水鉄砲が重要な役割を担う。

ただ単に攻撃を与えるのではなく、相手の動きを制限する役割があるからだ。

次の段階の冷……冷凍ビームの照準を合わせやすくする利点も一つの理由になる。

しかし、相手の素早さに影響されて照準がぶれてしまう恐れがある。

それは同時に周りの人達に危害が及ぶ……と言うのも、凝縮されたその水鉄砲の水圧はとんでもなく強いからだ。

並のポケモンが受ければ、確実にそれだけで目を回してしまう。

人に当たったら？それこそ骨にヒビが入る程の大怪我を与える事になる。

ジム戦やリーグ戦でなければ使う事は恐らく許されない。

……ジム予約時間まで、

後45分。

チユキとBoreは最終調整に掛かった。

Chapter・18 V・S ハヤテ（武陣）（後書き）

ナツマサ：ユキ姉すご…！

雅之：まあ、バトルの家系だからな。一切手抜きはしねえだろ、チユキは

ナツマサ：俺も頑張らなくちゃ……

雅之：ナツマサ、ポケモンに対して随分やわらかくなって来たな。

ナツマサ：まあ……な

雅之：それで良いよ。

-

Chapter・19 V・S・ハヤテ(参陣)(前書き)

さあさあ、やーつと仕上がりました(^ー^;))

いやあ、初の新人研修で忙しくて…後輩が出来た(^^)♪

…って、関係ないことはおいといて…

ジム戦、前半です！さて、ハヤテの後一匹どうすべ…

(まだ、決まっていなかったりして…笑い)

-

Chapter・19 V・S・ハヤテ（参陣）

チユキとナツマサは予定より15分早くジムに到着した。

チユキの目は鋭く、鈍い光を湛えている。

トレーナーとして戦う時、チユキは相手を見ていない。

自分のポケモンだけに集中していないと、注意力散漫になり、ポケモン自身もミスをする事があるのだ。

特に強いトレーナーと戦う時は精神が乱れがちだ。だからこそ、相手を知らない方が戦いやすいのだ。

迷いなく、相手に技を当てるのは非常に難しい事だ。

「ジム予約をしたチユキです」

「お、早いねー！なんか昨日は大変だったって聞いたよ……」

「今はこのバトルに集中をしていますので…大丈夫ですよ」

集中しているチユキの目は一トレーナーとしての戦いを臨んでいるものだった。

ジムレベルの人は、その勢いに圧倒された。昨日今日で培われただけのものではない気迫と、トレーナーとして強い者と戦える喜びは表現出来ないものがあるようだ。

「君はすごいね。…バトルは二対二のシングル、挑戦者にのみ交替が許されている」

「……………」

（集中力もすごいな…）

チユキは目を閉じて、Boreやボールの中にいるリングマのWildの鼓動を感じ取る。

二匹共に、チユキと同じく集中していた。

「ジムリーダーバトル、シングル2on2!」

そのジムレベルの声に合わせて、ハヤテはボールを投げた。

「いけっ、ヨルノズク！」

「ヨルオ〜！」

チユキは何も言わず、手を前に翳した。

それを合図に、Boreがチユキの頭から飛び降りてヨルノズクを見据えた。

「ヨルノズク対ミスゴロウ、バトルスタート！」

「いつけーヨルノズク！催眠術！！」

「波っ！！！！」

目から発せられる光線^{ビーム}よりも先に、高圧縮された正しく水鉄砲がBoreの口から発せられ、ヨルノズクの頭にクリーンヒットした。

催眠術の技は失敗に終わり、ヨルノズクは床に墜落した。

「ヨ、ヨルノズク！？何があつたの？！」

「ヨ…ヨルオ…」

すでにフラフラな状態ではあるが、まだ戦える様子だ。

「ゴットバード！！！」

「冷！」

ヨルノズクが飛び上がろうとした正にその時。

0・5耗^ミもの細さを誇る冷凍光線^{ビーム}がヨルノズクの急所を捉えた。

「ヨルオー……！」

「……ふう、よくやったわね。Bore」
「ゴロ、ゴロツ！」

一人と一匹はようやく集中を解除した。
「お疲れ様。戻って！」

Boreはチユキの傍まで戻った。
「次はこの子！行って、Wild！」

ハヤテの二匹目のポケモンは一体……？

Chapter・20 V・S・ハヤテ（終幕）

「行けっ、カイリユー！」

N M O Bから飛び出たのはまさかのカイリユーだった。

「「カイリユー！？」」

チユキだけではない。ナツマサも流石に仰天した。

「カィィィィ！」

嘶きがジムいっばいに響いた。

W i l dは威圧をもろに受け、動揺した。

「ガウウ……」

「！W i l d、明鏡止水！！」

すぐに察したチユキはW i l dに指示を出した。

チユキもW i l dに同調して気を静める…

「リングマ対カイリユー、バトルスタート!」

(なんだ? 隙だらけじゃないか…)

ハヤテは早速カイリユーに指示を飛ばした。

「カイリユー、ドラゴンクロー龍の爪!」

カイリユーは近距離や遠距離の技を多種覚える為、予想が付かない。

カイリユーがW i l dに技を当てようとしたその刹那だった――

ツドン!

バトルフィールドに鈍いパンチの音が響いた。

「グマアッ！」

「カ、カイイイ……！？」

W i l dの右脇を擦り抜けたカイリユーの爪

右に宿るは雷のエネルギー

左に宿るは氷のエネルギー

右でカウンター防御をしつつ

左を死角の急所（左羽付根）にぶち込んだのは、単に計算だけではなかった。

フリーバトルの際、両腕で違う技が出せるんじゃないか、と自分で編み出したのである。

その考えをW i l dはチユキに伝えていた。

チユキはそれを活かした技の出し方を教えていた。

「グマオオ！」

「騙し討ちに冷凍パンチ！」

カイリユーの目の前からリングマが消える。

「カイ?!」

その後ろから、左の腕で騙し討ちをカイリユーに当てる。

騙し討ちの反動でカイリユーと距離を取ったWildは

地面に両腕に込めた冷凍パンチを打ち込む――すると……

バキバキバキバキバキ！

バトルフィールドから氷の柱が飛び出てカイリユーに襲いかかった。

「カiiiiiiii！」

「は、破壊光線！」

ハヤテは慌ててカイリユーに指示を飛ばすが、カイリユーの動きは……

「や、やばい！」

ナツマサは動揺したカイリユーが出そうとする技が分かった…

「チユキ！カイリユーを早く戦闘不能に！！！」

「えっ？」

「カイイイイイ！」

カイリユーは自分の力が制御出来なくなっていた……

その嘶きの後、

カイリユーの口から途方もない力をまとった龍のエネルギーが放出された…

チユキはW i l dに指示を出した。

「穴を掘るで回避!!」

W i l dは地面に消えた。

直後、流星群がジム一杯に降り注いだ。

「きゃああ!!」

「ゴロロツ!!」

「チユキ!!うわああ!!」

「カイリユー!!?ぎゃあ!!」

「うおおお!？」

バトルフィールド・観客席問わず

流星群は暫く降り注いだ。

トレーナー三人とジムレベルは

その余りの威力と砂煙に目を開けていられなかったし、動けなかった。

やっと静まった頃、チユキが最初に目を開けた。

リングマは穴から出てカイリユーを見ている。

カイリユーは氷の柱の中で目を回していた。自分の出した流星群で自分にトドメをさしたようだ。

「勝った……の……?」

「グマ………？」

Wildもなんだか信じられないような顔をしている。今遭った事が現実だったのかさえ、わかっていないようだ。

「……収まった……」

ついで、ララ（ニューラ）の守でガードしていたナツマサが、瓦礫の下から顔を出した。

「サンキュー、ララ。助かったよ」

「ニューラ！」

ララは笑顔で頷いた。

「コロッ……」

チユキの足下から、同じく地面に避難していたBoreが穴を掘るで顔を出した。

「流石Bore！あなたも避難してたのね」

「ゴロゴロッ！」

一人と二匹は随分汚れている。

「チヨキッ！」

チユキの背中にはさらにトゲピーがいた。

「Fain?! 咄嗟に私を守ってくれたの？」

Fainは男前に頷いて返事をした。

「チヨゲキ！」

「取りあえずボールに戻って？まだジムバトル中だと思うから」

F a i nは静かにボールに戻った。

その次にジムレベルの人が頭を抱えて立ち上がった。

「あたたた…酷い目に遭ったよ………ん？カイリユー戦闘不能！よ
つて、挑戦者チユキの勝利！」

の聲がやつと響いて、チユキとW i l d、B o r eは歓喜の声を上げた。

「やったあ！」

「グマ！」

「ゴロ！」

何事か、とジムの裏手にある兵藤家から人がやって来た。

「あ、ハヤトさん！」

「何の騒ぎだい？それにこのジムの有様は………」

ジムレベルがハヤトと言った人物の横に付いて説明をする。

「実はハヤテの坊ちゃんが……」

その風貌は厳格な親父のようだ。

着物に袴、髪の毛は侍のように髷にしており、一見武士のように見える。えなくも無い。

ハヤトは袂からバツヂを出してチユキに歩み寄る。

「うちの息子を負かすなんてたいしたもんだ。リーグ公認のウイングバツヂだ。さあ、貰ってくれ」

「え、良いんですか？」

「息子のハヤテはまだまだポケモンの知識が浅い。今日からまた特訓をし直さなくては…ハヤテ！ジムをしっかり直すんだぞ！」

ハヤテはカイリユウのそばから顔を出して返事をした。

「はぁーいー……」

反省している様子だ。

こうしてチユキは最初のバッヂを手に入れたのだった。

-

Chapter・20 V・S・ハヤテ（終幕）（後書き）

雅之「てな感じでまずはウイングバッチGET」

チユキ「カイリユー強かったわ……」

ナツマサ「て、言うか無敵だな。トゲピーのFain」

雅之「全くだ。しかも男前」

チユキ「ありがとねー、Fain」

チユキの胸に抱かれているFain。一人ほくそ笑む

雅之ノナツマサ（策士……！）

チユキ「最後に出たハヤトさんって先代のジムリーダーよね？」

雅之「そーだよん」

ナツマサ「ハヤテのあれはいつもの事なのか…?!」

雅之「たまたまそうなったただけだから」

チユキ「いつも異常になってたら大変よね」

2010/5/6・

Chapter・21 電気のポケモン達（前書き）

チユキ「早いわね。」

ナツマサ「今日は…9月23日か」

雅之「おー、そだ。チユキ親父からメール来たんだって？」

チユキ「うん。ヒワダに怪しい影がいると言う情報が入ったから調べてくれたって」

ナツマサ「あいつら邪魔だし、置いてこーぜ」

チユキ「……そうね」

雅之「何気に酷いなお前ら……」

Chapter・21 電気のポケモン達

―ここはキキヨウ総合病院。

ヒビキは明後日退院するが、チユキとナツマサは悠長に待っていてられない。と、言うのもヒワダタウンで黒い影を見たと言う情報がチユキの元に入ったのだ。

チユキの父上であるサカキサトシからその黒い影を調査せよとのメールが届いたのだ。

「ヒビキ、具合はどう？」

病室の扉を開けると、ヒビキとコトネは二人とも眠っている。

「……………」

畜生、邪魔したくなる！という感情を抑え、メモを机の上に置く。

“ 急ぎの用があるので先に向かいます。コトネはアルフ遺蹟で貝の化石を復元したら？ ”

「 チュキ ”

病室を後にし、チュキはナツマサと一緒に32番道路に向かった。

仲良しの F a i n と ト ト が、今日は外に出ている。

「 チョゲ」

「 ピー」

おてて繋いで仲睦まじく歩く様をチュキとナツマサは複雑な顔で見ている。

「 小さい頃を思い出すわね…」

「 一緒にたくさん遊んだよね」

「 だって、子供私達しかいなかったもの」

「 そうでもないよ。マサラに帰ってきたトレーナーが結婚して、今じゃ結構子供がいるらしいんだ」

「私達、狭間だったのね」

「確かに」

32番道路は海に面しており、この地域には珍しく電気タイプが自生している数少ない場所だ。

しかし、どうも様子がおかしい……

「きゃあー!!」

チユキがいきなり叫んだ。

「ユキねえ!？」

「か・わ・いいー!」

ナツマサはそれはもう派手にずっこけた。

…いつもならアーボやサンド、ハネッコ、マダツボミなどのサバン

ナ系や夜になるとウパーやズバットなどの洞窟系が出る。

電気タイプで自生しているのはメリープだけなのだが……

叢はという訳か電気タイプの宝庫となっていた。

チユキがかわいいと言ったのは、カントーのトキワの森にしか自生していないピカチュウだ。

他にも、コイルを限界まででかくした様なものやボールの様なもの、コンセントの様な頭のもの、針の様に毛が立っているものなど様々なポケモンがいた。

「わあー！」

「珍しいな、こんなに電気タイプがいるなんて……」

「バリバリバリバ！」

空から何か、電気の様な……いや、鳥の鳴き声にも聞こえる様な音がした。

「？」

「なんだ?!」

次いで、黒服が雷の鳥を捕獲しようとする光景が目に見え込んできた。

「バリバリバリバ！」

またその鳥が嘶くと、今度は黒服に雷が落ちた。

「ぎゃーっ!」

他の電気ポケモンも、黒服に威嚇攻撃をする。

「メーリィー!」

率先してメリープが攻撃している。

すると、洞窟内から一匹の電気タイプのポケモンと一人の黒服が出てきた。

「ズバット、超音波！」

「ミィィィ！」

「コリッ！」

そのポケモンはギリギリの所で避ける。

しかし、かなりボロボロだ。

ナツマサは、ハウエンの電気タイプポケモンと話している。

「力を貸してくれ、ラクライ！」

「ライッ！」

「黒服とズバットに電磁波！」

ラクライは微弱な電気を口から発し、その一人と一匹を痺れさせた。

「痺れっ！！？」

ズババ؟؟！

その隙に、チユキはH e Bを取り出した。

逃げるポケモンを一回復するために…チユキは叫んだ。

「おいで、コリンク！」

コリンクは真っ直ぐチユキの手にあるボールに飛び込んだ。

「あつ、こら！そいつは唯一改造に成功したポケモンなんだ、返せクソガキ！」

改造と聞いて、真っ先に顔色を変えたのはナツマサだ。

チユキのボールポーチからW i l dが飛び出した。

何やら、この黒服の人物を知っている様だった。

「…！フツ、なるほど。上が言ってたガキってのはお前の事か。俺はポケモン改造ファクターのシャカ！そのリングマとコリンクは俺たちの研究成果だ。返してもらおうか」

「!？」

黒服のシャカはヤミヲミを繰り出した。

「不意打ち！」

「騙し討ち！」

先手を取られたが、チユキもW i l dに指示を出す。

不意打ちをギリギリで避け、背後から騙し討ちを繰り出す。

「グマア！」

「ヤミイ?!」

「使えないポケモンとして捨てた時の事が嘘みてえだ！」

チユキがわずかに動揺する。W i l dはチユキの攻撃命令を待っていたが…

「炎と雷スタンバイ！」

W i l dに指示を飛ばしたのはナツマサだ。

W i l dはナツマサに言われたとおり右手に炎のエネルギー、左手に雷のエネルギーを溜める。

「ユキねえ！今はバトルに集中して！コリンク、電光石火！」

攻撃を仕掛けようと飛び込んできたズバットに電光石火を当てる。

「ライツ！」

「ズバ？！」

チユキはハツとして、シャカとヤミラミを見据える。

「ダブルパンチ！」

炎と雷がヤミラミの急所を突いた。

「ヤミ…！」

「…っ！」

シャカはW i l dの圧倒的な強さに言葉を無くした。

「スパークッ！」

「ライイツ！」

「ズバァ…！」

ナツマサのほうも終局した。

「ゴー、B e a t！バーンブロウガ！」

炎を纏いし風がシャカとズバット、ヤミラミを押し戻した。

「ぐ…っ！ひとまず退散だ…！」

シヤカは二匹を戻し、ヤミカラスに掴まって空に消えた。

-

Chapter・21 電気のポケモン達（後書き）

雅之「トレーナーメモは次の前書きに記載します」

チユキ「コリンクとラクライの？」

雅之「そう。ましてやラクライはまだ野生だし」

ナツマサ「そう言えば」

ラクライ「ライライッ」

Chapter・22 サンダーの磁場（前書き）

まず、こないだのポケモン達のトレーナーメモをどうぞ。

トレーナーメモ

Link ♀（コリンク） LV・10

頑張り屋な性格。 20xx年9月23日32番道路でLV・10の時に出会った。逃げるのが早い。

クク ♀（ラクライ） LV・10

勇敢な性格。 20xx年9月23日32番道路でLV・8の時に出会った。負けん気が強い。

さて、今回はナツマサがいつになく喋ります。

一応、オーキドナナミ博士の甥っ子なんで知識はありますよー。
というアピール？（笑）

そんな事しなくても、チユキは大丈夫だって。

雅之「ってゆーか、お前ら。誰か忘れてねえか？」

チユキ「はい？」
ナツマサ「ん？」

雅之「トゲピー達は何処いんだよ？」

チユキ、ナツマサダッシュ！

雅之「気付くの遅……」

-

Chapter・22 サンダーの磁場

チユキとナツマサはトゲピーを探す。

「Fain!」

「トト!」

雷の鳥がまた一鳴きした。

「バリバリバリバ!」

すると…

「チヨゲ」

「ピッ」

トゲピー二匹がその雷の鳥に乗っており、指を降り出した…

Fainの頭上には炎のエネルギー

トトの頭上には風のエネルギー

しかも、

その技は限られたポケモンしか使えない技で。

「キー！」

「ピー！」

炎の技は風の技と混じり合い、とてつもないスピードを伴いながら黒服のポケモンと黒服を薙払う。

炎の技の名は聖なる炎、
クロスファイア

風の技の名は風の砲弾
エアロブラスト

ポケモン達はもれなく火傷を負っていた。

そして更に…

トゲピー二匹の体からエスパー技が発する独特の波紋が発せられると――

黒服の連中は頭を抱えて蹲る。

「ぐああ!？」

「あ、頭が割れる?!」

黒服のポケモン達も苦しそうだ。

「神通力…!？」

「そのような…しかし、なんでサンダーがこんな所にいるんだ？」

よく見てみると、サンダーは何かのバリアーに阻まれて、この32番道路から出られなくなってしまうたようなのだ。

「ねえ、なっくんはどう思う？」

「聞いた話だけど…電気ポケモンは自生する場所が限られているだろっ?そこは時折サンダーが身を休める為の護衛が必要になるんだ

つて。よく見ると、自生区域は鉱山に近かったり、特殊な磁場が生じやすい場が多いんだ。ファイヤーも同様に、火山や炎のポケモンがいる場所に、フリーザーは雪山や氷のポケモンがいる場所に体を休める箇所を幾つも持っているんだ」

「へえー…」

「恐らく黒服も同様の考えをしたんだと思う。だからこの場所に罠を仕掛けた。…他地区の野生電気ポケモンを連れて来れば磁場は自然に強くなり、入る事は出来ても出る事が出来なくなるバリアーを自然発生させたと見て間違いないよ」

「なるほどね。流石、オーキド博士の甥っこね」

無論、ここで言うオーキド博士とはナナミを指す訳だが。

「まあ、それくらいは…」

ナツマサは若干照れて頭を掻く。

「一番の原因になってるのは誰？」

「恐らくジバコイルとサンダースだ。奴等を戦闘不能にすれば自動的にバリアは解除出来ると思う」

「オツケー、私はジバコイルを担当するわ!」

「サンダースは任せとけ」

二人は各々ポケモンを表に出し、二手に別れた。

…すると、すぐさま変化が現れたのはBoreだった。

「ゴロゴロ…ヌマツク!」

「いくよ、bore!泥の噴射!」
ヌマツク

Boreは体に含まれている水で地面を溶かし、その泥をジバコイルに当てた。

「ジババ?!」

鋼と電気にはかなり手痛いダメージだ。

「怯んだ所に泥掛け！」

続いて先程より少ない量の泥をジバコイルに浴びせる。一見ダメー
ジは少ないように見えるが相性的には二重丸。

「ジ、ジバン…」

ジバコイルが戦闘不能になると、辺りの磁場の負荷が軽減した。

『全国ナンバー462。ジバコイル。磁場ポケモン。高さ1.2m。
重さ180.0kg』

「磁場の強い天願山で発見されたポケモン。レアコイルの分子構造が組み替えられて変態した。科学力で進化させようとしたチームがいたが敢え無く失敗した。なるほどね……このポケモンだけで相当磁場を作り出してたの…！」

ジバコイルは強烈な磁場を伴いながら、32番道路を離れた。

「バリバリバ！」

トトとF a i nは互いに頷いて頭上に雷のエネルギーを溜める。

「チヨキー…」

「チヨゲー…」

「「ピッ!」」

その技は回転しながら微弱になったバリアーを貫き、大きな穴が開いた。

「電撃波!」

「舞子さんのトゲピーは凄いな……」

ナツマサがポロリと呟いた言葉で、チユキはやはり、と確信した。

サンダーは、チユキとナツマサの傍らに降り立ち、トゲピー達を下ろす。

「サンダ」

サンダーはお辞儀をして、磁場バリアが破られた場所から逃げて行った。

「畜生！もう少しでサンダーを掴まえたのに！」

「Beat！」

「二ノ！」

マグマラシとアリゲイツが黒服の前に立ち上がる。

「噴火！」

「濁流！」

上からは火が降り注ぎ、下からは泥を伴った波が一気に押し寄せる。

「「「ぎよあああ！？」」「」」

黒服は退散を余儀なくされた。

32番道路キャンプベースに付いたのは夕刻だった。

「ふうつ、疲れたあ…！」

「俺も…なあ、大丈夫かクク？」

「ライツ！」

何故ナツマサがラクライのククを気に掛けたのか説明しよう。ごく簡単な理由だ。

疲れて眠ってしまったトトを背負わせているのだ。

ナツマサは腕に火傷を負ってしまい、トトを抱えられないのだ。

この怪我はBeatのせいではない。

噴火で熱せられた水（すなわち濁流）が一気に昇華し、高温の水蒸気がたまたま腕に当たってしまったのだ。

Fineはと言うと…チユキの胸の中で眠っていた。

よっぽど心地よいのか、それとも良い夢を見ているのか。満足そうな顔をしている。

「頑張ったもんねーFain」

（策士いいい！）

ナツマサは心の中で思い切り歯がみしていた。

今日のキャンプベースは静かに過ぎていった。

-

Chapter・22 サンダーの磁場（後書き）

雅之「あ、言つとつけど黒服はTIIIDAとは何の関係もないぞ？」

ナツマサ「へ??？」

雅之「TIIIDAは強いポケモンをより強くする実験を、ポケモン改造ファクター（黒服の組織内の一部です。黒服の組織の名はDARKERです）はどんなポケモンでも強化できる実験を行ってんだが…まあ、改造はやっぱりあかんよなあ…ちなみに俺は乱数調整とか個体値とか話しには聞いているけどやった事ないぞ」

ナツマサ「健全なプレイヤーですね」

チユキ「…じゃあ、WildもLinkもそのポケモン改造ファクターで改造されたポケモン…？」

雅之「平たく言やあな。でも強さはDARKERよりTIIIDAの方が強いんだけど…まあ、関係ないわな」

「2010/5/8」（2010/7/21改）

-

Chapter・23 覚醒の時（前書き）

雅之「ミオ図書館の書物『シンオウ昔話』曰く“人と結婚したポケモンがいた。ポケモンと結婚した人がいた。昔は人もポケモンも同じだったから、普通の事だった”…それは有り得るのです。そう、今でも…」

チユキ・ナツマサ「何の事だ？^{です}」

雅之「お前ら、半分××××なんだよ」

チユキ・ナツマサ「はあっ?!」

雅之「読者の皆さんにはまだ発表しませーん」

チユキ「ちょ、ちょっと待ってよ!」

ナツマサ「しっかり説明しろ!」

雅之「あー、聞こえない」

二人「コラコラコラー!!」

-

Chapter・23 覚醒の時

9月24日早朝――

32番道路は以前の趣を戻していた。

熊野灘はキラキラと光り、ハリーセンが海面まで浮き上がり、その様子を眺めている。

ハネツコや、アーボ、サンドが叢に戻ってきた。

「今日は晴れそうね」

「そうだな。…あれ？」

ピリリリ♪ピリリリ♪

チュキのP・phoneが鳴っている。

「はい、チヨキです」

『ウツギだ』

TVコールで、相手の姿がP - p h o n e に映し出される。

「あ、博士！」

『お父様から、トゲピーが生まれたのを聞いたから…』

「チヨキ？」

F i n e は P - p h o n e に興味を持って近付いてきた。

「はい。無事に育ってますよ」

P - p h o n e を F i n e に向けると、F i n e はちよっぴり驚いた。

「チヨキ?!」

『何か特別な技を覚えていたかい?』

「電撃波と神通力ですね。…後、何か強過ぎる気がするんですが」

FineはマジマジとP・phoneを見ている。

『それはねえ、僕が作ったポケルスがポケモンの本来の力を引き出してるからなんだ。僕が最初にあげたポケモンはもれなく付いてるんだよ。ポケルスは手持ちに感染していくんだ。僕の作ったのは二、三週間は保つから、強くしたいポケモンは手持ちに入れておいた方がよいよ。それじゃあ、そのキャンプベースにある物を送ったから受け取ってね!』

チユキは目を丸くした。

「ポケルス? なつくん…」

「俺はポケモン広辞苑かい」

出発の準備をしているナツマサに、チユキは声を掛けた。

ナツマサがチユキの荷物を纏めながらすかさず突っ込む。

「ごめんなさい…」

「良いけど……ポケルス、正確にはポケモンウィルスは22年前に発見された謎の生命体なんだ。戦闘後、ごく稀にポケモンに付くんだけれど、ポケルス自体はとも万能的奴でな…ポケモンの本来の力を呼び覚まして強くしてくれるんだが……あの博士、そんな研究もしてたのか。ましてや、ポケルスを人工で作り出すってすごい事だよ」

「だから早く進化したのかな？それに…変な技が使えるの」

ナツマサは昨日のバトルを思い返していた。

「あー、バンプブロウガか…俺のアリゲイツはストームラッシュって技が出たり出なかったりするぜ」

「未知なる領域って感じね…」

二人はP - p h o n eを見つめて唸る。

「唸ってる暇はないのではないか？」

ふと、低い声が耳元で聞こえた。

ナツマサの声でも、チユキの声でもない…

二人は顔を上げると、……Wildが二人を見下ろしていた。

「……」

「……」

二人は言葉を無くした。

（今の、空耳じゃ…ないよね……？）

（……チユキも聞こえた……よな？）

「？どうされた、チユキ殿にナツマサ殿」

途端、二人は思わず吹き出してしまふ。

「いや、殿って（笑）」

「言われて悪い気はしないな（笑）」

今度はWildが驚く番だった。

「うん?! 何故私の言葉が分かるのだ?」

千幸は我慢できなくて大笑いしだした。

「なんで言葉が古臭いの〜!」

ナツマサも限界のようだ。

「武士かよ! 我って!!」

笑い転がる二人には何を言っても無駄だった。

「おい、チユキ…」

「ナツマサ様…」

別の声が、今度は下から声が聞こえた。

男前の声と可愛い声。

「かつ……」

「？」

チユキがトトにギューッと抱きついた。

「……っわいーん」

「あ、チユキ様?! い、いけませんわっ!!」

トトは真っ赤になって離れる。

F i n e は当然ご立腹…

「あつ、トト! それ俺の特権!!」

F i n e はチユキの腕に収まる。

「このやーらかい胸は誰にも触らせないぞっ!」

チユキとナツマサの鉄拳が降り注ぐまで後三秒……

「変態Fine!」

「」のどぐさねえ!」

「ぎゃー!?!何で〜?」

「馬鹿ですわ…」

ベースリーダーからお昼用のおにぎり美味しい水を貰い、お届け物を受け取り、繋がり洞窟に向かう。

「なるほどー、ポケモンの言葉が突然分かるようになったんですか」

と言うのは、Bore。

ヌマクローののったりした喋りがなんとも心を和ませる。

「不思議な事ですわ」

これはトト。お嬢様のような喋り方だ。

Fineは今朝の件があつてから、一日ボールの中にいるようキツく叱られたのだった。

と言う訳で今日はBoreが連れ歩きの対象になったのだ。

繋がり洞窟に入る前に、届け物の中身を確認する。…中には丸い石が二つ入っていた。

「変わらない石だね。進化を抑える為の石だよ」

「私が持つても構いませんか？」

トトがナツマサに尋ねる。

「二つあるんだし、良いよ。ね、なっくん」

チユキはトトに変わらない石を持たせた。

「悪いな、何か」

「私もF i n eに持たせとこうつと」

ボールポーチのF i n eの入っているボールのボタンに変わらずの石を当てると、変わらずの石はボールの中に吸い込まれた。

「ボールの中でもポケモンに道具を持たせられるんだ」

「あれ、なつくん知らなかったっけ？」

「実践的な事はあんまり……」

届け物の袋を鞆にしまい、繋がりの洞窟に入ると、途端に不思議な事が起こった。

「えっ？」

「おう？」

まるで磁石のようにチユキとナツマサがくつついた。

B o r e が強制的にボールに引き戻され、F i n e が何故か出てきた。

「お?！」

「はい?」

そしてトトとF i n e も磁石のように引っ付いた。

チユキとナツマサは顔を真っ赤にした。

「ちょ、ちよつと?！」

「何でホッペがくつついたんだ?？」

「離れて下さいっ!」

「んな事言ったって離れねえんだよ！」

繋がりの洞窟入口で二人と二匹が大騒ぎしだした。

-

Chapter・23 覚醒の時（後書き）

二人「コラコラコラー！」

雅之「同じ言葉で始まったなー」

二匹「どういう事だ！？」^{ですの}

雅之「あー、聞こえない（二回目）」

二人・二匹「説明しろー！！」

雅之「ではまた次回！」（脱兎！）

「2010/5/11」（2010/7/21改）

Chapter・24 ラブカスとゾロア（前書き）

雅之「お待たせしましたー。原因がわかったのでお伝えしまーす」

読者や作者はチユキとナツマサには聞こえる声と聞こえない声で分けております。

ポケモンの鳴き声のみのときは表現できない者と考えてくだされば
… ^^ ;

雅之「あとな、トゲピーの使命もわかってくるぞ。そして新ポケモン先行公開！第二弾」

涼華「盛り沢山ねえ」

雅之「この話は、黒白の世界に関連してきます」

涼華「…なーる」

雅之「ちなみに、特殊なゾロアは時渡りが出来るので、そこも注意です」

涼華「…と言う事は…？」

雅之「それでは本文をどうぞ！」

涼華「ちよっと、先に進まないでよ！」

-

Chapter・24 ラブカスとソロア

チユキとナツマサは一気に無口になった。

チユキの左頬とナツマサの右頬がピッタリ付いて離れないのだ。

頬も熱を帯びていくほど赤くなる。

「ちよつ、いい加減にして！」

「だから俺のせいじゃねえ！」

トトとFineもくつついたままだ。

「！ねえ、ちよつと静かにして」

チユキは洞窟内の異変に気がつき、トトとFineを静かにさせた。

ポケモン達は同様に、くつついている。

それも仲睦まじいようだ。

ズバットやサンド、イシツブテ、イワーク…水辺のコイキングやトサキントもくつついている。

「サンツ！」（綺麗だよ）

「サドッ」（そうかしら）

…これはかなりキツイ。

と言つのも、彼らにはポケモンの言葉が分かってしまうのだ。故に……

「キィ〜」

「ビ〜」

普通なら読者や作者が判らないポケモンの言葉が分かってしまうの

はかなりヤバかった。

「イシイ〜…！」

「イシイシイ！」

チユキとナツマサは顔を真っ赤にさせて口を閉ざしてしまう訳だ。

（ふえーん……！）

（…俺も泣きたい）

ナツマサは自分の鞆から耳栓を2セット取り出して、チユキの左手に一セット手渡した。

（これである程度防ごう）

（う、うん…）

耳を塞ぐと、幾分かシャットアウトされかなりホッとした。

ナツマサはチユキの右肩に触れて歩き出した。

「いじ、Fine、トト！」

二匹は頷いて、奥に歩く。

しかし、くつついている事に加え、聴力が制限された事により、いつも以上に火吹き野郎や山男、ポケモンマニアに呼び止められてしまった。

……半分は妬みだろう（笑）

真ん中の水辺にふと目を向けると、ピンクのハート型をしたポケモンが水面をパシャパシャと飛び跳ねている。

「ラブ〜」

「カス〜」

そのポケモンだけくつつく影響を受けていなかった。

ナツマサはチユキの右肩を軽く叩き、右の耳栓を外した。

「おかしいと思わないか？他のポケモンはもれなくついているのに……」

「そうね…もつと近くにいきましょう」

『全国ナンバー370。ラブカス。ランデブーポケモン。高さ0.6m。重さ8.7kg』

「『暖かい海に生息し、ラブカスを見つけたカップルは永遠の愛が続くと言われている。好きな人にラブカスを贈る風習の残る土地がある。』ハウエンの水タイプがなんでこんな所に……？」

ラブカス達はチユキとナツマサに気付いてまた跳ね始めた。

「キーツス！」

「キーツス！」

鳴き声かと一瞬思ったが、そうじゃなかった。

「ええっ！？」

「まさか…ユキねえ！」

ナツマサはある考えが頭に出ていた。

（水面に電撃派を！）

チユキは頷いた。

（聞こえたわね、F i n e）

トゲピー達も頷いて、技を静かに水面に当てた。

「うわぁっ!?!」

「きゃあ!?!」

ラブカス達は電気で痺れるが、一匹だけこっちを睨み付けている。

「イカサマしてやる!」

ラブカスの一匹がトゲピー達に攻撃を仕掛けた。

「あぶねえっ！」

Fineはトトとラブカスの間に入る。

「Fine、指を振る！」

Fineの手に、格闘のエネルギーが堪り

ラブカスに真っ直ぐ当たる。「うわぁ！」

ラブカスに直撃し、吹っ飛ぶ。

「波動弾…！やっぱりそいつ、ゾロアだ」

ナツマサはそのラブカスの正体を見破った。

その声が合図だったのか、ラブカスの姿が狐に変化した。

「くそっ、騙し討ちだっ！」

「特性のイリュージョンで他のポケモンに変化出来るんだ。来るぞ！」

「Fine、守るから指を振る！」

左手で守りの壁を支え、右手で指を振る。

何本もの針が右手から出現する。

「えっ？」

「トゲピーをなめんなよ！ダブルニードル！！！」

逆に不意をつかれたゾロアはダブルニードルを受けて倒れた。

「むぎゅっ……」

ラブカス達をよく見ると、赤い糸を持っていた。

「赤い糸……って、異性がメロメロを受けると放った方もメロメロに

なる道具だよね？」

周囲のポケモン達を見ると、もう離れていた。しかし、チユキとナツマサだけはくつついたままだった。

「半分ポケモンだと中途半端だな…」

「半分は人間だからね……」

「トト、やってみるか」

「はいっ。」

トトとFineは主人である二人に神通力を当てる。

技の衝撃で、二人はようやく離れた。

「よかった……」

「ありがとな、トト」

「ワシを負かすなんて、やるなお主ら」

ゾロアはF i n eに近付く。

「魂のポケモンだからな」

「私は心のポケモンなの」

トトはF i n eに寄り添う。

「魂に響く海鳴の音」

「心を貫く透明の音」

「司るは海底を守りし海の長…ルギア」

「司るは大空を守りし虹の王…ホウオウ」

ゾロアも口を開く。

「ワシは闇のポケモン。森にうつねる時の音色…司るは時を渡しし光

の神…セレビィ」

三匹はどうやら同じ使命を持ったポケモンのようだ。

「ワシはのう、ここにいてセレビィに相応しい人物をずっと探しとる。ウバメの森に近いここなら調べやすいしのう…」

「とは言え、イリユージョンの特性が裏目に出てしまったようだな。ラブカスのメロメロボディにあてられて、それがポケモンを引き付ける騒動になったようだね」

ナツマサはゾロアに元気のかけらを渡す。

悪気があつてした事ではないと分かったからだ。

「悪いな、人間。銀色に光る魂と黄金に輝く心を持っているとは思わなかった…出口まで案内しよう。攻撃をした詫びだ」

ゾロアは元気のかけらで回復して、二人と二匹を出口まで案内する。

「ねえ、アルフ遺蹟だったら良いんじゃない？ちょうどあなたが言う相応しい人間がいるかもしれないわ」

チユキはゾロアに話しかける。

「アルフかあ、可能性はある。…うん、行ってみよう。色々と手間かけたな、人間…名前を聞いてなかったな」

「私はサカキチユキ」

「俺はオーキドナツマサ」

「チユキにナツマサ…覚えておこう。その先が出口だ。雨に気をつけな」

ゾロアはテレパシーで話していたが、チユキとナツマサはゾロアが話しているものと認識していた。

ゾロアが洞窟の向こうに消え、二人と二匹はやっと洞窟を抜けた…
…が。

迎えてくれたのは盛大に降り注ぐ雨…

「朝はあんなに晴れてたのに？」！」

「山の天気は変わりやすいからな…」

二人と二匹は急いでヒワダタウンに向かう。

チユキとナツマサの手は知らずに繋がれていた。それは繋がる騒動ではなく、とても自然な二人の気持ちで…

チユキとナツマサは自然と笑顔になっていた。

-

Chapter・24 ラブカスとソロア（後書き）

涼華「策士やないか」

雅之「それほどでも」…って、何でCOWCOW？」

涼華「やっと恋愛色が強くなってきたわね。ま、私が監修してるんだけど」

雅之「無視かよ」

チユキ「なんだかんだで、お二人仲いいですね？」

ナツマサ「確かに。…どSとどMだけど、それがまた良いんだろうな」

涼華「あー？ちゃうちゃう。俺そんなつもりないし…好きな人はオードリーの春日様ですから（*^^）」マサは単なる友達」

雅之「……姐御……」

ナツマサ「あれはしばらく立ち直れそうにないな……」

チユキ「……涼華さん…大人げない」

涼華「うん？なんか俺変な事言った？？」

「2010/5/18」（2010/7/21改）

く幕間く 国際警察、動く（前書き）

雅之「ふいゝゝ、間に合った」

チユキ「何が？」

ナツマサ「今日は俺ら出ないのな」

雅之「お前らが旅する事になってたからな。ここで出す人達はこれから物語に大きく係わることになります。ちなみにゝゝ国際警察本部はイツシュ地方にあります（笑）」

二人「イツシュ地方??」

雅之「それでは、本文をどうぞ！」

く幕間く 国際警察、動く

キュウリをかじる音が、部屋に響く。

「おはよー、元気そーだなサクラ？」

サクラとは桃色のイーブイだ。

「ブウイ〜♪」

両手で顔を撫でられ、満足そうなサクラである。

ポリッ

その人物はまたキュウリを囓った。

人物の住んでいる部屋はガーデニングでいっぱいだった。

朝の和んでいる空気を裂くように、P o r i s - I が鳴り響く。

「はい」

『クールアイさん、出勤要請です。ジヨウト地方のヒワダタウンに不審人物。ヤドンの井戸で何をしているのか動向を探れとの事です』

「リョーカイ。ユニオンの上空で落ち合おう」

『わかりました』

クールアイは、サクラを肩に乗せてボールをベランダに放る。

「行くぞ、ユキ！」

「ボマアア！！」

ボールから出て来たのは、歴戦の戦士を思わせる程に鍛えあげられたボーマンダだ。

「久し振りの遠出で楽しいだろ？」

「ボマツ！」

ユキは嬉しそうに頷いた。

「ポリスユニオンを経由して、ジョウトのヒワダに頼む」

クールアイはサクラを肩に乗せたまま、ユキの背中に飛び乗る。

「ボマツ！」

翼を大きく広げてユキは大空高く高度を上げた。

ポリスユニオンに進路を取り、ユキは力強く飛ぶ。

その力強さはカイリユー以上の風格すら在った。

ユニオン上空に差し掛かると雲の鳥に乗った部下がそこで待っていた。

「待たせたな。ブルースカイ」

「そんなに待ってませんよ。じゃ、T a l i s」

「チルー」

二人はヒワタウンに向かった。

雲の鳥と、ボーマンダは更に高度を上げてイツシュ地方からかなり遠くに位置するジヨウト地方へと向かっていった。

空に、キュウリを齧る音がたびたび聞こえていた。

〈幕間〉 国際警察、動く（後書き）

雅之「えー、ご紹介します。クールアイこと、クライシヨシオさんに」

クール「よ」

雅之「ブルースカイことコサカルミさんです」

ブルー「初めまして、皆さん」

クール「ドラマからの出向だー。まあ、パラレルだわな」

ブルー「私達がこう言うのに出るってなんだか不思議ですね」

雅之「以前右京さんが勝手に後書きに出たことがありましたが、今回はちゃんと申請いたしましたし。今後の二人の活躍、乞うご期待！！それと、クールアイさん、かなり強いですよ。サトシくんより強いからね」

クール「んなこたあ、判ってんだよ。ポケモンの声を根こそぎ拾ってんだからな。なーサクラ」

サクラ「ブイ、ブイ」

ブルー「私ももっと頑張りたいんですけど…」

雅之「十分強いと思いますよ?…では、今回はここまで。…おっと、サクラは新たなイーブイ進化として参加しています。どんなポケモンになるかは…わかりません（笑）」

Chapter・25 ヤドンの井戸（前書き）

雅之「どうもー！今日は……何日でしたっけ？」

チユキ「いきなりボケをかましてきますねえ……」

雅之「あ、9月25日です。まあ、とにかく幕間は気にしない方針で」

チユキ「…どゆこと？」

雅之「最低でも半日は掛かるから、彼らが出るのに」

チユキ「へー？…えっ？！」

雅之「今回は珍しくスローペースです。ではゆっくりと本文へどうぞー」

やあん

やあん

Chapter・25 ヤドンの井戸

「んっ…っ！気持ち良い朝！」

チユキは珍しくすがすがしく起きることが出来た。

「皆、オハヨー！」

ヌマクロー
Bore「おはようです」

リングマ
Wild「うむ」

マグマラシ
Beat「おはようございます、チユキ様」

コリンク
Link「うーん…おはようございます、皆さん」

トゲビ
Fine「むっん…もう少し寝かせろや…」

…これだ。

生まれて間もないのはよくわかるが、Fineはよく眠る。

…よく眠る、と言えば。

このヒワタウンには看板ポケモンがいる。そのポケモンもよく眠るので有名だ。

「そういえば、ポケセンの脇に大きいヤドン居ましたねえ」

と、Boreが言うと、チユキはふとあることを思い出した。

「うん！そうだ、ちょっと電話してみよ…」

チユキは鞆からP・Phoneを取り出して、ある人物に電話を入れる。

『おお、サトシくんの娘さんなの？』

「お久しぶりです、ガンテツィツサイさん！実はやっとヒワタウンについたのでその電話を」

『おお、そうか！孫と共々村はずれの家で待つておるぞ！いつでも遊びに来なさい！』

「ハイ！ヤドンの井戸を観光してからそちらに伺います」

チユキは電話を切って、ストレッチを始めた。

そのタイミングでナツマサが起きた。

「ふああ…ゆきねえ、早いね…」

「おはよう。寝てて良いよ？今日はゆっくりのんびり過ごすからさ。ジムは明後日で良いし」

「…そう…じゃ、寝てるわ…」

ナツマサはベッドに倒れこんだ。…というのも、夜遅くまでナツマサはポケセンの中に常設されているトレーニングルームでポケモンのトレーニングをしていたからだ。

チユキに追いつくために…チユキを守るために。

眠るナツマサの頬に、チユキは軽くキスをして、ポケモンたちをボイルに戻し、Fineを抱いて外に出る。

「あ、居た。おはようございます、ヤドンさん？」

「……………そなたは魂の光の使い手か…。道理で眩しいわけじゃ…」

ポケセンの傍にいるヤドンは、どうやら長老だったようで、チユキをゆっくり仰いでそう呟いた。

「…？」

「そなたと彼が交わる時、時の光を持った者が覚醒する。…不思議な事よのう」

「ふわゝあ…、外かよ。通りで寒いわけだ」

Fineがチユキの胸の中で目を覚ました。

「そなたが魂のポケモンか。…フム、実に愉快じゃの。」

「何だ？ヤドンの爺？？」

Fineの寝ぼけた声が、どうもヤドン長老には面白い人物と認識されたようだった。

「ほっほっほ。そなたはまだ本来の力を解放できてないようじゃな。ヤドンの井戸に行ってみなされ。若い衆がそなたを大いに高めてくれるじゃろっ」

「ヤドンの…井戸?？」

Fineは首を傾げた。

チユキは声を落として、

「そうします。ありがとうございました」と呟いた。

「何だ、今のヤドンの爺…本来の力…って何だ？」

「とにかく、ヤドンの井戸に行くよ。もうちゃんと起きたから自分で歩いてね」

「うーっす」

Fineは、可愛く目をこすって歩き出す。

「私を、守ってくれるんでしょ？だったらナツマサみたく強くなつてね。ヤドンの井戸でヤドンの若い衆があなたを鍛えてくれるんだって」

「ええー…メンドくせ…」

Fineはいつもはこんなだが、いざと言う時の力は半端なく強く、Wildにも引けを取らない。

実際、キキョウジムで流星群から皆を守った時などは、守る+神通力で流星群の威力をほとんど打ち消したのだ。

もちろん、チユキは自分を守ったのかとも思ったが、そうではなかった。ああでもしないとその場に居た誰もが死ぬ可能性があったからだ。

その本来の力は普段は眠っている。その力は無理に引き出すのではなく、自分が気づいて解放するのが一番良いのだ。

ヤドン長老はそれを見抜いたのだ。

「俺一人で行くのか!？」

「だって、私Linkと今日は遊ぶんだもん。Fine、頑張つてねー」

ヤドンの井戸に入ると、そんな声が響いた。

「んな殺生な…」

「いいから早く行く!」

Fineが奥に足を踏み入れると、大勢のヤドン達がFineを見つめた。

「……………こいつが、」

「……………魂を司どる」

「……………ポケモンか」

「……………話は聞いている。こっちに来なさい」

若い衆の一人が、Fineを手招きした。

Fineは唾を飲み込んで、ヤドンの若い衆に近寄った。

Chapter・25 ヤドンの井戸（後書き）

ヤドン長老「ほっほっほ。まだ青いの」

雅之「…Fineはまだ甘いっすか？」

ヤドン長老「おまさんの文章力じゃよ。何じゃ、今回は会話中心じやのっ」

雅之「下手に書きすぎてもあれなんで、今回は会話で。…ダメっすか？」

ヤドン長老「…今回は多めに見るとするか。次はFineの修行風景じゃな。精進し給えよ、Fine殿も、雅之殿も」

雅之「へへっっ！」

「2010/6/1」（2010/7/21改）

Chapter・26 井戸のならず者（前書き）

雅之「梅雨の時期ですな……」

チユキ「やっぱ気になるな、Fine」

雅之「そうか？」

チユキ「だってヤドンの井戸に不審人物いるのよ?!」

雅之「…記憶力いいな……」

-

Chapter・26 井戸のならず者

「ではまず手始めに…念力を神通力で守りなさい」

何人かのヤドンが、Fineに向かって念力を繰り出す。

人数が多い為、念力だけなのに神通力並の強さがある。

「つつ…！やってくれんじゃん、早速」

Fineは身体に念の力を溜めて、念力のダメージを最小限に食い止める。

「なかなか強い神通力だね」

「甘く見られてちゃ困るな。俺には特別な技が後三つあるんでね！」

Fineの両手に電気が溜まり、細い電撃派がヤドン達を襲う。

「わー！」

「ひえー！」

何人かはその技が急所に当たり倒れる。

「何と強い電撃派…ですが、皆！保護色」

ヤドン達は周りに同化して地面タイプになる。

「対策はされてる訳ね…」

Fineは胸踊る戦いに思わず笑みが零れる。

バトルって、楽しい…！

「手緩い！次いで水鉄砲！」

「どおりゃー！」

水鉄砲はFineの気合いで放った波動弾が相殺する。

「うぬ…！」

ヤドンの若い衆らとF i n eは奥に何者かの存在を察知した。

「…何かいる……！」

F i n eは身構える。

「うーん、なかなか面白いところだな。ヤドン達も強そうだしな。何匹か捕まえてくか」

その人物はデルビルを繰り出した。

「こんなかで強そうなヤドンにかみ砕け！」

「ハイです！」

デルビルはまだ幼い風が残っていたが、大量の群集に臆する事なく突撃した。

「ちいっ！ガキは苦手だよ……」

Fineはそういいながら力をセーブした波動弾をそのデルビルに命中させた。

「わぁ?!」

その波動弾をまともに喰らったデルビルはあっという間に目を回してしまふ。

「ちいつ!何か別のやつがいるな!?!」

今度は、その人物はヘルガーを繰り出した。

「俺の息子をやったのは、お前だな?!」

いきなりの敵意剥き出しにFineは図らずも興奮した。

「だとしたら...どうする?」

「お前を殺す!」

「おーおー、物騒なことを簡単に言ってくれんじゃん」

「Fine殿を援護じゃ！半数は水鉄砲、半数は泥爆弾で相手の動きを鈍らせるのじゃ！」

いつの間にか、ヤドン長老が皆に指示を飛ばしていた。

ドシュバツ！

ボワーン！！

「ぐー!?」

「正面がから空きだぜ、オッサン」

Fineは幾多のヤドンの波を掻き分けて、零距离でフルパワーの波動弾を喰らう。

「ぐがあっ!!」

「俺は命までは盗らないからな。手加減してやったよ」

Fineは自分の三倍はあるヘルガーに一瞥を投げ掛ける。

「…何だよ、このトゲピーめっちゃ強えーじゃねーか…！グラエナ、あいつを捕まえるぞ！」

その人物は俄かに動揺した。それだけヘルガーを強くしていたので、そんじょそこらの野性ポケモンは噛み付き一発で沈めてきた実績があるからだ。

だが、その最後のポケモンはとつときのポケモンだ。たかが野性のポケモンなのにあの強さは研究の仕甲斐がある。

「あたいの子供と夫をよくもやってくれたね！覚悟するんだね！」

Fineはますます心踊った。

「ヤドンの皆、手出しは無用だ！俺一人で対決したい！」

ヤドン達はその言葉に従い、戦いの為の場所を広げた。

「なかなかフェアな殿方ね。」

「レディーですからね、あなたは」

「グラエナ、不意打ち！」

主人の言葉を聞きながらF i n eに突進するグラエナだったが…

「遅い、守る！」

不意打ちは守るに弾き返された。

「ちい！距離をとって神速！」

グラエナは素早く後退し、F i n eに向かって神速をしようとする。
が…

トゲピーの動きはそれを上回っていた。

神速を読み切り、効果抜群のカウンターを退歩を利用して繰り出した。

神速の威力がかなり強かっただけにグラエナは神速と同じぐらい弾き飛ばされた。

「やるじゃない。強い男って私、好きなの」

グラエナは言葉に切り替えた。

「生憎と、俺は守るべき人がいるんでね…お前らの仲間になる気はない！」

「グラエナ、騙し討ちからかみ砕く！」

「…残念ね。これで終わらせてもらっわっ！」

「Fine、真後ろにバックで神速！」

不意に、チユキの声が洞窟に響いた。

Fineの姿が一瞬消え、二人の位置が逆になってまた姿を見せた。

Chapter・26 井戸のならず者（後書き）

雅之「あー、出ちゃった…」

チユキ「だって、今のは危ないよ!」

雅之「そうそう、今日涼華姉貴実家に帰ってんだよ」

チユキ「ああ、アクトシティの発祥の地ね」

雅之「そっ」

「2010/6/5」

Chapter・27 ならず者の正体（前書き）

～前回までのあらすじ～

Fineの修業を影から見ていたチユキは、Fineのピンチに思わず助け舟を出してしまう。

そこには体力の減らされていないFineと目を回したグラエナの姿があった…

-

Chapter・27 ならず者の正体

「何だ。貴様?!」

「特殊急襲部隊、サカキチユキ!あなたを緊急逮捕します!」

その人物はさらに動揺した。

「特殊急襲部隊…嘘だろ?!」

「そいつは嘘じゃねーよ。サクラ、龍の息吹!」

「ブイッ!」

チユキの後ろにまた別の人物が現れた。

イーブイが放った龍の息吹はその人物が次に放つ予定だったボールの開閉ボタンを破壊した。

「あんたが噂に聞いていたサトシの娘か。あんたのトゲピー、修業中だったんだろ?なかなかの身のこなしじゃねえか」

「生まれて一週間ぐらいなんですけど」

その人物は大きな手をチユキの頭に当て、豪快に撫でくりまわした。

「しかもあの的確な指示！流石サトシとカスミの娘さんだな」

「わ、わ、わっ！？」

突然頭を揺さぶられたので、チユキは慌てた。

「いーもん見させてもらったぞ。俺は国際警察のクールアイってもんだ」

気づけば、もう一人がキュウコンを出して、謎の人物を確保していた。

「私はクールアイさんの部下のブルースカイよ。ご協力ありがとうございます」
チユキはちょっと嬉しかった。同時にF i n eに申し訳ないと思った。

F i n eの目は明かに怒っていたからだ。

「おい、マスターよお…俺の修業黙ってみてたのかよ……」

（だって不安だったし…（ハハハ））

しかし、怒っている訳ではなかった。

「あの台詞聞かれてたのかよ…マジありえねー（…）」

（守るべき人がいる…それって私の事だよね？）

Fineは顔を真っ赤に染め上げた。

「んなっ…！んな訳ねーだろ、くそマスター！」

（だから私の指示、聞いてくれたのよね）

チユキはFineを抱え上げて、額にキスをした。

（…ありがとう）

「…心配だからな、他のやつに任せとけねえ。Wildは別だけだよ」

ボールの中からWildの殺気を感じて、Fineはすぐに言葉を付け足した。

「さあて、あんたの所属している組織の事を話してもらおうか」

「へっ、俺がそう簡単に何でも話すと思うか？」

その人物はにやりと不適な笑みを漏らす。

「思っね、リッチー！」

呼ばれたポケモンは自分でボールから飛び出てきた。

「ヨシオの兄貴、何かようかい？」

リッチーはグライオンだ。

「いつもの頼むぜ」

「強引に口を割らせるんっすね!」

リッチーはその人物の背後に回る。

「拷問されても俺は何も吐かないぞ!」

「おまえの考えてることと俺の考えは違うぞ?リッチー!」

リッチーは両手のハサミを閉じて、相手の脇を攪りだした。

「どああああー!!!」

「組織の事を全部吐かなきゃずっとこのままだ。」

「…言うつ、言つからもうつ、止めてくださあああ………」

井戸の洞窟内には暫く笑いがこだましつつけた。

彼の話によると、所属しているDARKERはどんなポケモンでも
ダーカー

強くなるという怪しげな研究を続けている。

特に進化前のポケモン研究が盛んで、進化後にその研究がうまくいったのが解るのだ。

研究で失敗したポケモン達は容赦なく野性に帰す…

しかし、そのポケモンによる事件がここ最近殖えて、最近の研究が捗らなくなっていたのだそうだ。

その彼の名前はヤハギと言った。

ある程度事情を聞いた後、ヤハギはブルースカイに連行された。

「クールアイさんは？」

「俺は暫くジョウトに居てDARKERの同行を探る。ブルー、後はよろしく」

「わかりました。本部に伝えますね…それじゃ私は彼をイッシュまで連行します」

ブルースカイは、チルタリスにのって空に舞い上がった。

チルタリスの足には笑い尽くして気絶したヤハギが捕まっていた。

「すごい方法ですね、クールアイさん…」

「手荒な方法は使えないからな。これが一番手緩いやり方」

他にもあるんだ…とチユキは目をパチクリさせた。

「ところで俺が出なかったらヤバかったぞ？特殊急襲部隊なんてよく出来た嘘ついちゃって…」

「だって、ああ言わなきゃFineがもつとひどい怪我をしたかもしれないし…」

「で、とつさに親父の会社にある警察の部隊を言った訳か」

チユキは俯いてしまう。

しかし、クールアイは豪快に笑いまた頭をくしゃくしゃにした。

「流石、サトシの娘だ！後先考えず突っ込んで事件を解決しまっただがよお、今後このようなことがあったらすぐ電話してくれ」

クールアイはPOLIS-iを懐から取り出した。

「はい！」

端同士を接触させ、互いのデータが画面に映し出される。

「チユキか…いい名前だな。じゃ、俺は調べることがあるから」

空中にボールを高く投げると、姿態の立派なボーマンダが踊り出た。

そのボーマンダに飛び乗ってクールアイも空に消えていった。

「あ、ガンテツさんのところに行かなくちゃ」

チユキもFineを胸に抱えたまま、町外れのガンテツ家に向かって走り去った。

「あれが、魂を司る御人どすな。…心を司る御人も、トゲピーを受け取った…これから忙しくなるわー。ほな、私もエンジンに帰りまひよ」

一人のまいこはんがその様子をずっと見ていたのを、ヘラクロスとエイパムだけが知っていた。

-

Chapter・27 ならず者の正体（後書き）

チユキ「クールアイさん…かつこよかったなあ」

雅之「だろ？暫くはジョウトのDARKERについて調べるからまだいるだろうって」

チユキ「DARKER…いかにも怪しそうね」

雅之「次回はWildのその波瀾万丈な人生がわかってちゃいます。チユキ、覚悟はいいか？」

チユキ「うん！」

「2010/6/7」

Chapter・28 過去・現在・未来（前書き）

前回の最後に出た舞妓はんはコウメです。ご存知の方もいるかと思いますが（笑）

次々回、チユキ達と会うことになります。

Wild、めっちゃ語ります。

ポケスペ見てる人はガンテツのお孫さんがフレンドボールで捕まえられたのをご存知でしたでしょうか？

そしてチユキはどうするのか…？

Chapter・28 過去・現在・未来

お昼前、漸くチユキ達はガントツの家に着いた。

「こんにちはー」

と言ってガラガラと硝子戸を開く。

「…どなた？」

まさにイマドキの服装に長髪、ネイルにメイクをバッチリキメた女性が作業台でボールを作っている。

「あ、あのう…イツサイさんは御在宅ですか？」

ボールに打つトンカチの手を休め、漸く女性はチユキを見た。

「お爺ちゃん、お客様よ」

台所に声をかける女性。するとすぐにイツサイがやってきた。

「おお、チユキちゃん早かったのう！」

イツサイはキッチンにチユキを案内した。

「あ、あの人がイツサイさんのお孫さんですか？？」

「あれでも、若者のぼんぐり離れを引き戻した先駆者での…わしも強く言えんのじゃよ」

ふ、とチユキは最初にガンテツさんと会った場所を思い出した。

「そういえば、お孫さんを探してヨシノに来たとお聞きましたか…」

「ああ、ポケモンを探しておってな…生き別れたヒメグマをずっと探しておるんじゃないよ」

ヒメグマ……成長していればリングマか…。

チユキはお昼を食べる手を止めた。最悪の事態を考えた時、目を見

開いた。

チユキは大急ぎでお昼を食べ、裏手に回ってW i l dを出す。

「チ、チユキ殿……」

W i l dは明らかに動揺している。

「今の私ならあなたの声が聞ける。ねえ、W i l d…あなたの本当のことを教えて？」

W i l dは迷っていた。

チユキ殿に付いて行こうと決めた気持ちに嘘はない。

しかし、幼いときにキリカと別れたのは理由があった…

W i l dは静かに語りだした。

「私とキリカは…私の意志で生き別れた。私はキリカを守るために別れた」

「守る…為に？」

「うむ。私達が幼い頃まで話は遡る…あの頃は、キリカの事が好きだった。子供だけで行ってはいけない山に私達は入っていった…そこでDARKERの捕獲部隊に出遭ってしまった…」

「……………！」

チユキは驚きを隠せなかった。

「私はキリカを洞窟に隠して、DARKERに捕らえられた。私はキリカが無事ならそれでいいと思っていた…なのにあいつらはポケモンを単なる実験素材として扱った。」

捕らえられた者はポケモンとしての本能以外を排し、ただの殺戮マシンとして研究を続けた…地獄のような場所で、私にはキリカの光だけが救いだった。

そんな折、私が進化する直前にそれは起きた。TIIIDAの急襲だ」

TIIIDA…！

チユキは顔色を変えた。

「当時、ろくに食べ物を与えられていなかった私はその急襲に紛れて逃げようとした。しかし、そこには国際警察もなだれ込んだ…三つ巴の戦いに巻き込まれた実験体達は本能に従い、向かってきた国際警察やDARKERの半数以上を殺した。私は失敗している身であつたし、動くための力もなかった…その時私は死を覚悟した」

チユキは、声が出なかった。

「その時だった。木の実をくれた人がいたんだ…私はそれを食べて逃げようとした。しかし、思わぬ助けが入ったんだ。赤い髪の…少年だった。彼は私の事を見て、力を貸してくれ。そう言った。逃げるためにはこのものに手を貸すのが良いと察した私は追い掛けてくるポケモン達にメタルクローを飛ばし、地震を繰り返した…今思えばあの赤い髪の少年はナツマサだったのだろう。」

「研究の始まったばかりの耳が半分切れてしまっているニューラに彼を守るように言って私は逃げた…しかし、TIIIDAは進化し終えた私を捕まえた。TIIIDAはDARKER以上に私達を研究した。TIIIDAが求めていたものは最強の強さを宿したミュウツー以上の強さを持つポケモン達の製造だった」

ポケモンの…製造………！

チユキの顔にははつきりと嫌悪が見て取れた。

「しかし、私の力は完全に回復していなかった事もあり、研究段階で弾かれた。他のポケモン達が苦しそうな声を上げてても…私には何も出来なかった。その施設に来て一週間が過ぎた頃…DARKERの研究成果が顕れはじめた。本能の声に従い、私は弱っていく振りをした。食事を与えられても食べない…次第に私の体はやせ細って行った。

「それを見た人は私を人里離れた山へと置き去っていった。それ以降私は川に降りトサキントやアズマオウを喰らい、木の実を喰らい…懸命に生きるために必死に食べた。もう人間とは会いたくない。会ってしまったら…自分が何をするか判らなかったから。

「キリカとは、会いたくない。チユキ殿の銀色に輝く魂がないと、私は私でいられない。本能のままに、人を殺めてしまつかもしれない…、それが、怖い」

「W i l d…本当にそれで良いの？本当は一目だけでも会いたくないじゃないの？」

W i l dは言葉に詰まった。凶星だった…

魂を見通す力…それ則ちポケモンの力…が覚醒の兆しを見せている証拠だ。

「W i l dはここまでよく頑張ってくれたじゃない…辛いことも、

苦しいことも乗り越えられたのはキリカさんがいたから出来たこと。私はこれからもっと大変な目に遭うかもしれない。そしたら今度はW i l dが死んでしまつかもしれない…キリカさんが悲しむわ」

チユキとして、今の主人としてはかなり辛い選択だ。しかし、これ以上自分のせいで人が悲しむ姿を見たくはなかった。

「だってW i l dはもう、苦しまなくて良いんだよ…ね？もう充分苦しかったでしょ？キリカさんのもとに帰っても、もう大丈夫だから……」

チユキは涙を堪えた。

あの時、助けた気持ちに嘘はない。だからW i l dには幸せになつて欲しいから…つきはなす。

チユキはP - p h o n eのポケモンコマンドから、逃がすを選択してW i l dにタッチする。

モンスターボールはニュートラルに戻り、W i l dの体から青い輪が消えた……

チユキは、顔を伏せたまま裏口からそのまま走り去った。

「チユキ殿!!」

リングマは消えていく背中を追えなかった。

「さつきから煩いわねえ……え？」

ガンテツキリカは裏庭が煩いのが気にかかって裏戸を開けた。

「クマ?……クマなの？」

キリカは信じられなかった。

この十二年、探し続けてきたキリカはもしかしたら死んでしまっているのかとも思ってもいた。

しかし、目の前にいるリングマは……間違いなくクマだと確信できた。

キリカはクマに抱き着いた。

「良かった……!クマ、生きてて……良かった……!」

涙があふれて止まらない。

キリカはそれだけ嬉しかったのだ。

クマも、そっとキリカの肩を抱きしめた。

）
）
）

チユキは急いでポケセンに帰る。

「おいチユキ、おいってば！」

チユキに抱えられっぱなしのFineはさっきから黙ったままのチユキを心配していた。

頭に冷たいものが当たっているから、泣いているのはわかっていた。辛い気持ちも…痛いほどわかる。

チユキは急に走るのをやめた。

「これで…これで良かったんだよね…？」

「…マスター。間違っちゃいないよ…後はあいつの魂が決めることだからな」

Fineの静かで安心できる口調は優しくて穏やかだった。

チユキはベンチにしゃがみ込み、暫くそのまま固まっていた。

Chapter・28 過去・現在・未来（後書き）

今回は、ジム戦に向けての調整をします。

心に痛手を負ってしまったチユキですが、ナツマサの金色に輝く心が鍵になります。

ナツマサ、男を見せろ！

「2010/6/8」

Chapter・29 心と魂（前書き）

雅之「…チユキ、無理してる気がする」

Fine「お前のせいだろ」

雅之「…俺？」

Link「僕、やっと出られるんだ！やったあ！」

雅之「…殺人的可愛さっ！」

Fine「純真って時に残酷な…」

雅之「言えてるかもf^_^」

-

Chapter・29 心と魂

チユキは四匹のフリーバトルを脇で見ていた。

Wildが居なくなり、急に淋しくなった自分のチームを見てまた泣きそうになる。

トゲピーのFineは四匹の中でリーダーのような役割になっていた。

「おい、マグマラシ Beatにヌマクロー Bore！気合い入れてフリバトルよ！」

しかし、そうは言われても心配だ。

特に地味に最初から居るBeatはあんなチユキを見たことがなかった。不安になってしまうのは当然だろう。

Boreはリングマに依存しているチユキを見てきていただけに、こうなるかもしれないと考えた時の予想を上回る反応だっただけに気にかけないわけには行かない。

コリンクのLinkは入ったばかりの事もあり、Fineの指導を受けながら攻撃の仕方を教わっていた。

「筋は悪くねえな。後はノーコンを何とかすれば充分強いんじゃない？」

「本当ですか?! Fineさんありがとう!」

Linkの花のような笑顔に一同同性の筈なのに胸を撃たれた。

それは周りのポケモンをも魅了した。

(か、可愛いじゃねえか!俺以上になるな、コイツ…)

そう、ゲットした際は気付かなかったが、このコリンクは通常備わっていない特性“メロメロスマイル”を備えていた。

「通常メロメロという技は同性や性別のないポケモンには聞かない。メロメロボディもしい。しかしメロメロスマイルは鈍感が無効にし、更に笑顔を見たポケモン全てにメロメロが効くのである。はっきり言って無敵の特性だ。しかし、早起き・不眠・やる気の特性の前では無効である」

「い、いかにいかに…」

Fineは頭を振ってメロメロを振り切る。

通常のメロメロは交代や道具使用でのみ回復するが、メロメロスマイルに関しては数ターンで回復する。

「Link、普段は笑うな」

「ほえ？」

「ピンチになった時に笑え。そうすれば勝利の女神がおまえに微笑んでくれる」

「わかりました。へんなの…僕ってそんなに可愛いのかな？」

（無自覚かい）

Fineは顔を引き攣らせた。

大物の素質充分だな…と一人ため息をつく。

途端、Fineの体が何かに同調したように震えた。

Fineは一度フリーバトルを止める。

「一度休憩！」

その声に、BeatとBoreはメロメロから覚めた。

Fineは小さい体を懸命に動かして、ナツマサの爆睡している部屋に急ぐ。

「おいナツマサ！起きろ！！お・き・ろー！！」

結構な音量で言っているのにナツマサは微動だにしない。

しかし、トトが起きた。

「ふああ…どうしましたの？Fine」

「ナツマサ！チユキが」

と言うとすぐに起きた。

「ユキねえ…？」

「すぐ来てくれ！このままだとチユキがダメになる！」

「何？！」

布団をガバツと跳ね上げ、上着を着て急いでトレーニングルームに向かう。

「何があつた？」

「…Wildを本来の主人に返した。心が折れかかっている。…金色の輝きを持った心が必要だ」

「金色の輝き……？」

ナツマサには何を言っているのか理解出来なかった。

「私とナツマサ様の力が必要ってことね？」

「流石トト。嫌なものを引き寄せるような気がするんだ…」

トレーニングルームに入ると、ダークライとギラティナがチュキの周りにいる。

「チュキを守るため…来てくれたのか」

ギラティナは引き寄せられた怨念の魂を、ダークライは引き寄せる原因となる念力の魂を相手にしていた。

しかし、どうもそれらはチュキの体を狙っているようだ。

「ちい、闇を引き寄せ始めてる！トト」

「はいです！」

Fineとトトはチュキに駆け寄ると、二人の体が輝きだした。

「「神速っ！」」

チュキに向かう二体の神速は暗闇の中で眩しい輝きを放っていた。

パァン！と光が弾け、トレーニングルームに光が戻る。

「ユキねえ!!」

ナツマサは急いでチユキの元に駆け寄る。

「…なつくん……………」

ナツマサはチユキを強く抱きしめた。

「俺は、絶対ユキねえを守る!何でも溜め込んだんじゃうのはユキねえの悪いところだよ?」

チユキはナツマサに縋り付いた。

「本当は離れたくなかった!でも、Wildはこれまで辛いことがあったから…もう巻き込んだんじゃいけないって思ったの!」

「マスター……………」

「チユキ様……………」

「辛いけど、私はWildの思いを知るのが一番良いって…そう思

って考える時間を作った……でも、こんな気持ちのままじゃジム対策出来なくて……」

チユキの目から涙がとめどなく溢れる。

「…無理したら、余計体に悪いよ？もう今日は休もう。皆、部屋に戻ろう！ダークライとギラティナもチユキを守ってくれてありがとう」

「礼は要らぬ」

ダークライは素っ気なく地面に消えていった。

「時と空間を、心と魂を守るのは私の役目ですから…ではナツマサ様またお会い致しましょう」

ギラティナは鏡に空間を切り裂いて、反転世界に帰っていった。

他の人達やポケモン達はダークライのダークホールで眠らされていた。

ナツマサ達がその場を後にすると、他の皆はそれぞれ目を覚ました。

-

Chapter・29 心と魂（後書き）

雅之「次回、コウメはんがでるよ。少しだけ（笑）」

そしてさらに戦いは激化！

DARKERがついにリングマにたどり着く…

そして、誰かが…（ヲイ?!はつきり言えって!!!）

次回“銀の魂”乞うご期待

「2010/6/10」（6/11改）

Chapter・30 銀の魂（前書き）

ナツマサ「…なんか（話が）飛んでねえか？」

雅之「あれはあれでとりあえず解決で。」

ナツマサ「何の解決も出来てないが??」

雅之「解決編書かせる気か!?!明らかに書けないってーの!?!」

ナツマサ「…なんでキレた??」

雅之「解決編はなあ、かなりヤバい表現を使う事になるから割愛だ
!もうそれで解れ!」

ナツマサ「…げ…?」（ナツマサ、顔が信号より赤くなる）

涼華「私が激しいの書きちゃってもいいのなら書くけれど…?」（闇
」

ナツマサ「すいませんでしたあー!!!o...rz」

-

Chapter・30 銀の魂

「あれま…こっちはヤドンの井戸…道に迷ってしもたわー、こんな街中で」

コウメは困った風でもなく、なぜか茶飯事であると言った様子でため息をついた。

「うちには方向感覚があらへんねやるか…」

そついいながら舞妓はん仕様のポケギア、M・G I Aを袱紗から取り出す。

M・G I Aの指示に従い、今歩いた道に戻る。

すると、上空を黒い大きな船が横切っていった。

「あれは、D A R K E Rの船！ガンテツはんの家に向かってはる！」

コウメはさつと顔色を変え、エーフィを袂に入れていたボールから繰り出し、着物の裾を托し上げて走る。

）
）
）

同じ頃、ガンテツの家。

キリカはクマに会えたことが何より嬉しかったらしく、上機嫌でボールを作っているが、クマは冴えない顔をしていた。

ふと、窓から空を見上げるとクマは凍りついた…黒い船がこっちに向かっている！

）
）
）

「リングマの実験は成功しましたね」

「必ず捕らえなさい。捕獲が困難なら殺処分します」

女性の低い声が聞こえる。

「承知しました、ミカエル様」

「…勿体ないけれど、組織の事を漏らすわけには行かないからね」

ミカエルは不敵な笑みを浮かべていた。

〃
〃
〃

そして、もう一人その黒い船に気がついたのはこの町のジムリーダーだった。

「あら、何かしら？あんな黒い船初めて見たわ。ね、サマリー」

「サムサム。」

ハッサムのサマリーはミノサクラの一番の相棒だ。

その大きな船に興味を持ったサクラは、もっと近くで見たいとサマリーを伴って走り去った。

〃
〃
〃

一方、チユキを休ませたナツマサも、ヘリのような低いローター音が響いたので空を見上げると、すぐ上空を黒い大きな船がゆっくり来ている様子だった。

「な、何だあれ!？」

「DARKERの…船……、うつ!？」

チユキは体が動かせなかった。

「…!？た、立てない!」

ナツマサもその場にうずくまる。

「重力……?！」

他のポケモン達も重力が軀に重くのしかかり身動きが取れない。

「皆、ボールに戻って!」

「トトも避難してくれ!」

ポケモンはそれぞれ自分のボールに戻る。

そしてナツマサは気づいた。

「このローター音、聞き覚えがある！DARKERの重力だ！！」

「あっちに向かってるわ！あっちにはWildが…」

「DARKERが狙ってるんだ！急ぐぞ！」

チユキとナツマサはとうにか重力を振り切り、ポケセンから飛び出すと…

コウメ「ひゃあっ！」

チユキ「きゃっ！？」

ナツマサ「うわあ！」

舞妓はんとしたたかにぶつかり、三人とも地面に尻餅をついた。

コウメ「あいたあ…」

チユキ「いったーい！」

ナツマサ「ういちち…」

コウメ「えろうすんまへんなあ！上に気を取られてしもつて…」

チユキ「こちらこそごめんなさい！大丈夫ですか？」

チユキは舞妓はんに手を貸した。

コウメ「あれま、あんさんはチユキはん！私はコウメ、こっちは相棒のフィーでございます」

フィー「早く行きましょう」

フィーは皆を急かす。

ナツマサ「オツケー。ユキねえ、舞妓さん急ぎましょう！」

チユキ「うん！」

コウメ「ほな！」

三人はガンテツの家に急いだ。

その後ろを追うように、サクラも急ぐ。

サクラ「あれっ、こっちってガンテツさんのお家がある……」

サマリー「サムサマー？」

黒い船はガントツの家の真上で停止した。

〽
〽
〽

「行くのです、サウムラー、エビワラー、カポエラー」

黒い船から三体の格闘ポケモンが降り立つ。

〽
〽
〽

ピルリルリル」

「どーした、チユキちゃん？」

『ガントツさんの家にDARKERが！』

「一分で行く。余計なことはするなよ……とは言っても無駄か。」

『無茶はしません。お願いします！』

「思う存分暴れまくれ！」

『はいっ！』

クールアイは身体を起こすと黒い船に向かってユキを飛ばす。

）
）
）

「むう？！バリリン、ムクリン！」

ガンテツイツサイも物音に気付き、レベルボールのバリエードとス
ピードボールのムクホークを繰り出した。

「あ、どこ行くの？！クマ！」

クマは家から飛び出した。

「カポーウ！」

「サワーツ！」

「エビーツ！」

クマはあっという間に三体の格闘ポケモンに囲まれた。

「グマオオ！」

「バリリン、サイコキネシス強力念力！ムクリン、燕返し！」

バリアードのサイコキネシスで三体の体が浮き、ムクホークの燕返し
が三体とも急所に入る。

）
）
）

「助っ人……ですか。戻りなさい。カイリキー、ハリテヤマ、チャー
レム。行きなさい」

黒船から赤い光線が三本伸び、サウムラー・エビワラー・カポエラ
ーが戻り、また三体の格闘ポケモンが飛び降りる。

すると、クマはチャーレムに痛烈なシャドークローを撃ち込む。

「バリリン、サイコカッター！ムクリン、ゴットバード！」

ハリテヤマに念力の刃が、カイリキーにゴットバードが当たる。

黒い船の中にいるミカエルは歯噛みした。

「ちょこざいな！だが、こいつは最強だ。いでよ、ダーク・カイリキー！」

黒い船から、今度は真つ黒いボールが一つ落ちて来る。

「カイイイイ！」

いななきが既に普通ではなかった。

「ダークホールド！」

黒い影が三体の足元に絡み付く。

「グマ?!」

「バリ?!」

「ムクホ！」

「んふふ。では、ダークボール！」

黒い船から黒いボールが落ちて来る…が

チユキ「Beat、火の粉！Bore、氷の粒！」

二つの技がそのボールを破壊した。

マグマラシとヌマクローの放ったわざだった。

ナツマサ「Fineとトトはリングマを頼む！ララ、ニノ、ククは俺について来い！」

銀髪の少年の後に付いてくるのはニユーラにアリゲイツ、ラクライだ。

チユキ「Beat、Bore、Link行くよっ！」

水色の髪を持つ少女の後には先ほど技を放ったポケモンと、コリンクが。

コウメ「華麗に舞うのです、フィー！」

着物をたくし上げた舞子さんの前にはエーフィが。

サクラ「え…えっとー…（よく判ないけど）サマリーも行つて！」

活発な女の子の前に現れたのはハッサムが。

「……！有象無象とは言え、八体も増えると厄介ですね……」

仕方ありません、というようにミカエルは武器の用意をさせた。

）
）
）

《銀の魂を持つ者よ。力を解放するときです》

チユキの頭に声が響いた。

（誰？）

《私の魂はそなたの魂である…目覚めよ、銀の魂！》

）
）
）

サマリーが黒い船から何か出ているのに気づいた。

「サム…？」

「これ以上研究の成果を漏らすわけにはいかない。死になさい」

キュン！

（Fine、トト！守って神通力！）

銀の魂の内なる指示が早かっただけに二匹はすぐに対応した。緑の幕の外側にさらに神通力の幕を張ると、武器は相手側に見事に返った。

「ミカエル様…！」

「何者だ、あの者は…！？ポケモンでテレポート脱出だ…！」

一瞬の事だったが、黒い船に乗っていた船員すべてが本部にテレポートで帰還して…その直後、黒い船の武器庫に跳ね返った物は命中し、船は空中で派手に爆発した。

「守る範囲を広くして！」

Fineとトトは全員を包むほどの緑の幕を張り終えた後の事だった。

）
）
）

K A - B O O O N !

「おわっ！！！！」

クールアイとボーマンダは爆風をもろに受けてしまったが、何とかボーマンダは体勢を立て直した。

「ボマアッ……！」

「あつぶねー……DARKERは逃げたか……ありがとな、ユキ」

しかし、まさか爆発させるとは思ってもよらなかったのですぐにガンテツの庭に下りる。

「チユキちゃん！」

「あ…ハハハハ、クールアイ…さん……………だあってえ、向こうが使ってきたのを防いだらたまたま相手に返っただけで…」

クールアイの眼光はチユキにはまるで威嚇のような鋭さがあった。しかし、クールアイは睨んでいたわけではなかった。

「…なるほど、銀の魂が覚醒しはじめたかあ！しかし思いのほか早かったなあ。見た感じ明日かと思っていたんだが…」

「銀の魂！私、聞いたことがあります」と声を出したのはまさかのキリ力だった。

「あんたは…ガンテツキリ力か。なかなかばんぐりのデコっぷりは凄いらしいな？」

今度はキリ力が顔を赤くした。

「たはは…まあ、同世代から下には大好評でして！…じゃなくて銀の魂って言うのは、渦巻き島のルギアの御眼鏡にかなった人ってことなんですけど…少し違うんですね？」

「そう言われていたか。実際は人間とポケモンの間に生まれた子供から選ばれるんだけどもな……あ？」

もう一つの命の輝きを発見したクールアイはナツマサをじっと見据えた。

「あ…あの…何か？」

ナツマサは暫くしてやっと声を出した。クールアイの目からはなぜか逃れられないような…そんな気がしたのだ。

「いや…悪かったな。…そういやあ、自己紹介がまだだったな。国際警察のクールアイだ。チユキちゃんとは今朝お世話になってな、顔見知りだ」

「そうなの！？…っていうか、え？人間とポケモンの間に…？？？」

キリカはチユキとナツマサを交互に見て、驚きを隠せなかった。

チユキとナツマサは急に無口になった。コウメは思わぬ展開に目を見開く。

そんな中行きがかり上参加する羽目になったサクラははつきり言っ

て居辛かったのは言うまでもないだろう…

-

Chapter・30 銀の魂（後書き）

雅之「設定にかなり無理があると言っか…」

チユキ「無茶苦茶になってない？」

雅之「一応改行オンパレードで話をデュエル方式にしてるんだけど」

ナツマサ「…なるほど、別けて見ると意外と解りやすいかもな」

雅之「結果、サクラがあぶれちゃったわけだけど（笑）」

サクラ「ひどいです、雅之さん！サマリー、アイアンヘッド鋼鉄頭突き！！」

雅之「ぐはっ！……トラックで轢かれたような衝撃……マジ……死ぬから……！」

チユキ「作者はタフよ。涼華さんからいつもエルボードroppとかラリアット喰らって喜んでるんだから」

雅之「…それ一番の精神的ダメージ！……！！（+―+）」

[2
0
1
0
/
6
/
1
2
]

Chapter・31 錯綜する思い（前書き）

〈前回までの粗筋〉

見事DARKERを退けた五人とそのポケモン達。銀の魂の真相をしるクールアイとキリカ、結局何をしたのかわからないコウメとサクラ。

チユキとナツマサに待ち受ける新たなこととは…？

-

Chapter・31 錯綜する思い

ハッサムのサマリーをまじまじと見つめるFineとトトのトゲピ
ー達。

「かーっけーなぁー！」

「赤い身体はまるで鎧みたいです」

「そ、そんなことは…進化してまだ十日ですし……それにあなた
ちの方が凄いですよ！守ると神通力で人間の利器に勝ってしまうな
んて…」

「マスターの言葉は魂に響くからな、すぐに対応できたのはマスタ
ーのお陰さ」

一方で、チュキとキリカの間で揺れているリングマのクマの結論が
出そうだった。

「どうしたの、クマ？」

チユキは黙ったままだ…

クマはキリカを抱きしめて、優しく唸る。

「済まない、キリカ。私はもっと強くなって必ず帰る…それまで待っていてくれ」

「え…？…何？」

キリカにクマは優しくキスをした。

クマは穏やかな顔をしていた。

「彼は、あなたを守るためにもっと強くなって必ず帰る…そう言うてるわ」

通訳したチユキもまた、穏やかな顔をしていた。

「あなたのクマは、私が責任をもって預かるわ。そしてまたこの街に来るときには必ずお返しします！」

「銀の魂であるあなたがいうんなら間違いないわね。これ、クマの

フrendボールよ…よろしく願いします」

キリカはチユキにお辞儀した。

）
）
）

「ユキねえ、相変わらず凄いなあ…」

「ホンマですなあ。流石銀の魂の操り人やわー」

「へ？」

ナツマサは思わずコウメの方を見る。

「おほほ、なんでもあらしまへん！お疲れ様、フィー」

言い過ぎたな、主人…といった表情のままボールに吸い込まれるエーフィであつた…

「そつえば、ミノサクラはんはヒワダジムリーダーどしたな？」

話の矛先を何と十歳の少女とハッサムに向けるコウメ。

チユキとナツマサはギョツとしてサクラとハッサムのサマリーを見つめた。

「手持ち全部晒しちゃったよ…！」

チユキは真っ青になって急いでポケモンを戻す。

ナツマサもとりあえず同じタイミングで戻した。

どのポケモンがチユキのものか、名前の時点で既にわかってしまっ
てはいるが、手持ちを下手に明かしたくないと言っていたチユキの
気持ちは今わかった気がした。

）
）
）

「あ、あんた迷子のコウメだな？俺がエンジュまで送るけど？コウ
メ・デ・エンジュグローブさんよ」

一同、その名前にざわめいた。

「おっと、正確にはカネナリコウメだったな？伝統の舞を伝える家系の舞妓さんだ」

コウメはアイタタタ、と言った表情になる。

「よお知ってはりますな。ほな、頼んます」

コウメはボーマンダの背に乗り、その後ろにクールアイが飛び乗る。

「じゃあ、チユキちゃん。また会うことがあったらよろしくな！」

クールアイはそういつて空に消えた。

「はい！」

チユキはクールアイに大きく手を振った。

ナツマサは面白くない、と言ったふうになんと怒っていた。

チユキはそれに気づいて、ナツマサの肩に手を置いた。

「クールアイさんね、私のお父さんを知ってるから。流れで仲良くなっただけよ」

「ふーん…」

ジト目でチユキを見るナツマサ。

「ちなみに、私が好きな人は一人しかいないんだけどね？」

チユキはナツマサの頬に軽く口づけした。

「下手に勘ぐらないでよね。ナツマサ」

ナツマサは思い切り顔を赤くした。

「んなっ……！」

サクラは胸がもやもやとした。

「明後日、ジム挑戦するのはどっち？」

出し抜けに言われたのは流石にびっくりした。

「私が挑戦するけど……？」

「そう。絶対負けないから、私…戻ろう、サマリー」

「…？は、はい。主人！」

サクラは踵を返してジムへ戻る。

「あんなふうの色ぼけてる人に負けたくない……」

キリカにはその声が聞こえていた。

「サクラちゃん、かなり強いわよ。特に、最近進化したサマリーは元より、コクーンはスパークに、トランスセルはバタフリーに進化したからね。技術的なことはジムリーダーの中では随一よ…でもまだまだお子様だね。変なことですぐアツくなるのよ。注意するに越したことはないわ。じゃ、クマ！あなたに新しい名前を付けてあげるわ！クマじゃ恰好つかないしね」

キリカはクマに向き直った。

「俺の…名前を？」

「うーん、B e a rじゃ迫力ないし…そうだ！W i l dなんてどう？
？かつこいいし、強そうじゃない？」

クマ…W i l dは、チユキに抱き着くのを堪えた。彼女にチユキと初めて会ったように装う、という魂の指示に従ったのだ。

「いい名前ね。これからよろしくね…W i l d！」

チユキは手を差し出して改めて、リングマを仲間に迎え入れた。

「ああ、これからよろしく！」

二人の間には昔の古さが残るフレンドボールがあった。

そんな二人を見てナツマサは清々しい表情を浮かべていた。

（よかった、ユキねえ）

-

Chapter・31 錯綜する思い（後書き）

雅之「戻りました。なんか奇跡的に！」

一同拍手！

ナツマサ「一時はどうなるかと思ったけどな！」

チユキ「これから一緒に強くなろうね、Wild！」

Wild「ああ、…ああ！」

雅之「見事に乗り越えましたが、一つ問題が発生……」

ナツマサ「俺らより年下だよな？」

チユキ「うん、でも油断は出来ないよ！」

雅之「そうそう、その意気だ！」

次回、対決！の序章（笑）

“V・S・タクマ―（??）”

お楽しみに！！

「2010/6/12」

Chapter・32 V・S・タクマ(?!)(前書き)

雅之「さて、サクラに勝つためポケモン達は特訓です」

サクラ「あれ？タクマって確か…」

雅之「ネタバレしたらおもしろくなる！辞めい！」

サクラ「こ、怖い…」

タクマ「サクラに何すんだよ！」

雅之「おまえら、もしかしてラブラブ？」

タクマ「スタア、コメントパンチ！」

サクラ「サマリー、シザークロス！」

雅之「俺作者……！」

キラーン

-

Chapter・32 V・S・タクマ(??)

「奇襲を狙うならやっぱりリングマのWildが鍵になるわね」

チユキはトレーニングルームでナツマサのポケモンを含む全員を見て唸っている。

「他に、ジムリーダーと闘いたい人はいる？」

チユキは立候補制にした。

「はいっ！」

「僕もっ！」

二匹の電気タイプが頭を上げる。

コリンクのLinkとラクライのククだ。

チームに入ってまだ浅いメンツばかりだ。

「悪くないと思うわ！Linkは特性が相手にかなり有利だし、炎の牙もある。ククは素早い動きで相手を攪乱するし…」

「あ、あのう…僕、ハッサムさんと闘いたいです」

と手を挙げたのはここまで影の存在とも言われていたマグマラシのBeatだった。

(→ひどい言われようだな・・・(・・:))

皆一斉にBeatを見る。

「…おっけー。どう戦うかはあなた次第よ」

チユキは快諾した。

「はいっ！」

Beatは大きく頷いた。

「じゃあ、Linkとククは今からバトルをして。総合的に見てどっちにするか決めるわ…Link笑っちゃダメよ」

「はい?!」

「他の皆はフリーバトルをして互いを高め合ってね!お昼にまたここに集合」

チユキがパンツと両手を叩くと、各々は戦う相手を決めてフリーバトルを始める。

「時間は5分。判定は総合的な強さを見て判断。それでは、バトルスタート!」

二人の間で電気が弾けた。それが合図のように二人は飛び出した。

しかし、Linkは違和感を感じて距離をとる。

ククは隙について電光石火の技を決める。

「わっ!」

「気付いた?ボクの特徴、静電気なんだよ!」

ククは次いで高速移動する。

「くっ！…そうだった！」

Linkは素早く技を出した。

「近づけないのなら逆に利用する！」

「遅いよっ！ストーンエッジ尖った石」

しかし、ストーンエッジは放電で防がれた。

「これで、終わりだよっ！」

「な、なにっ！？」

Linkはククの動きを見切り、十万ボルトを正確にククに狙った。

「わぁーっ！」

「それまで！総合力、先読み力ともに優れていたのはLinkね。クク、大丈夫よ。あなたの攻撃力はなかなかよかったわ」

それじゃ、皆とフリーバトルしてきなさい。と指示した後で、チユキはWildをフレンドボールからだす。

「Wildは強そうなトレーナーと1on1バトルよ」

「わあ、強そうなりングマっ！ねえ、君。そのリングマと僕のケンタロスと勝負しない？」

練習場に顔を出したのは、自分と同年くらいの少年だ。

「良いわよ。私はチユキ、あなたは？」

「僕はタクマ、コガネのタクマ！行くよ、ギュータ！」

「久々のバトルだ！燃えるぜー！」

ギュータは蹄で地面を引っ掻き、意欲を見せる。興奮しているのか、若干鼻息も荒い。

「クールに決めるよ、Wild!」

「押忍っ!」

「俺、審判するよ。俺はチユキの相棒のナツマサ。バトル1on1開始!」

先程からいたのに最近はめっばう影薄キャラが定着づいてきてしまったナツマサがやっと出てきた。

「先手必勝だ!ギュータ、角で突け!」

「Wild、シャドークローで地面を引っ掻きながら距離を詰めて!」

「馬鹿な奴だ。ゴースト技はノーマルには効かない!」

タクマは呆れてしまう。

「あら、失礼ね。クロスオーバーから騙し討ち!」

Wildは早足を急にギュータの前で走りながらブレーキをかけながら、シャドークローで目を眩ませ、角で突くを鮮やかに避け、騙し討ちを背に当てる。

「ちつ、シャドークローは囷か…！イける、ギュータ、起死回生！」
チユキはすぐに気付いた。

あのケンタロス、怒りの坪の特性だ！

「迎え撃って！退歩からカウンター！」

二匹がぶつかり合う。

砂煙が晴れると、二匹は睨み合っていた。

「なかなか、骨のある奴だ…な」

「あんだこそ。退歩で防ぎきれなかったのは初めてだ」

ギュータは足からくずおれた。

「ケンタロス戦闘不能！よって勝者、チユキのリングマ！」

Wildも激戦の疲労で膝を付いた。

「大丈夫?!」

「起死回生の技を受け切れず、少し喰らっただけだ…心配するな」

Wildの身体はかなりのダメージを受けていた。

怒りの坪の特性が発動し、攻撃が最大まで上がったのだ。

「ふー、危なかったあ…タクマさんありがとう。あなたのギュータ、強かったわ」

「いやあ、負けるとは思わなかったよ！こっちこそ。自分の未熟さがわかったよ。また会ったらバトルしようぜ？」

「ええ！」

チユキとタクマは握手した。

ジムバトルまで、後一日…

-

Chapter・32 V・S・タクマ(?!)(後書き)

タクマ「うゝっ、負けたあ…」

雅之「あ、やっぱり悔しいんだ」

タクマ「チユキさんかあ、強くてかつこいいよね」

サクラ「ちよっ、タクマ?!」

タクマ「わーっ!ご、ごめんっ!」

雅之「夫婦漫才か」

ナツマサ「って言うかユキねえこそ、愛想振り撒くなよ!」

チユキ「へ?そんなつもりないけど」

雅之「チユキは博愛主義だからね」

ナツマサ「無意識にやるなっ!」

[2
0
1
0
/
6
/
1
5
]

Chapter・33 V・S・サクラ（初陣）（前書き）

雅之「九月二十七日、十時。中継にヒワダジムの前にいる雅之です。これからジム内で壮絶なバトルが始まるうとしています！」

残念ながら、関係者以外は入れません。我々は外から実況することになりました。

雅之「本文からトレーナー達は見て行ってください！」

本文からバトルスタートです！

-

Chapter・33 V・S・サクラ（初陣）

「それではこれより、挑戦者チユキに寄るジムリーダーバトルを始める！ポケモンは3on3、ルールはシングル。挑戦者のみ交代が認められます」

ジムレベルのアトバイザーが審判だ。

「ポケモンバトル、レディーゴー！」

「行きなさい、フェイリー！」

出て来たのは、バタフリーだ。

「Link、バトルスタンバイ！」

「はいです！」

コリンクが意気揚々と飛び出す。

「粉パーティーよ！」

「承知しました、マスター！」

フェイリーは、羽を大きく動かして隣粉を撒き散らす。

「防いで！」

「はいっ！」

粉を放電で無効にする。

「念力！」

「電光石火！」

念力から逃げるように電光石火でフェイリーに近づく。

「風起こして近づかせないで！」

「狙いすまして十万ボルト！」

風起こしと十万ボルトが激突しあう。

風に電気が拡散されて、信じられないことが起きた…

威力はますます激しさを増して、竜巻となった。技が融合した竜巻はLinkとフェイリーを飲み込む。

「うわああああ…」

「きやああああ…」

「Link!」

「フェイリー!」

（Link、聞こえる!? フェイリーを救助してから守ってフルパワーで放電! それで竜巻を消せるかもしれない!）

（やってみます!）

「バトル中止よ! 私達まで巻き込まれるわ!」

「大丈夫です! Link!!」

Linkはフェイリーを口でくわえ、緑の幕で自分達を守り、守るの外側に放電を放つ。

竜巻はその電撃を受けて、消し飛んだ。

「あ、あなた…私を助けたの？」

「あの場合は緊急避難だよ。怪我はない？よかった」

Linkは優しく笑う。

フェイリーはその笑顔に心を打ち抜かれた。

「でもバトルは別だよっ！」

Linkは素早く距離をとる。

「Link、もう一度十万ボルト！」

Linkはメロメロ状態のフェアリーに電撃を浴びせた。

「バタフリー戦闘不能！コリンクの勝利！」

「頑張ったわね…戻ってフェアリー」

ボールに戻る。

「Link、良くやったわ！お疲れ様っ」

こっちもボールに戻る。

「行くのよ、ドリス！」

「Wild、バトルスタンバイっ！」

互いの二匹目のポケモンがバトル場に踊り出た。

-

Chapter・33 V・S・サクラ（初陣）（後書き）

雅之「たった今情報が入り、第一試合をチユキさんのポケモン、コリンクが制しました！」

竜巻が発生したメカニズムは良くわからないとの事です。

雅之「ポケモンバトル、何が起こるかわかりません！第二試合はスピアー対リングマです！」

スピアーの毒に気をつけたい所ですね。

雅之「次回、第二試合開幕です！」

楽しみですね！

「2010/6/15」

Chapter・34 V・S・サクラ(武陣)

「行くのよ、ドリス！」

「Wild、バトルスタンバイっ！」

ドリスとはスピアーの事だ。

「スピアー対リングマ、バトルスタート！」

Wildは特性の関係から長くは戦えない。しかし、チユキは自分の判断を間違った事に今気づいた。

(し、しまった！)

しかし、ポケモン達にそれを悟らせるわけには行かなかった。

「火炎玉の力を最大限に発揮させるよっ！！」

「その前で毒でやられちゃうかもよ？毒々っ！！」

…サクラは道具の事をよく解っていなかった様だ。

「残念。とつくに火傷してるから無意味なのよ。炎のメガトンパンチ！」

「！銀色の風で炎を打ち消してから高速移動！」

双方の技で相殺され、更に避けられたのは痛かった。一瞬の気の迷いが技の指示を遅らせてしまった。

(…っ！)

チユキ、サクラ共に戦いづらい試合展開だ。

(早く…早く決めないと…っ！)

「明鏡止水！」

火傷が、Wildを蝕んでいるのが解る。しかし、その蝕みが不意に消えた。

チユキは思わぬ事に胸を躍らせ、より集中出来るようになった。

（…動きは早くても…、羽音なら聞き取れる。特にW i l dなら…！）

「え…何！？バトルの最中になんで目を瞑ってるのよっ…！ふざけないでっ…！」

サクラはそんなW i l dとチユキに苛立ちを覚えた。

しかし、チユキは実はすり替えの技を指示していた。

火炎玉と…ラムの実を。

お陰で、W i l dはそのラムの実で火傷状態から逃れ、逆に相手に火傷を負わせていた。

明鏡止水でラムの実を使用し、鈍くなっていく羽音を捕らえる。

（炎のエネルギーと、影の爪スタンバイ！）

（御意！）

「移動しながらダブルニードル!!」

「炎のパンチでダブルニードルを打ち落として!!」

右手にスタンバイしていた炎のエネルギーが、目を瞑ったままのWindに弾かれる。

「そのまま気配のするほうに炎のパンチを!!」

鈍い羽音の聞こえるほうにWindは走りより、炎のパンチでかち上げる。

「えっ!?!どうしたの、ドリス?!」

「そ…それが何がなんだか…身体もなんだか熱い…?」

ドリスは自分の身体の変化に気づいていなかった。

火炎玉によって火傷をしているので、体力はもう殆どない。

「決めるよ!シャドークロー!」

「どおりやあ！」

左手に準備していた影の爪を、スピアーに振り下ろす。

「よ、避けて!!」

ドリスは火傷に気づいた。しかも羽が使い物にならなくなっている…
避けられなかった。

見事にシャドークローを決める。

「く…くお…っ！」

「スピアー戦闘不能！リングマの勝ち！」

チユキとWildは目を開けて、勝利を喜んだ。

「最初はちよつとだけ焦ったけど…よくやったわ、Wild！」

「ラムの実に助けられたよ。あのままじゃ自滅していたからな」

チユキとW i l dは抱き合う。

「ど、どうして…？こ、これは火炎玉！？」

サクラはやっとドリスの持ち物に気づいた。

「お疲れ様、W i l d。戻って休んでね」

W i l dは、嬉しそうに頷いてフレンドボールに戻る。

「…戻って、ドリス……」

今まで、ドリスを出して負けたことはなかった。

サクラは負けた事にショックを通り越してイライラしていた。

（何だろう…すごく、嫌な予感がする…）

観覧席で見っていたナツマサは胸騒ぎがした。

「頑張ろうね、Beat!ここを決めたらバツヂGETだよ!」

「はいっ!僕、精一杯頑張ります!」

チユキはまだ、サクラの様子がおかしいのに気づいていなかった。

「……」

サクラは黙ったまま、相棒のサマリーをボールから出した。

今から、最凶の試合が…始まる。

Chapter・34 V・S・サクラ（武陣）（後書き）

雅之「ただいま、第二試合が終わり、リングマが勝利したと言う報告がありました。なかなか厳しい試合運びだったらしいですが、すり替えが今回のポイントになったと言う事です」

通常、リングマはすり替えを覚えませんよね？

雅之「ヒメグマの時に無理やりDARKERに覚えさせられたんだと。改造されてるポケモンは普通とずいぶん違うからね、通常では覚えられない技を覚えていてもおかしくはないでしょう？」

そうですね。さて、次はちょっとサクラさんの様子が何かおかしいという情報が入りましたが、雅之さん。どういうことでしょうか？

雅之「キレたら怖い…と言う事です。乞うご期待…」

「2010/6/15」

Chapter・35 V・S・サクラ（参陣）（前書き）

雅之「かなり危険な話になってきました第三試合！」

流血表現や過激表現が使われています。

雅之「十五歳に満たない方、上記の表現が苦手な方は入場を控えてください！」

それでは…最凶の第三試合、スタートです！

Chapter・35 V・S・サクラ(参陣)

「ハッサム対マグマラシ、バトルスタート!」

しかし、双方ともすぐには動かなかった。

チユキもサクラの異変に気づいたのだ…

Beatも張り詰めた緊張を受け、構えるが

サマリーは指示を待っているようで、目を閉じて待っていた。

(さっきと……雰囲気が違う?)

「辻斬り!」

サマリーは言われるままに、Beatに辻斬りを放つ。

「避けて、Beat!」

チユキは思わず声が裏返った。

Beatは辻斬りを避けた……避けたことで、その技はチユキに向かっているのに気づいたが、ちよつと遅れてしまい

ブシャツ！

右足踝の上に辻斬りが当たる。

「ううっ！！」

チユキは、傷に手を当てて見せないようにするが、血が止まらない……

バトル場に血が滴る。

「チユキ！」

ナツマサは大声をあげる。

「チユキ様！？」

Beatも仰天した。

「今はバトル中よ！私は自分で避けるから、Beatはバトルに集中して！」

自分の怪我を庇いながら、叫ぶ。

「バレットパンチ
鋼高速拳！」

「防ぎながら攻撃！」

火の粉を吹き出して、動きを止めようとするが止まらない！

咄嗟に火炎放射に切り替えると、サマリーは吹っ飛んだ。

「シザークロス！」

サマリーは虫の知らせで虫技の威力が上がっている…いくら相性が悪くてもかなりのダメージになる！

「避けてえ、Beat!!」

チユキに余裕はなかった。声の限りに叫ぶ。

Beatは避けきった……しかしまでも、その技はチユキに真つすぐ向かっていて…

……避けられなかった……

今度は胸にクロスの技が食い込んだ。

ブシャツ!

血飛沫が、バトル場を紅くした…

「がっ!」

「チユキー!」

ナツマサは顔を真っ青にした。

チユキは仰向けに倒れる。

これには流石の審判も仰天した。

「チユキさん！」

しかし、チユキは胸の傷を庇いながらもなお立ち上がる。

チユキは出来る限りの声を上げる。

「来ないで！まだ…ジムバトルの…途中…なの！Beat、…決めて！」

Beatももう我慢出来なかった。

体を縮ませ、辺りにマグマのように背中から火を爆発させた。

噴火だ。

そのあまりの威力に、サマリーは耐え切れず目を廻した。

「ハッサム、戦闘不能！勝者、ワカバのチユキ……チユキさん！」
審判、ナツマサ、Beatは急いでチユキに駆け寄る。

Chapter・35 V・S・サクラ（参陣）（後書き）

雅之「チユキJAPAN、勝ちましたが…これは危険です！」

しかし、一体何が危険だったのですか。雅之さん？

雅之「サクラさんはハッサムを出すとき、何も言わなかったですよね？この時、対戦ポケモンを殺す危険性があるんです」

！

雅之「チユキさんは自分のポケモンが殺されるのを見たくなかった…だから、余裕がなくなっただんです。ハッサムを倒さなければ、殺される…そう考えたのでしょ」

次回、サクラとの戦いの終幕。そして、チユキのポケモンとしての力が明かに！

「2010/6/16」

Chapter・36 V・S・サクラ（終幕）（前書き）

雅之「さあ、なぜか涼華姉貴のメールに阻まれなかなか投函が出来ず、若干いらつく雅之です（・|・）」

涼華「ごめんつてば（^| ^・）」

雅之「今回は涼華先輩監修の元、恋愛部を深く書くことに…はっつずい！（*くーく）」

涼華「頑張つてよ…」

雅之「さて、今回でサクラ編は終幕です」

涼華「では、本文からどうぞ！」

Chapter・36 V・S・サクラ（終幕）

チユキの周りに駆け寄る二人と一匹。

「チユキさん！すぐ救急車を…」

「…呼ばないで、下さい！」

チユキは胸の傷を押さえている。

いつの間にか、足元の傷からは血は出ていなかった。

「いや、しかし…」

アドバイザーはジムに備え付けの電話に手を伸ばしていた。

チユキとナツマサには、病院に行きたくない理由が存在した。

自分達は半分人間でありながらポケモンとしての力がある。

思えば風邪を引いたとき、チユキにはサトシが、ナツマサにはユカリが傍にいた。

即ち、自分の奥に眠っているポケモンとしての本能が開花されるまでは、リフレッシュや卵生み、癒しの鈴にアロマセラピーなどの回復技で治療してくれたのだ。

今なら…自分で治せるはずだ。

アドバイザーからバッチを受けとったチユキ達は急いで大樹の木陰に寄り掛かる。

「自己…再生！」

チユキの胸に宛がっている手の下から光りが漏れる。

「アロマセラピー！」

ナツマサも外側から傷の修復の手伝いをする。

暫く二人はそのままの体制を続ける。

次第にチユキの顔は穏やかになる。

「ふう…ひとまずは安心ね」

「念の為、これ飲んでおいて」

ナツマサはバックから“シロガネ原産・美味しい水”を取り出していた。

「ありがと…ナツマサ」

チユキは缶を受け取り、栓を開ける。

「ユキねえ…？」

「ナツマサ、……チユキって呼んで？」

「え？」

ナツマサは不意を突かれた言葉を言われた。

「私とあなた、同じ運命を背負った者同士……でも、それ以上の感情があるの。私はあなたを愛してる。あなたも私の事、好きでしょ？」

「ユキねえ…、じゃない…チユキ……」

チユキはナツマサを引き寄せ、キスをした。

ナツマサは少しビックリした。

「ナツマサ……」

「……チユキ」

二人は大樹の下で、もう一度キスをした。

チユキの左手にあるインセクトバッヂが、二人の絆を象徴するように木漏れ日を受けて煌めいていた。

-

Chapter・36 V・S・サクラ（終幕）（後書き）

雅之「……」

涼華「あ、だんまり決め込んだ」

雅之「だ、だって……キ、キス……」

涼華「うぶねえー」

雅之「オレ、生まれてこの方そーいうのねーからさ……」

涼華「うつそ、マジで!？」

雅之「ゴホン!えー、次回は幕間です。内容はお楽しみに……」

「2010/6/19」

ゝ幕間ゝ 乗り越えた過去（前書き）

大変お待たせいたしました！

とりあえず、サクラを救済いたしました。

-

く幕間く 乗り越えた過去

チユキ達がジムを離れた後の話…

ミノサクラはジムの中で気絶していた。

負けた後は決まって倒れてしまう。

「…………無理もないよなあ…………」

アドバイザーはサクラの父親のツクシの弟に当たる。

「…………この子の目の前で、両親が殺されてるからな…………」

アドバイザーは今でも覚えている…

「ポケモンを…信じたら良い。私はトレーナーである事を剥奪された身だ…」

あの事件で彼女を守るために、捨て身の方法を使う以外なかったのだ…

それは、危害を与えたポケモンを殺すことだった。

その記憶により…サクラにとって、負けることはその記憶を揺り動かすことになり、精神的に危ないということである。

「サクラちゃん、大丈夫？」

サクラが目を覚ました。

「…負けた……のね」

サクラは溜息をついて立ち上がる。

「無理はしちゃダメだよ？」

アドバイザーは、目を回しているハッサムのサマリーを戻させる。

「いつもごめんね、サマリー」

ボールに戻した後、労いの言葉をかける。

「もっと、…もっと強くなりたい」

サクラは拳を握った。

バトルの最中、我を忘れてしまうのをどうにかしたい気持ちはある。しかし、あの記憶が揺り動かされると自己防衛が働き、本能のバトルとなってしまう。

相手のポケモンを、幾度となく殺してきた。今回は…何とか防げた。

「…チユキさんに…感謝しなくちゃ。彼女はもう外に？」

「ええ。」

逆に教えられてしまった。お礼が言いたかった。

まだ体の感覚が戻らないサクラは立ち上がってジムの外に出る。

「…チユキさん！」

チユキはヒワダの大樹に寄りかかって身体を休めていた。

ナツマサはちょうど、フレンドリイショップに買い物に出ている、その場にいなかった。

「サクラさん？もう大丈夫なの？！」

「ええ…？」

チユキも、少し様子がおかしかった。

胸の辺りに服が切れたような痕跡がある。

「あ、私のことは気にしないで。よかった…サクラさんが無事で」

「…チユキさん、ありがとう」

突然のサクラの言葉にチユキは驚いた。

「え？」

「私、ちょっとムキになってたのかも…もっと勉強して強くなる！
ね、チユキさん。もっと強くなったらバトルしましょ？電話番号交換してくれる？」

チユキはサクラの真剣な目を見て本気の想いを受け取った。

「…解ったわ。今度はフルバトルで戦いましょう！」

二人はまた会おうといった握手を交わしてBUMP交換をした。

ゝ幕間ゝ 乗り越えた過去（後書き）

あれをBUMP交換と言うのを初めて知ったのはロンハーを見て
^ | ^ ;)

持っていないからイメージです、思いっきり（* | * ;

「2010/6/30」

Chapter・37 ウバメの森で（前書き）

ふう、取り敢えずこれからが大事なところです。

ハナオの口調は誰のオマージュか判りますか？

あるお方から意見を戴き、ポケモンの名前とニックネームが繋がらないと言われその通りだと思いました。少しずつ訂正していきます。暫くお待ち下さいね。

幕間後になりますので軽く粗筋を…

～前回までの粗筋～

チユキは辛くもツクシの娘であるサクラに勝ちました。

この日は9月27日の三時過ぎです。

さて、今回はどうなることやら…

それでは本文をどうぞ。

Chapter・37 ウバメの森で

ウバメの祠前にある細い木。

居合斬りを覚えているポケモンがいることで開かれる道である。

「フシフシー」

「バナー」

「あれ……？親方のフジキとハナオ……どこ行った??」

途方に暮れる弟子一人……

「まずい、親方に怒られるー！」

「今日は祠前で野宿だな」

「薄暗いから迷いそうだね…」

ナツマサとチユキは手を繋いでウバメの森に入るところだ。

「その点は問題ないと思うよ。入り組んでるように見えて一本道だからね」

「そうなんだ。……きゃ?! お、お化け?!」

急に目の前に現れた鉢巻きの少年に、チユキは仰天した。

「僕はれっきとした人間です…君達、トレーナー?」

半泣きながら、トレーナーが来たことで彼は目を輝かせていた。

「あなたは…?」

「申し遅れました！私、炭焼き職人タケヤキ八チの一番弟子でマキダイシンイチと言います」

偉い丁寧な口調になったが、これが普段のマキダイである。

「親方のフシギソウとフシギバナと一緒に炭焼きの木を探していたんですが、二匹がいつの間にか僕のそばからいなくなって…お願いです！二匹を探してください！」

（どうしよう、ナツマサ…）

（どっちにしろ…やらなきゃいけないだろうな）

ナツマサとチユキは小声で会話する。

（何で？）

（木材を切る技は居合斬りのほかにない。フシギソウもフシギバナも居合斬りを覚えるしな）

チユキは納得した。

（なる。見つけたら技を教えてもらえるかもしれないもんね）

（そういうこと）

「解りました、手分けして探します。チユキはフシギソウのフジキを捜して。俺はフシギバナのハナオを探す」

「任して！」

「ありがとうございます！フジキは頭に気合い鉢巻きを、ハナオは右腕に緑のバンダナを付けてます。すぐにわかると思います」

チユキは途中、二別れしている道の右を進んでいく。

「そっちお願いね！」

「気をつけるよ」

森は先へ行けば行くほど、暗く光が指さなくなる。

暗闇に思わず足がすくみそうになる。

「フジキくん、ハナオくん。何処？」

コリンクであるLinkの身体から放つ光でどうにか視界をとっている。

「俺を呼んだの、あんたか？」

ふと、後ろから声が聞こえ振り返る。

頭に炎のように燃え上がるような鉢巻を付けた、少しぶっきらぼうそうなフシギソウがいた。

525

「あなたがフジキくんね？御弟子さんが一人で困ってたわよ」

「シンイチが？…ったく、しょうがねえなアイツ」

フジキはフツと溜息をついて、チユキの足元に寄り付く。

「戻るんだろ？道案内するから付いてきな」

「あ、はいっ！行くよ、Link」

「はあい！かつこいいですね、フジキさん」

Linkは二人の傍に駆け寄る。

その声に頬を染めるフジキ。

「そーかあ？んなこたねえよ」

チユキはフ、と顔を緩ませる。

すると、遠くからドシン、ドシンと重い足音が聞こえた。

「兄貴だ。向こうの道に行ってたのか」

「お兄さんって、ハナオさん？」

「ん……………ん?!」

フジキは、信じられないというようにチユキを二度見した。

Linkはチユキに力無く呟く。

「お腹空きましたあ…」

「もう少しで合流するからね、頑張れ！」

「あんた、銀色の魂を持つてんのか?!」

フジキはやつと声を出した。

「へ？」

「え！チユキさんが?!」

Linkは銀色の魂という言葉聞いたことがあった。

「おまえ、知ってるのか？」

「僕を作った人が話してた。ルギアの魂に共鳴する人の事をいうんだって…そんな者は人じゃない、化け物だって。でも、チユキさんは化け物じゃないよ！こんなに優しいんだもん、僕はチユキさんを

信じるから」

フジキは目を丸くし、豪快に笑った。

「ハッハッハッハッハ！ やっぱりまだ若造だな！ 銀色の魂つてのはな」

「それぐらいにしておけ、フジキ」

分岐点に戻ると同じタイミングで、低い重さのある声が響く。

「あ、兄貴！」

フジキはたじろいだ。それも当然で、その声はフシギバナのハナオのものだったからだ。右腕の緑のバンダナはかなりぼろぼろだった。

「ほお…、そなたが銀色の魂を。この者は金色の心を……なんと、不思議なことか」

ハナオはチユキを見据えた。

ハナオの傍にはナツマサがいる。なにやら、動揺しているようだ。

「あなたは知っているんですか？銀色の魂と金色の心の意味を……」

「古くから伝えられている、ジヨウトの言の葉さ。詳しくは主人がよく知っておるから話を聞くと良い」

ハナオは歩みはじめた。

フジキと、ナツマサ・ラクライのクク、チユキ・Linkはその後を追う。

金色の心と銀色の魂の意味を知るのはもうすぐ……

Chapter・37 ウバメの森で（後書き）

ハナオ、判りましたか？

鎮西の乙事主その人の語り口調をモチーフにしています。

もののけ姫見ながら書いてたのでね（＾－＾；

フジキは……まんまイメージです。

何かヤンキーっぽくなってしまいましたな…反省。

「2010/7/4」

Chapter・38 ウバメの悪戯っ子（前書き）

今回はウバメの森に夜な夜な出るといわれるとあるポケモンを誰かが確保します。

実は、これ大事な伏線だったりします。

それではどうぞ
↑

-

Chapter・38 ウバメの悪戯っ子

親方のタケヤキハチは胸騒ぎを感じたらしく、もう一匹の手持ちであるカモネギのネギマを出してウバメの森へとやって来ていた。

「おー……いたし。おい、シンイチ」

シンイチは親方の声を聞いて固まった。

「親方…あのう……その、ですね…」

キハチは、ああと察しが付いたように手を叩いた。

「フジキとハナオ見失ったのか」

「う えっ！？」

ずばり凶星を付かれたシンイチは仰天した。

「俺も親方のカモとネギを見失ったことあるからな（ハ・ハ・ハ；…あ、戻ってきた」

道の向こうから、フシギソウとフシギバナが二人のトレーナーを伴って戻ってくるのを見つけた。

「あ、あの人が親方さんかな？」

先に気付いたのはチユキだった。いたって冷静である。

「…チユキ、聞くつもりか？」

ナツマサは険しい表情でチユキを見ていた。

「聞かずにはいられないじゃない。Wildの持ち主のキリカさんだって知ってたのよ？」

チユキはバシッと意見を突き立てた。

正論に言葉を無くすナツマサ。

「君達がフジキとハナオを見つけてくれたんだね！ありがとうございます。もう夕暮れですし、明日早く出れば一日でウバメを抜けられますよ。今日は私たちの家で休んで行ってください」

キハチはチユキとナツマサに優しく話し掛けた。

チユキはお辞儀をして、

「ありがとうございます。あの、お聞きしたい事があるのですが…宜しいでしょうか？」

と尋ねる。

「とにかく森を抜けよう。悪戯っ子がそろそろ来そうだ」

キハチは口端に笑顔を浮かべながら、レベルボールにフシギバナのハナオを、ネストボールにフシギソウのフジキを戻す。

「君達の電気ポケモンは出して置いて。ネギマ、燕返し！」

親方のカモネギが虫ポケモン達を薙ぎ払う。

チユキもポケモンの気配を察して、Linkに指示を出す。

「左前に炎の牙！」

「ハイです！えいっ！」

炎の牙を喰らったのは草ポケモンのようだった。

途端、背筋に寒気が走った。

「アナタハダアレ？ワタシは…ココヨ」

チユキの真後ろから凍るような声が聞こえ…振り返る……

「ゴーストエア、ナギハラエ！」

チユキは見る間もなく、怪しい風を体ゴーストエアに受けた。

「？！きゃあっ！」

チユキは倒れる。

「チユキ！クク、スパーク！」

その相手に攻撃をするナツマサ。

「はいつ、はーあっ！」

ラクライの体に電気が集まり、そのまま相手に向かう。

「キャア！イッタイワネエ…！コナユキヨ！」

技の粉雪が全員を襲う。

「来たみたいだね、ネギマ守る！」

親方のカモネギが素早くみんなの前に出て、粉雪を押し止める。

「Link、ネギマさんから技を引き継いで！」

「騙し討ちから辻斬り！」

ナツマサの指示通り、コリンクがカモネギから守るの壁を引き継いで、カモネギは相手の背後に素早く回り込む。

「終わりの時間だね？」

ネギマの声は、低かった。

「イツ、イヤアアアアアア！」

それは超至近距離から技を喰らい、倒れ込んでしまう。

キハチ親方はスピードボールをそのポケモンのおでこにぶつける。

ユラ…

ユラ…

ユラ…

ポウン、と開閉スイッチの点滅が消えるとキハチ親方はそのボール

を拾い上げる。

「とうとう捕まえたぞ。観念するんだな」

「あいたたたた…なにがあつたの？」

チユキには状況が全く解らなかった。

チユキの P - p h o n e が起動する。

『全国図鑑 N u m b e r 4 7 8。ユキメノコ。雪国ポケモン。高さ
1 . 3 m、重さ 2 6 . 6 k g
』

「えーっと、“ - 五十度の冷気を吐いて、相手を凍らせる。雪山で
遭難した女性の生まれ変わりと言う言い伝えが雪の多い土地に残る。
” …… 氷とゴーストの意外な組み合わせね。」

「どういう訳か、一週間前からウバメの森に迷い込んでね。僕が捕
まえることになってたんだ。ガンテツさんからスピードボールを貰
つてたのはこいつが驚くほど素早くてね…悪戯っ子も捕まえたし、
帰りましよう」

四人と三匹はやつと帰路についた。

-

Chapter・38 ウバメの悪戯っ子（後書き）

チユキ「ちよつとお、金色の心と銀色の魂の話は？」

次回な。

ナツマサ「モーゼの？」

それは十戒。次回な。

チユキ「男同士でしょーもない漫才しないの！」

しょうもないって…！（泣）

ナツマサ「結構面白いんだけどな。次回と十戒」

チユキ「何の意味もないでしょ、それ。」

何の意味もない？その時だった。私の頭の中で構成されていた話が崩れ落ちていった！もう元には戻れない、引き返せない！

ナツマサ「もう一度話を組み立て直すのが、作家としてやるべき事なのだ！」

チユキ「どうしたの？」

語ってるんだよ。

チユキ「…固まったウソツキーに語ってどうするの？」

ウソツキー「そして僕は今日も木の振りをする。」

チユキ「あなたも?!」

「2010/7/7」

Chapter・39 輝きを持つ者

炭焼き小屋につくと、町は夜の顔を見せていた。

炭の匂いを嗅ぐコリンクのLinkとラクライのクク。

なんだか妙に気に入ったらしい。

「さて、まずは自己紹介だな。私は炭焼き親方二代目のタケヤキハチだ」

「私はサカキチユキです」

「俺はオーキドナツマサです」

親方は一呼吸置いて、

「それで、聞きたいことと言っつのは？」

と話を戻す。

「はい。金色の心と銀色の魂、二つの逸話について、何かご存知ありませんか？」

チユキは真剣な顔でタケヤ親方を見る。

親方は一瞬顔付きを変えたが、すぐに戻す。

「その話は、特別な事がない限り、知らない人には話せないんだ。でも、なんでかな？」

「私は銀色の魂を、ナツマサは金色の心を受け継いでいます。ハナオさんから聞いて、親方さんなら何か詳しいことを話して下さいませんか、と…」

キハチ親方は、なるほど、と呟いて二人をじっと見つめる。

「…チユキちゃんはアルフェウスの血を、ナツマサくんはベータウ口の血を受け継いでいるんだね」

「アルフェウスに…」

「ベータウロ？」

チユキとナツマサは顔を見合わせる。

聞いたことのないものだから…

「その昔、アルセウスは二体いた。白い身体の絶対神と色の違う守護神が。色の違う方は自らの身体を二つの身体に分裂する術を持っていた。その個体はアルファとベータという証が身体に刻み込まれている。それからアルフェウス、ベータウロと名付けられたんだ

「1914年、アルセウスに謀叛を働いたポケモンがいた。…レシラムとゼクロスという二体の龍神だ。絶対神を護る二体は必死に戦った…先に力尽きてしまったのがアルフェウスだった

「しかし彼と共にレシラムも降り立った。彼の力は一瞬間に多大な影響を与えた。…それが、第一ポケモン大戦の引き金となったと言われている。アルフェウスはその闘いには参加しなかった…

「アルフェウスは人に化け、力の無いものに慈悲をかけ、傷を癒して至る場所を流浪していった。しかし、一瞬の隙を突かれてレシラムの急襲を受けてしまった。同じ頃、ベータウロがゼクロスを封印することに成功した。ベータウロもまたこの地に赴いた…

「この酷い地の有様を見たベータウロは、アルフェウスを探す旅を始めた。しかし出逢ったのはレシラムだった…ベータウロには闘う

力は残っていなかった。アルフェウスとベータウロが再会し、悪を抑えるには抑えたのはつい最近なんだよ。

「だけど、最近になってこの話が違ふことが言われたんだ。レシラムの姿を模した何者かが龍神を語り、ゼクロスを唆していたことが本物のレシラムから聞いて明らかになったらしい。今は遠くのイッシュ地方でレシラムとゼクロスは体力の回復を計っていると聞く。

「金色の心は空の王であるホウオウを呼び覚まし、レシラムの力を回復する術が、銀色の魂は海の長であるルギアを呼び覚まし、ゼクロスの力を回復する術を持っているんだよ。その方法は詳しくは判らないんだけどね。

「金色の心は覚醒してずいぶん日が経っているね。逆に、銀色の魂は日が浅い。ジムリーダーを倒していく事で力は呼び覚まされると思うよ。金色の心はこころ一番の気持ちの踏み込みが足りないかも…銀色の魂と響き合って調和されると思う。君達の旅はこれからだ！

「さて、ここまで話したけれど、何か判らないことはないかな？」

一息に話してくれた親方は、シンイチのいれた冷めたお茶を飲み干す。

チユキとナツマサは互いに顔を見合わせた。開いた口が塞がらない。ただただ驚きを隠せなかった。

レシラムとゼクロス、イツシュ地方など聞き覚えの無い物ばかりで、何処から聞いたらいいのか解らない。

「あ、そうか。レシラムはテラボルテージと言う特性を持つ雷龍、ゼクロスはターボブレイズと言う特性を持つ炎龍なんだ。イツシュはアメリカ西海岸にある地方なんだよ。それにホウオウとルギアが彼等に関わっていると言うのは諸説あってね… 本当の理由は未だ解明されていないんだ」

「キャモネツ！（まだまだ判らないことがいっぱいなんだな！）」

気づけば十時を回っていた。

「もうこんな時間か。君達も今日は疲れたろう？ シンイチに布団を用意させた。もうおやすみなさい」

キハチ親方は有無を言わずに話を終わらせた。

-

Chapter・40 決意の朝（前書き）

〽前回のあらすじ〽

レシラムとゼクロスに自分たちが関わっている事を知ったチユキとナツマサ。

眠れない夜を過ごした二人だった…

そして…9月28日。

Chapter・40 決意の朝

夜明け前に布団から起きあがったのは、ナツマサだった。

まだ夜の明けきらない空はライラックに染まっている。

遠くの方で、虹色に輝く炎のポケモンを見つけた。

はっと気づいてよく見ようとしたが、もうそのポケモンの姿は見えなくなっていた。

「…ナツマサ様？」

外で寝ていたトゲピーのトトが、起きてきた。

「何を…考えておられたのですか？」

ナツマサは黙ったままだった。

「私を持ち逃げしたのは、きつと呼ばれたからですね。運命に」

トトは優しく声を掛ける。

「ホウオウの透明な心に、あなたはもう辿り着いています。後はあなた自身がどこまで成長するかで決まってくるでしょう」

ナツマサはまだ何も言わず、次第に明るくなっていく空を見つめていた。

「…だからといって、レシラムを回復する手段は何にもわかつちゃいないんだろ？そもそもなんで、レシラムはあの場に居なかったんだ？」

「レシラムは…ホウオウの御前で死に絶えたのです。…老衰でした。ホウオウはそれを知っていたから、助けるために舞い降りしましたの…それが、1914年の10月だったのです…絶命日と悪魔が降りてきた日が、同じなのです」

ナツマサはトトを持ち上げる。

「お前は…一体何者なんだ？」

「今はまだ言えませんの。…いずれお教えいたしますわ」

申し訳なさそうな表情で俯く。

「……………そうか」

「チユキ様、あなたの事をひどく心配してらっしゃいましたのよ？」

ナツマサはもう少しで太陽が出る空を一瞬見上げて、炭焼き小屋に戻った。

「チユキ…？あれ、…………チユキ？？」

十五分前には寝ていた筈のチユキの姿が、どこにもない。

* * * * *

その十分前、チユキは起き上がってFineを抱いてそつと外に出た。

「私…これからすごく不安なの。だって、レシラムになった悪魔がいるんだよね…」

「…正義を潰したがるのがそいつのやり方だ。だからと言って逃げるのは違うぞ。強くなる事って、魂の強さのことだから」

Fineは、何とかしてチユキの気持ちを奮い立たせようと言葉を搜すが…その先が続かない。

「でもね…みんなその魂のどこかに闇を持ってる。それに打ち負けないようにするにはどうすればいいのかな…」

「…“見えるところによつてではなく、信仰によつて歩む”。この言葉はな、情報に踊らされない事が必要と言つ事を指しているんだ。…信じる気持ちが道を切り開くんだ」

「…信じる…って」

「マスターは、ナツマサの事を心から愛してる…だろ？それって何より強い想いだと思う。それに…誰かがいつも傍にいて事ほど、単純だけど強い力になる時だってあるんだ」

Fineはチユキの腕の中で、彼女を力強い目で見上げる。

「皆がそう思ってる。誰よりもマスターを慕っているのは俺たちだからな」

チユキはFineを抱き締めた。暖かい…優しい色の魂だ。

「…ここにいたのか」

不意に、背中から声が聞こえてチユキは振り返った。

ナツマサだ。

「ナツマサ…私、強くなる。強くなって、皆を護りたいの。助けたいの」

チユキのその言葉には力強さが宿っていた。

「俺らがやらなきゃならないのは…DARKERとTIIIDAの二

つの悪を倒すってことだ」

「うん。レシラムとゼクロスの力を完全に回復させるのも私たちの仕事だね」

最初は、ただ漠然と町を回ればいいと…そう思っていた。

旅の目的なんて、定まらないまま飛び出したチユキ。

父親を探すと言う最大の目的を、ただ当てもなく求め続けていたナツマサ。

二人の出会いはい偶然でもなければ必然でもない。

―宿命と言う名の運命だった。

二人の、本当の旅は…ここヒワダから始まるのだ。

Chapter・40 決意の朝（後書き）

この話で、一部が終わりとなります。

これから彼らを待ち受けるものはとても大きなものです。

二人の決意は、第二部へ護るための闘いで大きなうねりとなる事でしょう。

彼らの強さを、今後の作品ともども見守ってください。

では、これにて第一部へ争抗×慈愛を終わりとします。

ここまでご拝読ありがとうございました。

（2009/10/31 2010/7/22）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4698i/>

HEART & SOUL ~ 争坑 × 慈愛

2011年3月22日15時47分発行